

怒濤

其

三十一

伊藤銀月

明治 42 年 4 月 28 日 内表

「人殺しがあるよ」「何、人殺し?」「さうさ、人殺しさ」「おい、冗談ぢやアないせ、人殺しッて云やア、人間が人間を殺した事だらう、大變な事ぢやアないか、それをさうさ人殺しさんなんて、平気で済ましてる奴があるか」「さう云やアさうだけれども」「何所迄呑氣だか判りやアしない、一體誰が誰を殺したんだ」「それが判らないんだ」「何、判らない、そんなら人殺しが何所にあるんだ」「それも判らない」「それも判らないたア何だえ、人を馬鹿にしてるぢやアないか、場所は何所で、誰が誰を殺したか判らなけれア、人殺しになつて居ないぢやアないか、確りし給へ」「だつて判らないんだ」「おい、君は夢を見てるんだらう、まだ目が覺めないんだらう、もう一遍顔を洗ひ直して來給へ」

1
八月中旬の曇つて蒸暑い朝、鎌倉坂の下の海岸に構へた旅館星月樓の二階の一間で、まだ顔も洗はずに、煙草を吹かし乍ら新聞を見て居る男が、詰らなさうに苦笑ひしながら劍突を喰はせると、今

洗つて来たばかりの顔で、手拭と齒磨楊枝とを片手に提げ、茫乎欄干に腰を掛けて、座敷を覗込み、
 覺束ない調子で物を云つて居た男は、不服さうに頭を擧げた「それア、人殺しがあると云ふ以上、其
 場所も無ければならないし、殺した者も殺された者も無ければならないさ」「無論さ」座敷の中の男
 は、冷笑を含んだ目で見上げる「けれども、何所で誰が誰を殺したかは、まだ僕に判らない、唯だ、
 人殺しがあると云ふだけの事を聞いたんだから」「何だ詰らない、僕は人殺しを君が見て来たのかと
 思つた、そんなら、人殺しがあるさうだつて云やアいののに、人殺しがあるつて斷言するからいけな
 いんだ」「いや、人殺したの自殺だの情死だのは、此頃の流行なんだから、僕はそれを事實と信する」
 欄干の人は何所迄も眞面目である「ちやア、これから人殺しを捜しに出やうか、人殺しは何所だ、人
 殺しは無いかつて往來を觸れて歩いたらよからう」座敷の人は新聞を放り出して、調慮面に立上つた
 上草履を突掛けて縁側へ出たが、欄干のひと少し離れて、海に向つて突立ち、伸止るやうに肩を聳
 やかした「いやな天気だねえ、海が沸いてるやうに見える、成程、こんな天気ぢやア、狂人も人殺し
 も出やう、人殺し日和だ、別けても此由井が濱なんか、人殺しや情死にやア持つて来いの場所だ」こ
 れを聞くと欄干の人も腰を上げて向を變へ、座敷のひと並んで、海に面を向けた、薄日が漏れるので
 二人の顔がいやに黄ばんで光る「人殺しがあるつて云ふ聲が、不圖耳へ觸れたやうだから、先々月は
 情死のあつた由井が濱だし、多分同じ所だらうと思つて、顔を洗はない中に、散歩ながら出て見たん

だ」「やれ、御苦勞」「まア、混返さすに聞き給へ、そこで、濱邊へ出て、近くは靈山が崎から、
 遠くは林木座に至る迄、山部赤人が田子の浦へ出たやうな構へで、すうツと見渡したんだ」「何も無
 かつたらう」「海草の波に打上げられたのがあつた」「おい、君の方が横道へ反れちやアいけな
 い」「君が餘り混返すからさ」「混返さすに謹聽するよ」「そんなら話して使はさう、實は、御察し
 の通り、人集りもして居なければ、死骸らしい物も横たはつて居ない、見通しの濱邊だから直ぐ判る
 んだ、煙草を一本呉れ」「説話はそれツツかりか」「さうだ」「こん畜生、人を昇ぎやアがつたな」「け
 れども、誰だか判らないが、階下で確かに人殺しがあるつて云つたやうだから、女中を呼んで聞いて
 見やう」「むい、そんな事が無いつて云つたら、罰として、貴様に基の相手を申付けろぞ」「へほ基
 の相手は眞平御免だが、兎に角呼んで聞かう」と呼鐘の胸を押す
 女中が心得顔に、茶と煙草盆とを持つて来る「御早う御座います」「早くもあるまい、もう九時半
 だ、時に姉さん、先刻階下で誰か、人殺しがあるつて云つたやうだね」「え、御座いますさうです
 」「さうら見ろ、確にさう云つたらう、所は鎌倉かえ」「い、え、まだ何所ですか判りませんが御座い
 ます、何でも、葉山の方から今朝参つた人が話しましたさうで御座いますけれども、停車場の人が汽
 車の中の話聞きかちつただけださうですから、精しい事は判りませんが御座います、葉山よりもつ
 と先の海岸にあつた事だらうとも申します」女中の云ふ事も矢張要領を得ない

男は、二人共十分に海水浴をやり續けたらしく、同じ色に染上つて居るが、假に欄干の人と呼んだのは、細く高くつて較青みを帯び、座敷の人と名づけたのは、太く短くつて比較的赤みを帯んで居る。どちらも宿の貸浴衣を着て居るが、卒業してからいくらも経たない學生上りらしく見えるのである。今迄茶かしながら閑手になつて居た座敷の人が、急に腕を組んで考へ始めた。「む、葉山の先は秋谷ツツ所だらう」「左様で御座います」「ねえ君、秋谷なら玉井の別荘のある所で、吉田が先月から行つてゐるんだらう」「む、さうだ、吉田へ聞いてやると判るだらう」「欄干の人は欄干を打つて叫ぶ「吉田が殺されたのかも知れないせ」「なに、彼奴が殺した方だらう」「真逆」兩人一度に笑ひ出す。「兎に角、これを機會に吉田へ手紙をやらう」「さうしやう」話が了つて、欄干の人は座敷へ入り、座敷の人は階下へ顔を洗ひに降りる、海は、大儀さうな緩んだ響で、責めてこんな事でもして退屈を忘れやうと云ふやうに岸を打つて居る。

其 二

暑さが殊に厳しい日の午前十一時頃、葉山の御用邸前で乗合馬車を降りた法學士吉田俊郎は、中味の少なうな、絨製製の旅行靴を左に提げ、右には校欄竹のステッキを打振りつゝ、長者が崎の方へ向つて、威勢よく歩みを進めた。

シルバーストロウの買立ての帽子は美事に日に輝き、新調の夏洋服は品質の好いセルで、風と淡いオリブとの細かい辨慶縞を見せ、赤小豆色の靴との配合が如何にも鮮かである、學校も新に卒業し、學士にも新になり、洋服も新しければ頭腦も新しい、これから財界の荒波に身を投じ、採まれ採まれ、腕も錆び身にも錆が着いたら、進んで國家の財政にも當り、目覺しい働きをして、日本に吉田某あるを知らしめやうと、滿身唯だ活氣と希望とばかりで、對岸の山にのみ氣を注ぎ、途中にどんな潮流があるか、どんな暗礁があるか、乃至どんな悪魚が棲んで居るか、また世間の事に經驗の無い身は、一切そんな問題を眼中に置かないのである、強き日光を浴び、涼しい海の風に吹かれ、長者園を横に見て、傾斜の緩い坂路を踴躍るやうに昇つて行く状態は、身體が「ペネ」仕掛になつて居て、自然に大地から弾かれ上がるかと思はれるばかりである、こんな時代が人間の花である。坂路を昇り盡すと、左は山を切り崩した崖で、右は、巖の上に松が生えた長者が崎の、高く且つ薄く、手斧で削られたやうな形状を以つて、長く海の中に突出て居るを見るのである、此所から振り返ると、脚の下の葉山から返子、鎌倉、江の島に掛け、遠くは真鶴、伊東に至る迄、長い曲線を描いて居る豆相の海岸を、一目に見渡すことが出来る、紫なるは箱根に天城、白きは云ふ迄も無く富士である、俊郎は、靴を下に置きステッキを脇挟んで、ポケットから新しいハンケチを取出し、額と頸との汗を拭いた「あゝ、實に絶景だ」と思はず獨語したが不圖目に著くは、ペンキ塗の板に、是より

海陸何千問とかの間は、寫真に撮つても不可ないし、繪に描いても不可ない、又文章にしても不可ないとの意味を記してある、陸軍省の掲示である

それを見ると、俊郎は急に興が醒めて、そこへに靴を取り上げ、再び踊躍るやうに威勢の好い歩みを進めたが、忽ち又直と立停まつた、今度は、長者が崎の反對の側を見る位置で、絶壁の中腹に引かれた、だら／＼降りの路をば、切石で嚴重に縁を疊み、なほも危なくないやうにと欄干を設けてあるのである

此方へ向くと景色は丸で一變して、天神島から長井、小網代、三崎の城が島迄も見える、欄干から真直に數丈の下には、断えず崩れて轉がり込む岩片をば、波の白齒が断えず噛み碎いて粉末にして居る、北條早雲が三浦道寸を破つた、有名なる大崩の古戰場は此所である「いやア、此方も好い」、俊郎は此所でも亦景色を賞めるのである

此邊には濱菊が多い、真直に立つた莖に裏面が銀泥を塗つたやうな雅致のある葉を帯びて、あつさりした白い花を一輪、笠のやうに頂いた姿に、棄て難い趣があるのである、海岸の或る場所に限られて居るだけに、此花の價値が貴く思はれる、俊郎は三本ばかり大事さうに折取つて、こればかりは唯一つの古びた持物なる靴に持添へた

「旦那、もう何時でせう」唐突に聲が掛つたので、濱菊を折取つた場所を離れながら、振向くと、白

地の手拭で無難作に頭を包み、盆の凹に結び目を拵へた、四十餘りの黒い女が、大きな背負籠といふものを背にし、素足に冷飯草履を穿して、往來の真中に突立つて居るのである、俊郎は、暫と懐中時計を見て「丁度十一時半」と答へたが、其女が自分と反對の方向から來た者と思ふや「お内儀さんは何所だえ」と、直ぐそれに續けた「わたしけえ、わたし秋谷で御座えますア」「秋谷迄はまだ何里ぐらゐあるの」「何里も無えですよ、直き彼所に見えてますア」「玉井と云ふ別荘があるだらう」「あゝ、玉井さんの別荘けえ、御用邸の手前で、右ツ側の山手ですア、御出でなさると直ぐ判りますよ」「秋谷にも御用邸があるの」俊郎は案外に思つたのである「えゝ、小せえけど御座えます、葉山から時々貴い御方が御出でになるですよ、まア葉山の御用邸の離座敷と思やア、まちげえねえでせう、いくら離れたつて、日本の國は、海も山もみんな天子様の御屋敷内ですからねえ」此嬉劇合に乙な事を云ふ「うむ、お内儀さんは面白い人だ、僕は、暑い中玉井の別荘に居るんだから、其中又お内儀さんと逢ふこともあるだらう、いやどうも有難う」と行き掛ける「秋谷で、久平の荒物店ツて御聞きなされア、直ぐ判りますから、どうぞ買え物に御出でなすつて下せえまし、煙草でも、石鹼でも、齒磨でも、御菓子でも、何でも御座えますよ」「それア調法でいゝ、貳度買ひに行くと」「ぢやア、御出でなさいまし」

此些かの暇潰しは、俊郎に取つて少なからぬ興味であつた、秋谷と云ふ所は思つたより面白い所で

此林に代表された秋谷の人間は皆面白い氣性だらうと思はれた。進める足は益々軽い。

其 三

「旦那、何か落ちましたよ」絶壁の上の欄干に背負籠を載せて、肩を揺り直して居る娘は、歩みを進める俊郎の背後から聲を掛けた「有難う」と云つて拾つたのは、濱菊の花の一莖である「旦那、そんな花を何になせえます」何にするツて事も無いが、綺麗だから折つたのさ」「旦那花が御好きなら我家の娘を山へ遣つて、鬼百合を取らせませうか」鬼百合ツて、あの大きな白い花の事だらう、蕪の高……」「え、酷く臭え花ですか、あの蕪の粉が顔へでも着物へでも食ツ附いたら、ちつとやそつと洗つたつて、なか／＼落ちやアしませんですよ、あんな物を、東京から御出でなさる御客様が、何だつて欲しがりなさるでせうねえ」俊郎は我知らず三足ばかり後戻りした「其臭い花が、僕にやア何の花よりも好いんだ、是非娘さんに取らして下さい、御禮をするから」「御禮なんか要りませんですよ、我家のお磁の阿魔は、山へ行つたり海へ入つたりする事が、何より好きなんですから」と、重さうな背負籠を、ぎい／＼云はして揺り上げながら、欄干を離れて道路の真中へ出た、手足は黒鐵で鍛えたやうに日と汐とに焼け、白地の手拭に映り合ふ顔の黒さも亦念入れて染め上げたやうではあるが、鼻裏通り口元濡つて、涼しい目に昔の愛嬌が残つて居る、若し此海岸の生れであるとするれば二十餘年

の昔には、若い漁師共が月旦の第一位に置かれた評判娘であつたのかも知れないと思はれる。

「娘さんは幾歳になるの」と、凝と娘の顔を眺めつゝ訊ねた「もう十七になりますけど、一向赤ん坊で仕様が御座えませんが、ですから、山へ行つたり、海へ入つたりはつかりして、頭の毛を振亂して、真黒になつて、平氣で居るでさア」「其方が却つて好いんだよ」さも心地好さうな微笑と共に、俊郎は昂然胸を反らした

「ぢやア、明日でも、お磁に鬼百合を持たして上げませう」「いや、明日の夕方僕が貰ひに行く、買物ながら」これが別れの挨拶になつて、双方後向に離れると、俊郎は前よりも一層威勢よく歩き出した

山の腰の、海を適度に見降す所を、緩い波線に高低する道路、それが幾程も無く歩き盡くされると山が切れて、道路は内の方へ弓様に曲り、溪流に架つた橋を中心に幾軒かの人家が、段をなして高低して居る、但し、聞いて見ると此所は秋谷ではない、秋谷は今一つ先である

又もや山の腰の道路に出て、今度は、海手の方にも土地の餘裕がある所を暫く行くと、前面は、道路が次第に高くなつて、果ては山の彼方へ廻つて見えなくなり、其山の角の出ツ張つた餘勢が、海を衝いて小さい半島をなして居る所に、鯉木を載せられた極めて古風な高雅の茅葺屋根が見える

それが或は御用邸かも知れぬと氣が附いたので、其手前の山手を見ると、果して、小松に取巻かれ

た建物がある、急いで其前へ行つて、門の柱へ目を注げば、玉井別邸と記した表札はまだ新しい耳門を開けて、砂路を斜に二十間ばかり爪先上りに進み、勝手口に向つて「爺や」と大きな聲で呼ぶ

のろ／＼出て来た實直らしい老人、しよぼ／＼した目で格子戸の中から覗いたが「お、若旦那様で被在いますか」と急にあたふたして、がらりと開けた、これは、東京の富豪玉井家に飼殺しの仁蔵爺々と云ふ老僕で、此春秋谷に別荘が出来てから、女房のお作婆々と二人で、番人に來て居るのである

「成程これアい、所だ」一さあどうぞ、御上りなすつて下さいまし、旦那様や皆さんは、後から被入るんで御座いますか」「いや、叔父さんは、別荘が出来た時に被入たから、此夏は多分遠原の方へでも向きを御變へになるだらう、其代り、一週間はかし經つたら、喜代さんが来る筈だ、今日は僕一人さ事に依つたら、涼しくなる迄厄介になるかも知れないよ」「左様で被在いますか、まア其御靴を御出しなさいまし、能くまあ御歩行で被入りましたこと、早速御風呂を沸かしますせう、婆さんや、お作や」老人蒼蠅い程に世話を焼く

其 四

吉田俊郎は、富豪玉井家の令嬢喜代子と許縁の仲である、玉井の主人照明は、空拳から起つて一代に數百萬の富を作つた豪の者であるが、彼が今日あるは、俊郎の亡父俊彦に立て、貰つた方案の御蔭であるからとて、俊彦が妻に先立たれ、男親一個の手で伴俊郎を育て、居る中に、不治の難病に罹つたので、照明はそれを自分方へ引取つて手厚く看護し、愈々見込が無いと云ふ時に、俊郎は臆度引受けて、最高の教育を受けさせた上、自分の娘喜代子を娶せ、自分が後楯になつて、立派に吉田の家を立てさせるからと、耻かしがる本人同士を病床に呼び寄せて申渡し、病人に安心して目を瞑らしたのである

其時は、今から七年前で、俊郎が十八喜代子は十三の冬であつた、それ以來俊郎は、玉井家の子息同様に取扱はれて、何不足無く月日を送り、大學も成績好く卒業し、社會に出るには金力を背負つた後楯があるし、所謂貴婦人たるべき要素を十分に具へた、名高い美人の許縁はあるし、天下の幸福を一身に集め得た者として、人に羨まれ嫉まれる身の上となつたが、扱て、本人の俊郎には、これぞ人知れの不満と煩悶とがあるのである、其父が才を懷いて自ら發せず、徒らに他人の用をなすのみで、一生を未成品で終つた、偏屈の氣性を受け繼いだのらしく、叔父と呼ぶ玉井の力を借りて社會に出たくはなく、腕一本で低い所から叩き上げやうとの意氣込がある、それに、喜代子が、十歳ぐらゐ迄は中等以下の生活の家で育つて来た身であることも忘れて、唯だ虚榮心ばかりを燃やし、人に誇りた

世に時めきたい心の外、何の趣意も目的も無いことを看破り、且つ其れ同の年齢と共に加はつて来るのを、淺ましと観じてから、眞面目に之を未來の妻と思ふだけに、胸の底の惱みは一入である。

悪く云へば、虚榮の家庭に、賓客の如く居候の如く、繼子の如く、妙な地位に置かれて月日を送つて来たので、俊郎の性格は之に刺戟されて益々偏屈に傾き、毫も之に感化される事が出来なかつた。さればとて、何方かと云へば常識に富んだ方であるから、世に強ねた突飛な真似もし得ない、此夏も諸方の避暑地に設けられてある玉井家の別荘の中、一番人の蒼蠅くさい所を選び、静に讀書し、心の儘に頭腦と身體とを養はうと、此秋谷を指して来たのである、なほ一つ、俊郎が秋谷の別荘を擇んだ理由を認めなければならぬ、久しく目白の本邸に仕へて、菜園を受持つて居た仁藏夫婦は、屋敷中では、俊郎と氣が合ひ話が合ふ仲で、心の底から眞誠に俊郎を尊敬し飾りの無い親切を運んで呉れたのは、此二人だけであつたので、避暑地を擇ぶに當り第一に此老夫婦が番をして居る別荘を床しく思はざるを得なかつたのである。

秋谷の別荘に來た俊郎は、田舎の里親に歓迎された心地である、彼は、玄關の傍なる四疊半の小座敷を自分の居間と定め、格子が邪魔になる肱掛窓から海を切れくに見下して、面を吹く涼風を味ひ始めた、家は茅葺の二棟で、御用邸に遠慮をしたのであらう、大きいけれども餘り凝つた普請ではない。

茶上煙草盆よと婆々は立騒ぐ、爺々は婆々を呼んで何か打合せの様子であつたが、應て足早に門の外へ出やうとする、それを俊郎は呼び返した。

「爺や、何か買ひに行くの」「へえ、御魚を見て參らうと思ひます」「それなら、まあ見合はしてお呉れ、僕は御腹が空いたから、何でも有合の物で食べさせて貰ひたい」「だつて、爺々婆々の食べる物じか御座いませんですよ、疊纏に胡瓜の御香々」「結構々々、それで上等、晩には鮮しい魚を買つて貰つて、三人で食べやうが、今はそれで澤山だよ」「それぢやア」と云つて爺々は家へ入る。

俊郎は手早く洋服を脱いで、靴から綿の單衣と紺絞の兵子帯とを無雜作に脱ぎ出し、婆々が氣を利かして擽つて出した濡手拭で顔と背中とを氣持が好さうに拭き、著物に手を通して、くるくると兵子帯を捲き着けたが「彼方の御座敷へ持つて參つて、擧げて置ませう」と、脱棄した洋服を運び去らうとする婆々を「ちよつと」と待たして、上著のボンケットへ手を入れ、紙入と敷嶋とを取出した、「まあ、これだけ預かつて置いて、買物の御金にして御呉れ、其中に喜代さんが來たら、食べ物や何かをどつさり持込むだらうが、僕は爺やと婆やへの御土産も忘れた、眞誠に氣の利かない奴だねえ」

四五枚の紙幣は、風に吹き飛ばされてそこらに散らばつた、それだけ此海岸は涼しいのである。爺々と婆々とは、平生自分の給金と、それから一ヶ月の入費を計つて渡される食料とに依つて、生活して居るので、かうして一人でも東京から人が來ると、別に金を渡され、其中から役得が出るので

ある、但し玉井家の主人夫婦や娘などが来る段になると、仲働からお三、料理人迄も附添ふから、爺や婆々はすつと地位が下つて、走り使ひや水汲み、家の周囲の掃除ぐらゐを引受け、門の横手の小松の中に建てられた六疊一間の家を巢にして、母家へ履物を脱いで上がることは滅多に無いのである

其五

秋谷の別荘へ来た翌る日の夕方、俊郎は縮の浴衣に絹絞の兵帯帯で、大事に鞆の底に忍ばして置いた紙包から、見たばかりでも涎の垂りさうな極上等の葉巻煙草を一本抜き出し、蠟マツチを摺つて丁事に火を附け、樂しさうに吸つて浸々と味ひ、紫の色深い煙を得意げに吐き出して、お作婆々が穿き古した山桐の女下駄を不器用に突掛け、「買物ながら、一時間ばかり散歩して来るよ」と云ひ棄て、門外へ出た

門外は、葉巻の煙と同じ色の夕霧で、海も空も皆紫に掩はれ、松其他の緑なるものは紺青に染まり、富士だけが、朱紅色の古びたやうな外観を以つて、半天に彷彿として居る

近所の別荘に来て居るらしい西洋人の夫婦が、護謨輪附の乳母車へ、ぼちや／＼した赤ん坊を乗せて、徐に推しながら前向から来た、西洋婦人が打煙るばかりに眞白な衣服の裾を富士形に開いた姿は、此水蒸氣深い夕暮の紫と映り合つて、繪に描いたやうな景色である

應れちがひさま、ばつと、俊郎が吹き出す葉巻の煙に、男の方の西洋人がちよと振り向いた、粗末な服装の寄生の癖に、馬鹿に贅澤な煙草を吹かして居ると怪しんだのであらう、それだけ俊郎は煙草道樂で、玉井の主人の喫料の箱の封が切られる時に五六本分けて呉れるのを、寶物のやうに大事に取つて置いて、こんな場合に一本やることを樂むのである

御用邸であらうと思はれた建物の果して御用邸であることは、仁藏爺々に就いて確めた所である、今は高貴の御方の御出でがないと覺しく、間然と緋切られてあるが、傍に寄つて見ると、益々其質朴と高雅とに頭を押されるのである

御用邸の前を通り過ぎ、山に附いて道路が廻ると、人家が兩側に不規則な並び方をして、漁師の家百姓の家、種々の店、腰掛茶屋など、打雑せて一つの部落をなし、中には、古い立派な家の金持らしい構へも見え、新しい奇麗な家や、普請中の家などもある、可なり有福で、さうして段々發達して行く村らしい

「思つたより意味のありさうな所だ」と獨語して、なほも歩みを進めると、山が大きく切れて、其間が可なり深い谷になり、小川の海に注ぐ所に又一簇の人家があつて、往來から見降される、無論其所も秋谷の中であらう

道路がだら／＼降りになつて、右に屋の棟の低い荒物店が見える、其傍が直ぐ谷へ降りる徑路に

なつて、穴の中を覗くやうに勾配が急である、此邊迄来ると、夕霧の紫が黒み勝になつた、「む、何、久平の荒物店にちがひない」と俊郎は首肯した

見れば、店の前に手桶が置かれてあつて、徑一尺ばかりもあらうかと思はれる大輪の白い花の、皆重さうに頭を低れたのが、四五本それに立つて居るので、夕闇の中に染め抜かれたやうに際立つて見えるのみならず、久平が焼の所謂鬼百合の臭い匂ひが闇にも隠れず高く薫じて居るのである

「お内儀さん」と、覗いて聲を掛けた「御出でなせえまし、御待ち申して居りました」と應へる聲が案外近い所から響いて来たので、俊郎は思はず悔りとした

家内では、まだ燈火を點けないので、卒爾に戸外から覗くと、何が何やら眞暗で判らないけれども昨日長者ヶ崎で時間を聞いた焼が、隙間も無く掛けたり並べたりしてある商品の間に蹲んで、何かして居るのである「種々買物に來たんだよ」「只今燈火を點けますから」と云ひさき、ぱつとスイッチを摺る、暗くなつてから、呑気にランプの掃除をして居たのである

空氣でも圓心でもなく、たゞの五分心の紙笠のランプが茫然と點る「ヤア、何でもあるね」「え、何でも御座えます」「ちやア、敷島を三つと、改良半紙を三帖と、座紙を一折と、細筆を二本と、黒いインキと、それから菓子や十錢ばかり、あとは追々買ひに來る」「へえ、まア御上がんなせえまし、奥は風通しがよう御座えますから、それから鬼百合の花も、お磯の阿魔に山から採つて來さし

て置きました」「それア、何より有難い」と、俊郎は振向いて腰を屈め、花舞に顔が附くばかりにして、始めて見附けたやうに熱々と賞美する

「粉が鼻へ粘いたら、落ちやアしませんよ」これをみんな貰つて行つてもいゝかえ」「旦那へ上げるつて探つて來さしたんでア、お磯に持たして上げますよ」「それちやア濟まない」「濟まねえ事があるもんですか、どうせ遊んでるでア」此問答の中にも、俊郎は腹の中で考へた、百合の花の禮をしやうと思つても、こゝで金を出しては受取るまいし、寧ろ娘に自分と一緒に別荘迄持つて行かして其賦貸に遣つた方が好からうと

其 六

買物は一纏めにして新聞紙に包ませ「ちやア、濟まないけれども、娘さんに花を持って行つて貰はう」と立ち上がった「まア、茶でも喫つて下せえまし、今に親仁も歸つて參りますから」「親方は漁にでも行きなすつたの」「え、鱈を捕りに參りました、これから魚を持って上がらせますから、どうぞ買つてやつて下せえまし」「それア都合がい、是非持つて來て貰はう」と云ひさき、新聞紙包を小脇に抱へた「それもお磯に持たせませう」「いや、花を大事に取扱つて貰はなければならぬから、此包は僕が持つ」「包を濡らすといけねえだから、ちやアさうなせえまし」「云ふ事の趣意はちが

ふけれども、必要とする所の結果は同じである。

こゝで談話の一段落が附いたので、嬬は奥へ顔を振向けた「お磁や、茶を入れて持て来な、おらの手は石油臭えだから」「好い方の？」奥では牙えた少女の聲「當り前よ」嬬は膨れ聲である。

奥も口も、暫し話聲が断えて聞となつた、山のやうに何かを積んだ荷馬車が大地を轟かして通る、馬の蹄き、馬の血を吸ふ蛇の強い羽搏き、此夕闇を熱苦しくして、往來近く置いてある百合の花が、赤く色を變へはしまいかと氣遣はれるばかりである。

此間に、急須と茶碗とを盆に載せて、店と奥との境に娘が膝を突いた「おらの手は石油臭えだから旦那へ注いで御上げな」

娘は黙つて茶を注いで、黙つて盆の儘に俊郎が立つて居る前へ推し進めた「御喫りなせえましとか何とか云はねえか、此通り、から赤ン坊で御座ますよ」「いゝさ、御喫りなさいッて云はなくつても出したら御喫りなさるに極まつてるんだ、此方が早判りでいゝぢやないか」俊郎は心地好げに高く晒つて、澁茶の碗を取り上げた。

娘もこれに誘はれて笑顔になり、餘念無げな顔を上げて、恐れる色無く俊郎を見る、成程色は焦がしたやうに黒い、成程頭の毛は何かの臭見たいに亂れて居る、柄は小さくないが、十七にしては、あどけな過ぎる、すべて其母親の説明された通りである、けれども、色が黒い上に頭の毛がそれ程亂れて居

ても、醜いどころか、却つてそれが美しさを添へるものではあるまいかと思はれる程、美しく見えるから不思議なのである、下膨れのやゝ受口で、笑ふと淺く笑渦が見える、笑顔が消えても、口元には笑ひやうな趣が残る、鼻は低くないけれども、母のやうに固く見える程劃然と筋が立つて居るのでなく柔かくて、こんもりとして居る、次には愈々目であるが、これは形容するのにも惜い程で、疑と人の魂に浸み込むやうな深い光があると云ふの外、餘計に言葉を費したくない、もう妙齡であるから、自分の美を知らないことはあるまいが、そんな素振は少しも見えない、手拭地の浴衣に、海草のやうに振れた帯を申譯ばかりに締め、紺飛白の前掛をして居るが、頭の旋毛から足の爪先に至る迄裝飾らしいものは、唯だ前掛の紐の赤色だけである。

俊郎は、豫想以上に注意を拂ふべき娘だと思つた。

「それぢやア頼むよ」と、大きな聲で投げ出したやうに云つて、一跨ぎに戸外に出たが、忽ち又崩れるやうに晒つて引返した「代を拂はずに行かうとした、百合の花とはちがつて、店の物を只で持つて行かれぢやア堪るまい、惣體で幾何だえ」「後で一緒に敷きませう」「ぢやア、面倒だからさうして御呉れ」今度は突と往來の真中へ出て、先刻から惜みく喫んで居た葉巻の、最早残少になつたのを、火の閃く程に思入れ強く吸ひ込み、餘りを地に打棄てた、夕闇が濃くなつたので、煙は瑠璃色をなして暫し楕圓形に漂ひ、横に流れて徐に散つた、其後に、ふはり〜と大きな蝶の間に舞ふやうに

搖ぐ淡白い物は、今娘が手桶から取り上げた山百合の花である

其 七

俊郎を先に立て、お磯と呼ばれた娘は一間ばかり下り、莖長く切取つた山百合四五本、弓のやうに真中を軽く握つて提げ、草履穿きで、すたく後に随つた

理髮床と水店と並んだ所に、若い男女が六七八人集つてかしましく、笑ひ合ひつ罵り合ひつして居る

「やあ、磯ちゃんちやアねえか、花を持つてくるのは」「磯公だく」「女を後へ残して、男は皆前へ競ひ出たが俊郎が立停まつて振返つたのを見て、少し拍手扱した様子である」「磯ちゃん、何處へ行くだア」「山手の別荘へ、此花を持つてつて上げるんだよ」お磯は牙えぐした鬨子を張つて、無難作に判然と答へた儘、見向もせずすん／＼早足に其前を通り過る

「やアい、うつかり附いてくと取つて食はれるぞ」と、後から大聲で囁し立てる「歸りは此所を通さねえぞ」と呼ぶ者もある

お磯は、そんな事を耳にも掛けず、氣にも止めぬらしく、平氣で小聲の鼻歌を唄ひながら、俊郎の後へ附いて行く

「磯ちゃん」俊郎は歩き乍ら振向いた「はい」、如何にも判然した應答「お前東京へ行つたことがある

の」「いゝえ」「さうか、不思議だねえ」「何故で、御座います」「磯ちゃんの言葉が、土地の人とちがふやうだからさ」「葉山の別荘に被在る方に、二年續けて奉公致しましたからで御座いませう」

「はア成程」、俊郎は三つばかり首肯きを重ねた

兩側に人家のある所を通り過た、何時の間にか波音が高くなつて居た、風さへ耳に逆らう程である左無きだに頭重い、お磯が手の百合の花は、風に撓んでは身震ひするやうに搖られるのである「大事に花を持つてお呉れ」「はい」「此地の海は、返子葉山より波が荒いやうだね」「え、伊豆から三崎の鼻迄の間に、こんなに海岸の悪い所はないさうで御座います」「ぢやア、海水浴に好い所とは云へないね」「さうで御座います、柔かい岩の缺けたのが海へ崩れ込みますから、南風が吹く日にやア何時でも水が濁りますんです、それに、「いら」と云ふ極小さい虫が海の中に居りまして、それに刺される身が赤く腫れて、變に痛いで御座いますよ」「それア堪らないね、ぢやア、磯ちゃんなんかは、何處で海へ入るんだ、御母さんの話に依ると大分魚の真似が好きなさうだ」「は、わたくしの入ります所は、立石の下で御座います」「立石つて何所だへ」「わたくしの家の傍に、谷へ降ります道路が御座いませう、彼所を降りて、餘ッ程登りますと、高さ二三丈の切立つた石が御座いまして其下が直ぐ深い淵になつて居りますんです、それが立石で御座います」「凄さうな所だね、そこには何とか云ふ刺す虫が居ないのかえ」「居りますけれども、少なう御座います、一昨年東京から被入た

方が、矢張其所がい、つて、旦那に御座機が御二人、揃つて泳ぎが御達者で、ちと御自慢の方でしたから、立石の下へ御入りになりましたら、三人共波に浚はれて御亡くなりなすつたんで、それから、立石の下に河童が居るつて、人が入らなくなりましたんで御座います」「む、そんな事があつたかね、海の中に河童が居ると云ふ事は、ちと可笑しいやうだけれども、鎌倉あたりでも好く云ふから、一體に相州の海岸の人は、昔からさう思つてるんだらう、それは兎に角、そんな恐ろしい所へ、磯ちやんは平気で入るのかえ」「わたくしばかりか、しちやア御座いませぬ」「極りが悪いのであろう、百合の花のやうに首を傾ける「河童が恐くないかえ」と顔を覗く「ふ、」「臍を胸に押當て、耻しさに笑ひを漏らす

何時しか二人は並んで歩いて居るのである、もう御用邸の前へ来た

俊郎は、屹と氣を變へて、一足お磯より先へ出た、波音は益々高く、瞰下せば、大白蛇の蜿蜒るかとばかり、海岸線が太く白く闇の底に搖いで居る、沖は潮曇に蔽はれて、星の光も消えく、濛々且つ闇々たるばかりであるが、中に、銀の山を起すやうに、寧ろ、お磯が手に提げた白百合の花の幾千萬億を、積んでは崩し、崩しては又積むやうに、一際波の高い部分がある、其中から電のやうな光が進ると、闇の奥が薄紫に明るくなる、實に、美しく凄く景色である「あ、魂が吸ひ込まれるやうな景色だ、何故彼所だけ波が高いんだらう」と、俊郎は立停まつた

お磯も、三尺ばかり離れて立停まり風に百合の花を庇つて背後に隠し乍ら、一方の手では着物の前の風に捲られるを防ぎ、頸を潮煙の中へ振込むやうに伸ばして、沖を望むのである、身體の極りが自然に給のやうである

「あれは「かめぎ」で御座います」「何だえ」「かめぎ」つて俊郎は痛く好奇心を動かしたらしく、息を弾まして聞返した

其 八

「水の下に隠れてる島で御座います」「何故それを「かめぎ」つて云ふの」「さう云ふ名で御座います」「一字では如何書くだらう」「鶴龜の龜の字と木の字でも書くんて御座いませう、けれども、土地の者は字で如何書くなんて、考へも致しませんやうです」

俊郎は胸に浮んだ疑問を唯だ口へ送つただけで、敢て、漁師の娘へ漢字を訊ねて困らせやうとの、料簡ではなかつたのである、所が、案外に判然した應答をされたので、少々面喰ひの氣味となつた「お前は小學校を卒業したんだらうね」と早口に聞いて、後で其輕卒を侮いた

けれども、お磯は何の氣にも留めない様子で「え、一昨年高等科を了へました」と、尋常に答へるのである

所謂「かめぎ」に激する波は、愈々凄みを増すばかりで、闇の加はる儘に其美しさが減じて来る、俊郎は、身動きもせずそれに見入つて、何と無く心の底に淋しさを覚え涯無き煩悶が醸されて来た、これは、多感なる青年の常で、獨り俊郎に限つた事ではあるまい

俊郎が黙つて居るを見て、お磯は始めて自分の方から口を切つた「あの水の下は、周圍一里ばかり御座いますさうです」「ふむ、随分大きい、行つて見たら嘸凄からう、岸からのくらゐの路程があるんだらうね」「一里と少しも御座いませう、わたくしは子供の時分で判りませんでしたけれど、今から十何年とか前の大時化に、軍艦が「かめぎ」へ打突かつて壊れた時は、笠島へ打上げたやうに近く見えましたんですつて」「笠島つて何所?」「てんじや島へ食附いた、岩ばかしの平ツたい島で御座います」「てんじや島つて、地圖に在る天神島の事だらう」「え、土地の者は説つて、てんじや島つて申します、明日の朝別荘から御覽なさいまし、左の方の鼻から少し離れて、眞黒に松の生えた島がさうなんで御座いますから」「天神様でも祀つてあるのかえ」「天神様の御宮の外に支那人が妻を置く別荘も御座いますんです」「不都合な支那人だねえ、そんな好い所へ妻を置くなつて」お磯は唯だ俯いて笑ふ

俊郎は始めて其身の良習を立傳まつた事に氣が付き、ほつと息して足を進めたが「軍艦が「かめぎ」へ打突かつて壊れた時には、嘸凄かつたらうねえ」と、歩き乍ら話の筋道を追うた「え、墨を塗

つたやうな空へ、波が花火見たいに揚つて、秋谷の谷へ崩れて来ると思はまれましたさうで御座います」と答へる聲が、今迄よりは少し遠いので、どうしたかと振り返つて見れば、風に亂された百合の莖を揃へ直して居るのである

懸て揃へ了つて、蹲んだのが轟然と立ち上がると、一揺れ大きく揺れて、白白合が虚空に波を翻した、軍艦が「かめぎ」へ打突かつて、波の花火を揚げた時を想像させやうとするやうに

玉井の別荘へ著いた「まア入つて遊んで行きなさい」「え、有難う存じます」「其花を持って入つて御呉れよ」「え、口では肯ひながら、勝手口の格子戸の外に立つた儘で、花たけ内へ差入れた「ぢやア、ちよつと待つて御呉れ」

お作婆々が内から持つて出るランプの明りを借りて、袂の金入から銀貨二つ三つ掴み出し、百合の花を受取つた代りに、今迄百合の花を持つて居たお磯の手に握らした「少ないけれども、此所迄持つて来て貰つた駄賃だよ、歸りに氷でも飲んで行つてお呉れ」「い、え、折角で御座いますけれど、これは戴きません」「まア、さう云はずに取つてお呉れ」と、俊郎は蚤くも疊のある所へ上つて了つた

豈夫上櫃へ抛り出す際にも行かないらしく、暫くまごついた末に「ぢやア戴きます、有難う存じます」と、丁寧に御辭宜をした

其九

三日目は、此海岸でも暑さを覚える程に蒸すのである、晝飯はそこ〜に済まして戸外へ飛び出した俊郎の顔には、何故か嬉しそうな色が見える

指して行く先は、昨日の荒物店である「御免」と、店の土間へ入る「旦那が御出でなすつた」と、口に何かを含みながら云ふは、嬬の聲である、途端に、ばらりと箸を重さうに投げ出す音がした、續いて又箸を投げ出す音を聞いたが、これは、からりと軽く牙えた響きである

「御出でなせえまし、昨夕はお磯へ御金を下せえまして、済みませんで御座えます、こんなに澤山頂くんちやア無え、折角だから、此中小せえ方を一つ頂いとかうつて今も親仁と相談してゐるんで御座えますよ」と、麻暖簾の下から、飯の食ひ立ての赤く脂切つた顔だけ出して、息をも離かす嬬が喋り立てる、暖簾の上の方を少し開いて、三分の一ぐらゐ顔を出すはお磯である

「そんな堅い事を云はないで御呉れ、あれンばかりの金が何だえ、あの百合の花は、僕に取つて金以上の価値があるのだよ、そんな事はどうでもい〜として、何かえ、今日は親方が御在宿なのかえ」「え、朝の中に漁を済まして、歸つて参りました、何か好い魚が取れたら、晝飯の間に合ふやうに、お磯に持たして上げやうと思ひましたけど、生憎今日は不漁で御座えます」

今度はから〜と、茶碗で箸を洗ぐ響がして、それから太い咳拂ひがしたと思つたら、嬬の顔もお磯の顔も皆拂ひ退けられ、小山のやうな赤黒い大男が、暖簾を揺分けた後へ一ぱいに塞がるやうになつて、のつさ〜と揺ぎ出でた、左右の手を八文字に開いて突き、腹は垂れて膝も見えぬやうで、蝦蟇のやうに仰向くと云ふ御辭宜の仕方である「これは、御初に御目に掛ります、手前は小村久平と申す者で、昨夕は又娘が御金を戴きました」挨拶も亦確りして、如何にも重々しいのである

「どう致しまして、今もおかみさんへ云つた通り、そんなに、一同から幾度も禮を云はれちやア、僕極りが悪くつて逃げ出さなければなりませんよ」斯う云つて、俊郎は親仁の顔に目を注いだが、急に氣を變へて「これア不思議だ、親方の顔に見覚えがあるやうだ」と調子を高くした

「さうですかね」親仁も俊郎の顔に見覚えの點を發見しやうとするやうに、穴の開く程睜めたが、どうしても思ひ出せないらしく、頻りに首を括り始めた

俊郎も暫く考へて居たが「む〜」と首肯して、莞爾と笑つた、同時に親仁も亦顔を擧げて「貴方は海軍で被在いませんですか」と切り出した「いや、ちがふ」背の高い、骨相の秀で、身構への昂然とした、色は淺黒いけれども、凛々しい中に愛嬌を含んだ容貌、成程俊郎は軍服を着せると似合ひさうな柄である

「どうも、考へ出せない」親仁は到頭七を投げた「僕は考へ出したよ」俊郎は得意然と胸を突き出す

「被仰つて下さい、親仁の目には四分の好奇心が現はれた
何時の間にか、暖簾の間から首を出して親仁と俊郎との味を含んだ談話に聞き惚れて居るは、お破
である

「ちがつたら御免を願ふが、去年の暑中休暇を利用して、僕は朝鮮から満洲へ漫遊に行つたんだ、歸
りの汽船が敦賀へ着いたのは八月の幾日であつたか、其著いた前の日の事であつたね」「あゝ、あの
時ですか」「あの時、船客の待遇が悪いって、事務長と大論判を始めた豪傑は、親方にちがひあるま
い」「はゝゝ、あれを御覧なすつたか」「いや、凄まじい勢ひであつたぞ、態と器物を毀して、一
同の爲に佐倉宗五郎を極込んだんだから、見上げたものさ、云ふ事も筋道が立つて、勿々立派であつ
たよ、僕は實に敬服したね、だから、親方の風采が目に着いて、忘れないぢやアない、忘れることが
出来ないんだ、あの時僕は、親方へ敬意と好意とを表する爲に」「御待ちなすつて下さい」と、親仁
は團扇大の手を左右に開いて、俊郎の言葉を遮つた

俊郎は微笑んで親仁を見遣る

親仁は、頭を二度疊に近く下げて「いやどうも、御見反れ申して済みませんでして、あの折は、ウ
キスキーと結構な葉巻煙草の御馳走になりました、あんな旨い煙草を戴いたことは御座いません、い
や、眞誠に有難う御座いました」と調子を張ること、全く心から進り出た禮の云ひやうである、それ

でもまだ足りないと思ひ、胸を反らして俊郎を眺め直し「へえゝ、あの時の大學生の方は貴方で被
在いましたか」と、つくづく感心したやうに云ふ

其 十

腰を掛けるも、煙草盆を引寄せせるも、敷島に火を附けるも、俊郎はすべて無意識であつた、それだ
け談話に身が入つたのである「あの時の豪傑が此家の主人公であらうとは、僕夢にも知らなかつた、
破ちやんが、何所か此邊の娘とちがつた所に見えるのも、親方の胤とすれば別に不思議は無い、實に奇
遇だねえ、久振に、親方と飲まうじやないか、ウキスキーは無いけれども、あの時よりいゝ葉巻を持
つて來てあるよ、一緒に僕の居る別荘へ行かう、あゝ、近來の愉快だ」愉快が身に溢れて堪らないので
起つては又腰を掛け、手足の置き所に迷つて居る

「むさくるしう御座いますけれども、まア御上りなすつて下さいませんか、こんな土地ですから、ど
うせ碌な酒は無いものと、御極めを願つた上で、わたくしの家で一盃やらうちやア御座いませんか」と
親仁は身を捻ぢ退けて通り路を開く

俊郎は一寸考へて口を開いた「有難う、親方は御世辭にそんな事を云ふ人ぢやアないから、遠慮せ
ずに御馳走にならう、けれども、今直ぐは御免を蒙る、飯を食つたばかりなんだから」「ぢやア、も

つと後に致しませう、小子も今着を置いたんですから」「僕はこれから散歩して、一旦別荘へ歸つてから、葉巻を持つて出直して来やう」「左様で被在いますか、小子は酒道樂の煙草道樂ですから、かうしてナイムにオリエント迄も店に並べて置きますけれども、たまに小子が贅澤をやるだけで、此土地ぢやア買つて喫む者は御座いません」と、葉巻の上等が貰へる嬉しさの爲であらう、親仁商品を指して説明を始める

「僕は平常敷島で満足して居る、富士さへ喫らない、けれども葉巻は叔父に貰ふんだ」と云つて俊郎は立上がつたが「暑い」と獨語して「百合が咲いてる山へ行つて見やうと思ふが、磯ぢやん案内して呉れないか」と、店と奥との境に居る娘へ水を向けた

お磯は最初暖簾の間から顔を出して、昨夕の禮を述べた儘に、談話に聞き惚れて居たが、それぢやア不躰だと思つたか、何時の間にか、びたりと暖簾の下に坐つて居るのである「……」「いやかえ」「皆がいろんな事を申しますから」と迷惑らしくは答へたが、其割に耻かしさうではない「は、ア歸りに、理髮床の前に屯して居た若い者に調戲はれたんだね」「え、驚くべく正直で、驚くべく平氣である」「ぢやア仕方が無い、僕一人ではツつき歩かう、どうも御邪魔しました、晚には、遠慮無しに遣つて来ますよ」「どうぞ是非、小子も是から出て、晚の肴を取つて参りませう」「それは御苦勞、けれども、親方の稼業は愉快だ、僕も時々は、事業も功名も要らない、漁師にでもなつて、一生を存

氣に面白く、勝手な法螺を吹いて、天下の人物を罵倒して暮さうかと思ふことがあるよ」「所が、なつて見ると一向に詰りません、小子は又旦那と違つて、かうしていると氣樂に暮らして行かれるのを、何か遣らう、思ひ切つた事を遣らう、溜飲の下るやうな事を遣らうと、氣が何時も収まらず、彼地此地と、時々幽霊見たいに迷ひ出るんです、此年齢になつて、親類や友達に意見のされ通しです、あは、は、は」「益々面白く、僕は、親方のやうな人と談話をすることが、何より愉快だ、ぢやア、晚に来ますよ」と、快活な調子で云ひ棄て、勢ひ好く往來へ飛び出した

飛び出しさま、暫とお磯に目を遣つたが、どう云ふ譯か、始めて見た時よりは、一段美しく且つ惘惚らしく映じた「旦那、まア御緩りなせえましょ、飯食つた後を片附けながら、娼が奥から大聲を送る」「又晩に被入るつて、娘か母へ説明して聞かせる様子である

「笑つて拂ふ腰間寶劔の光、美人滿堂色土の如し」往來へ出た俊郎は、シルバーストロウの眞甲に、炎天の日早中の強い光を浴びて、得意の高青郎の詩に一腔の氣を吐き出した

其十一

久平の店を立出でた俊郎は、秋谷の通筋を海と反對の方に進み、左右の山を見渡したが、何所に百合の花があるとも見當が附かず、どの山も登路には汗に惱まされさうであるから、方向を變へて谷へ

降り、小川に伴つて海岸へ出た、丁度漁師の家の晝寝時である

空は一體に曇り渡つて、薄く日を漏らし、海を銀鼠色に染め上げて、目を刺すやうな厭な燥きを帯びしめて居る、波も平生よりは穏で、こゝへ來ても矢張暑い、十二三を頭にして四五人、女の子まじりに、泳いだり潜つたりして居る

俊郎は、ふと立石の事に思ひ至つた、此谷間を越して向の山の鼻に在ると聞いて居るから、何とは無しに波打際を歩いて其方へ行つて見ると、果して、一個の大石が崖をなして切立つて居り、巖根に激する波は白いけれども、其退いた跡の蒼さ、如何にも凄しい淵である、それに、日がやゝ西へ下つたので、崖の影の爲に此淵だけ薄暗く、他に無い涼しい風が、波の間から渦を捲いて起るのである、成程、ちよつと非凡な所だ、どんな暑い日でも、此所へ來ると風が無いことはあるまい」と、横の方から眺めて獨語した

すると、大溝が崩れ返つて、其白玉が一粒づゝ消え行く跡に、一塊りの黒い物が残るを認めた、何だらうと思つて居る中に、それがだん／＼水面より高くなつて、さつと横に流れたかと思つて、暫くは海松のやうに波に漂ひ、果は吞まれたやうに無くなつた、途端に、俊郎は「呀」と、小聲乍らに驚きを漏らして立ち上つた、一昨年此所で、東京から來た父娘三人が生命を取られたと云ふ、昨夕のお磯の談話を思ひ出したのである

又何か浮び出でるか、瞬きもせず水の面を隙かし見て居る俊郎、所が、思ひも掛けぬ近い岩の上、に、にゆつと盛り上つた物がある、俯りして目を舉げると、双の肩へ真黒な毛を垂らして、乳房が盃を伏せたやうに膨んだ女の上半身心窩のあたり迄が、這ひ上つて起き掛けたやうに現はれ出でたのである、色は黒い、けれども、顔から肩の輪廓が名工の彫刻も物ならぬ程に秀で、居るのである、豈夫これが人魚と云ふものでもあるまい、何にしても不思議の動物であると、屹と顔に目を注いだ、思はず聲を放つて叫び出した「磯ちゃん、磯ちゃんちやアないか」

「えッ」俯り飛び上つて後向になるより早く、真倒様に、身を結のやうにして、波の中へ突込み、其儘見えなくなつて了つた

それツきり浮び出ないのであらうとは思はないけれども、こんな事に経験の乏しい俊郎は、唯だ何と無く不安の念に襲はれて堪らないのである、海の中に河童、そんな馬鹿な物が居やうとは信じないが、現に一昨年、三人迄人を吞んだと云ふ淵である、其中で平氣に遊んで居るのみか、真倒様に潜り込んで再び浮き上がらないのであるから、何かお磯に不思議の能力があるのであらう、或は水の底で呼吸の出来る器械でも持て居るのであらうと思ひながらも、潮と波との具合で、どうかなつて了ひやアしまいかとどうも掛念で堪らない

「磯ちゃん、磯ちゃん」波の底迄聲が徹れと呼んだが、唯だ、ごうツと云ひさめツと云ふばかりであ

不安は益々暮るばかりである、餘り心許無さに、責めて、お磯が姿を現はした岩迄泳いで行つて見やうと、着物を脱ぎ掛けたが、こんな岩の多い波の荒い所へ入つた経験が無いから、若し岩へたゞき着けられて身體が壊れはしまいかと、今度は不安が自分の上へ移つて、解いた帯の端を又結び直した左思右考して居る中に、後を人の駆け通るやうな氣がしたので、ふと振向いて見ると、思ひきや、それはお磯なのである

「あッ、磯ちやん」呼んだけれども答へが無い、紺緋の、白い所が茶色に化けて、じめ〜と重たさうなのを着込み、赤い紐の前掛を一つ締めて膝屈のあたり迄垂れる黒髪を波のやうに翻しつゝ、後をも見ずに飛ぶが如く驅けて、忽ち物蔭に姿を隠した

其十二

谷間から往來へ上がる細く急な坂路をば早足で登り、闇い程に樹が茂つて水氣の道路に濛出した部分を、夜は若い女の胸りさせられる所だらうと思ひながら通り過ると、俄に蓋が刎ね退けられたやうに明るくなつて、一氣に往來へ飛び出した、そこは久平の荒物店で、内には夕立でも來さうな恐ろしい罵聲が聞える、親仁今や晝寝の最中と覺しい

俊郎の姿を見るや、娘は大聲に怒鳴り立てた「おめへさん、旦那がもう御出でなすつたぢやアねえか、晩の肴を取りに行くだアつて約束しときながら、何時迄寝てるだアよ」起さなくつてもいゝよ、僕は約束で来たんぢやアない、これから別荘へ歸つて来るんだから」と、俊郎は手を掉つて止める、「さうけえ、まだ別荘へ御歸りなさらねえのけえ、旦那も矢張り、我家の親仁見てえに香氣で御出でなさるだねえ、氣が合ふ筈だよ」一大きにさうだ」と笑つたが、要ありげに内を覗き込む「お磯けえ、彼女を山へ連れてくことは、止にして下せえまし、若え者に色んな事を云はれるだアつて、厭がりますからさ、そんなに鬼百合が御取りなさりてえなら何時かわたしが案内しませうよ」

「いや、連れ出さうと云ふんぢやアないから、そんなに要心しなくつてもいゝよ」要心するぢやア無えけどね、彼奴ア變人で駄目ですよ、なアに、要心するもんですか、些世間の阿魔ッ子を見習つて旦那へでも惚れるつてえな働きがあつて呉れると好う御座えますけど、から赤ん坊で塚が開きませんですよ、今日も大方海へでも突入つて來たアせう、裏の井戸で頭髮や身體を洗つて居るでさア」やア、これア恐れ入つた」俊郎は赤くなつて笑つた

それでも、潮水へ漬つた後の頭髮や身體を淡水で洗ふとは、刺に嗜みのいゝ娘だと思つた

さうして居る中に「お父さんを起さうかね」と、平氣に云ひながら、お磯が裏口から入つて來た、水の垂れる黒髪を無難作に押束ねて、例の手拭地の、さば〜と洗ひ抜いて襟垢も見えぬを着込み、

帯は赤が勝つた唐縮緬のまだ痛く古びたと云ふ程でもないのを、きちんと高く結んで、前掛も紐の新しいのを締め、日に焼けた頬にも洗ひ立ての艶を帯び、見ても涼しいやうな風姿である。

「被入いまし」と、御辭宜をした迄は好かつたが、俊郎が妙な笑顔でじろく／＼見るので「よう御座いますよ、これから海へなんか入りませんか」と憤つたやうに云つて、くるりと後向になつた。「どうしたたアよ、此娘は」と、母が訝るのも尤もである。

「磯ちやん、僕は決して、おまへの海へ入つて居たのが可笑しいツて云ふんぢやないよ、眞倒様に海の底へ潜り込んで、それツきり見えなくなつた人が、何時の間にもどうして岸へ上つて、着物を着て、僕より先へ歸つたかどう考へても不思議で堪らないから、態々それを聞かうと思つて来たんだよ、おかみさん、磯ちやんは丸で河童の化物見たいだねえ」「海へ入つてる所を、旦那に見られただね」「もう入らないからい、」お磯は強ねて居る。

「馬鹿、手前が海へ入らねえたつて、誰が困るだアよ、海へ入る事を手柄にしてやアがる」「磯ちやん、僕は決して可笑しいと思ふんぢやないよ、眞誠に感心して、人間業で出来る事ぢやアないと、不思議にばかり思はれるんだから、どうして、僕に見えないやうに上つて、着物を着たかと、其所の所だけ種を明かして御呉れ、頼むから」聲も容も眞面目である、成意味を云へば一生懸命である。お磯は振向いて極り悪さうな笑顔を見せた「頼むからと云ふを、切込むやうに迫る。

「何でもないんですよ、少しづつ水の中を潜つては岩の後の見えない所へ浮き、それから岩の後へ上つて、蹲んで着物を着て了ひまして、貴方が前ばかり御覽なすつて被在る間に、騙けて後を通つたんですの」と、出来得る限り平氣を装つて答へた、けれども、言葉が終らない中に顔が輝いて来て、果ては火のやうになり、堪り兼ねたか奥へ逃げ込んだ。

「うゝむ」親仁が目を覺ました音。

「成程、聞いて見ると何でも無い事だ」俊郎は夢が覺めたやうに茫乎となる「あの通り赤ん坊ですか」と、娘は又も陳腐な説明を繰返すのである。

其十三

晝の約束を正直に守つて、俊郎は夕方久平の家を訪うた、無論空腹を抱えてゝある。

「御馳走になりに来たよ、些ど早過ぎやうだね」と店へ入れば「いゝえ、丁度好う御座えます、さアどうぞ」と云つて、娘が座蒲團を直す光景の忙しさ加減が、暖簾の下から半分見えるのである。

まだ少々早かつたらしい、けれども、上れと云ふから構はず奥へ通つた、店の次が八疊でそれに續いて左は操側附の四疊半、右は茶所である、便所は椽側の左の端に附いて居るのであらう、八疊からは唯だ手水鉢と掛手拭とが半分づゝ見えるだけである、けれども、其手水鉢の置かれてある所がいゝ

青々と美事に伸びた馬蘭が搖々して鉢の水を覗き、其外には、天人の帷子の裾かと思ふ芭蕉の葉が空を拂ひ、僅二三坪しか無い空地に、蜀葵の紅と向日葵の黄とが高さを競ひ、白粉草、蝦夷菊、水引草などが其下に咲き亂れて居る、さうして、空地の彼方の低い竹籬には、朝顔が地肌を見せまじと搦み着いて居る、其外は直ぐ谷迄低く、なつて居るらしく、向の山が押冠さるやうに見える、一本の木を雑への所が却つて面白いのである、臺所の方はや、廣い空地に、漁具や炭薪を置くらしい納屋があつて、かの谷へ降りる約徑を暗くする大木の反對の側の枝らしいのが縁よりも寧ろ黒い程に葉を重ねて垂れて居る、規である、家の内は、簾筒が二棹に神棚と佛壇、茶簾筒も揃つて居る、皆粗末だけれども頑丈で、年代の爲に黒く光らせられて居るのである、長火鉢は、其前に坐ると暖簾の隙間から店の動靜が判るべき所へ置かれて、どう云ふ譯か、これだけは新しくつて品も上等である、なほ、四疊半には、臺所と隔ての壁に近く置かれてある古い長持の小口と、其上に掛つて居る梳きかけの網とが見える、臺は何方とも縁無しの中古であるが、掃く上に時々拭込むと覺しく、光澤を含んで清らかである、風は海から吹上げて谷の縁に濾された上で入るのであるから、軽く涼しく、氣持のいい香を帯んで居る、俊郎は案外に居心の好い家だと思つた、店頭の前屈で暑苦しいとは打つておつた光景の、餘りに目覺しいに驚いた

婦は、店と座敷とを掛持に、断えず喋くりながら、目まぐるしく身體を動かして居る、其癖をんな

に騒いで飛び廻らなければならぬ程の用も無いやうである、此婦が靜にして居て呉れると、もつと此家が涼しからうと思つた、其代り、婦の熱さうなるに引換へて、親仁と娘とが臺所で料理拵へして居る光景は如何にも涼しさうに籠を越して見えるのである、可なり大きい魚の、尻尾で俎板をたいて、頻りに刻返さうと腕くを、鐵のやうな手で嚴しく押へ着けて、研ぎ澄ました出刃を腹へ當て、居る親仁の格へ、胡瓜を細く刻んで居る娘の腕の牙え、牛若と辨慶が和睦をして、一緒に酒宴の仕度をしたらこんなだらうと思はれるばかりである、それが楓の蔭の縁に染められて、水の底の景色のやうに見えるから氣持がいいのである、魚の香、胡瓜の香、蓼や紫蘇の香もする、それに、鍋は何所か見えぬが、煮魚の匂も来る

「些と、僕の來るのが早過たね」婦が店へ出て客と應對して居る間に、俊郎は臺所へ向つて談話の緒口を引出した「いや、丁度好う御座います」と云ふと、出刃の先が、ぶづりと魚の腹へ入つた、風が簾に微かな音を立てる

「此家は涼しい」「え、涼しい事は此上無しです」と云ふ中に、魚の腹の中が空明になつた氣配である、魚も喉ぞ涼しからう「鱈が捕れましたから、洗肉に致しませう」「それア何よりだ」二つに切離して頭を除き、出刃を下へ置くと、かちりと冷たく鳴つたは、刺身庖刀へ觸れたのであらう「此所は海が荒う御座いますから、魚が締つて美味いんです」「さうだらう、荒海から引上げたばかりの魚

の洗肉は、東京ぢやア、金を積んだつて得られやアしない」

此談話の中に、娘は店の商ひを一つ済まして入つて来た「お崎、もう燗を着けてもいよ」と、親仁が聲を掛ける、娘の名はお崎であると、俊郎は始めて知つた

金屬の小さい柄杓で、銅壺の湯を半分汲み出し、其跡へ正宗の二合燗を漬けながらお崎は又喋るべく始め出した「御聞きなすつて下せえまし、旦那の御蔭で、お磯の阿魔の好く無え癖が一つ直りまして御座えますよ」「さうかね」俊郎は怪怪顔「海へ入つてる所を旦那に見られたアで、どんなに極りが悪かつたか、もうく、二度と海へは入ら無え、これッきりで止すだアつて、海へ行く時に著る單衣も、解離いて洗濯をして丁えました」「それア済まなかつた、何も、磯ちやんが海へ入つてる所を見やうと思つて行つたんぢやア無いけれども、詰り、僕が邪魔をして、磯ちやんの樂みを一つ失くさしたやうなものだね」「いゝえ貴方、子供の時分とはちがつて、何所に十七にもなつて、毎日海へ突入つちやア、天日へ甲羅を干してはかし居る奴があるもんですか、氣の利いた娘は、もう嫁入の仕度でさア、ですから、お磯だつて、もう極りが悪くなつて、止さうか止すめえかと考へてる所を、丁度好く旦那に見られただから、是ア急々見切時だと幕を固めたでせう、あれでも、些たア魂があると見えますよ」悪く云ひ乍らも、娘自慢は蔽ひ得ないのである「ぢやア、僕は詰り過ちの功名をしたんだね」「済まねえ事も氣の毒な事もありやアしません、却つて有難えくれえでさア」

不圖俊郎は、自分に見られた事を動機として海へ入る樂みと縁を切つたお磯の心に何か意味があるのではあるまいかと思ふと妙に構られるやうな氣持になつた「子實は磯ちやん一個なの」「え、一個ッきりて御座えます」斯う聞いて斯う答へられたのはいゝが、何の爲に斯う聞いたかは、俊郎にも自分の意に判らないのである

「膳を出すんだよ」久平は刺身庖刀を拵いて立ち上つた

其十四

能代塗の三尺四方もあらうかと思はれる馬鹿に大きな膳が持ち出された、大皿に氷の缺を四つ五つ置いて、上に、飯櫃の蓋に用ゐるのらしい粗い青磁を置いた所は、田舎人の用意の細くないことを表して、ちよつと可笑しくも思はれるが、其上に、徑三寸ぐらゐの半透明に縮み上つた魚肉を、一切づゝ並べて置いた風致は、蒼苔の上に白牡丹を散らしたやうで、頗る奇抜に甚だ斬新に、大まかな所が其だ振つて居るのである、藥味は先刻匂つた蓼に紫蘇、それから新に卸した山葵が添へられた鱈の煮たのが出る、胡瓜揉が出る、鯉の鹽辛が出る

「御免なさい」と、毛廬逞しく主人の席に大胡坐極いた久平は、二合燗を銅壺から抜き出して、扱くやうに握んで見、一盃自分へ注いで、きゆうツと引伸けてから「旦那は當世流でせうから、盃の遣り

取りを抜きにしませう」と云つて、俊郎の前に置いてあるゴツプへ、手際好く波々と注いだ。「親方は案外ハイカラだねえ」「かう見えても、若い時分には、八丈島から亞米利加の密獵船へ乗つて、三年も臍臍を歩いて歩いた男です、あは、、」晒ふ聲は、氷塊まじりの荒波が船の腹を打つも斯くやと思はれる「む、道理で、何所か尋常の漁師とちがふ所があると思つた、實に、愉快な經歷を持つて居られる、さうすれア、あの日本海の汽船で親方と始めて逢つた時も、何か面白い事をしでの歸途であつたかね」「い、え、御話になりませんです、海の上で馬鹿を盡くすことは、もういゝ加減に飽きて來ましたから、今度は、陸の方で何か溜飲を下げる事があるまいかと、態々滿洲迄捜しに参りましたけれども、わたし見たいな馬鹿が首を突込みやうな穴は、何所へ行つたつて開いて居りません、久平は矢張り、秋谷の漁師で朽果てるのが身分相應でせう」「む、」と俊郎は唸つた。「まア、御重ねなすつて下さい、正宗だか何だか判りませんが、此地ぢやア、此處話より好い酒は御座いませぬ、平生量つて買ふのは、水ッぽくつて不可せんですから、これを取つて來ました」「可なりいゝ酒だ、僕は膽斗飲めないけれども、酒の味だけは判る積りだよ」「麥酒を取りませうか」「いや、此方がいゝ、麥酒の肴にされちやア、鱈の洗肉が泣くよ、いや、どうも、此洗肉の旨さ加減は何とも云へない、天下第一の美味だ」と、俊郎は喜びに堪へないのである。

「旦那へ上げやうと思つて、親仁が態々取つて來たのですから、御世辭にも譽めて下せえまし」お崎が

傍から口を挿んで、滔々と辯じ掛けるを、久平突然「馬鹿」と一喝を喰はした「人を見て物を云へ旦那が御世辭をいふやうな、そんな薄ッぺらな人間かえ」「まア大きな聲、こんな一酷者で御座えますよ」と、お崎は詮方無さの苦笑ひ「憤らなくつてもいゝよ、親方、お内儀さんだつて悪い氣で云つたんぢやアないから」と宥めたが、此男に、薄ッぺらな人間でないと言はれたのが、是迄どんな人に譽められたより嬉しいのである。

「あは、、」と、久平は又例の調子で快く笑つて、襟に手を掛け胸を寛げると、かの淵に臨んで峙つて居る立石にも劣らなうな固い胸板に、太く振れた黄色の毛が、緒土の上に枯れ残つた草のやうに疎に生えて居るのである「お磯、注いで呉れ、旦那へも御酌をして上げるんだ」お磯はそつと來て、腰巾着のやうに、父の胡坐に膝突附けて坐つて居るのである。

「旦那、六七年前は、鱈鮫へ乗つかつて龍宮を征伐に行かうぢやないかと云はれても、おひそれと飛び出す無鐵砲者でしたが此お磯が、一年増に可愛くなつて來て、今ぢやア何をしたつて、かうしてお磯に酌をさして一盃やる程の事は無くなりました、鯨鯨と鯨鯨を取つた久平も、もう老込んで了ひましたねえ」お磯の顔より餘程大きいかと思はれる手を、にゆうつと差延べて、柔かい二重頰を拗ひ上げる、まるで四歳か五歳の幼児をあしらうやうである、お磯も亦少しも極りが悪さうでなく、さうさうれて嬉しがること、四歳か五歳の幼児になつた心持で居るやうである「可愛くつて堪らないんですよ」

と云ふ久平の口からは、涎が垂りさうである

「見つとも無えから止しねえな、親仁がこんな甘やかすもんですから、お磯もいゝ氣になつて、何時迄も赤ん坊で居たがるでさア」お崎はぶり／＼憤る「お内儀さん、そんなに憤んなさるな、人間は何時迄も赤ん坊で居られる程幸福な事が無いんだよ」と、俊郎は痛く感慨を催して、胸を搾るやうな大息を吐いた「さうです、全くさうです」久平は我意を得たりと首肯く「僕なんか、何時迄も赤ん坊で居たいと思つても、世の中が赤ん坊にして置いて呉れないんだ」と沈み掛けたが「いや、僕の身の上に附いては、又話す折もあるだらうから、今日は愉快に飲まして貰はう」と笑顔に直り、コップを取り上げた手を、お磯の前へ出した「御酌も矢張罪の無い人がいゝ」

其十五

お磯に注がしたコップを半分干して下へ置いた俊郎は、幾分か附景氣が加はつて居るのであるまいかと思はれる程の勢ひになつて「お話を聞いて、僕は益々親方の人物が好きになつて来た、けれども僕にはまだ親方の目的が判らない、詰り、親方は此世の中で何をしやうと云ふんです」と切込んだ久平は些か面喰つた様子で「目的だの、何をしやうだのつて、そんなむづかしい事は」と云ひ掛け、暫くまごついたが、忽ち天來の神興が到つたと云ふやうに溷然と膝を打つて「詰り、小子の柄に在る事

で、地獄の上の一足飛びと云ふやうな思ひ切つた大暴れをやり、それで、生れてから以來宿へ通しに宿へてばかり居る溜飲を、ぐ／＼と一度に下げやうと云ふんです」と反身になつた「生れてから以來宿へ通しに宿へて居る」と、俊郎は久平の云つた通りを口の中で繰返し、首を拵つて暫くそれを味つた末に「む、む」と二つ首肯いた、久平もお崎もお磯も皆黙つて俊郎の顔を瞻る「む、平凡な人間に云へない事だ、親方には謀叛骨がある、む、む」と頻りに首を拵り、頻りに陰る

「小子の柄に依つた役は何でせうね、暴れ好きの生命知らずの若い者の統率をさして、願一つで踊らしたり踏反りかへらしたりする事だけは、どうやら小子にも出来さうですが、それより上の纏まつて氣の利いた問題になると、何が何やら些も判りやアしません、詰り、世の中に無くて事が缺けず、有つて益の無い餘計な物ですね」斯う云つて、くるりと平手で頭を撫でる真中がやゝ禿げかゝつて居る「親方」出し扱げに俊郎は鬨子を變へた「はい」一旦低れた頭を真直にする「少し失禮に涉るかも知れないが、僕に親方を批評させて呉れ給へ、僕から見ると、親方が若し相當の家に生れて、相當の教育を受け、そして青年時代から社會へ押出したら、屹度天下を動かすことが出来たんだ、親方は首領的人物だ、物の頭になるべき柄だ、秋谷の漁師で終るべき運命を親方に授けたのは、天の無慈悲だ」薄色に酒が利き出した目を睜つて、相手の無い喧嘩のやうに嗷鳴つた、お磯は面白さうに之を眺め

お崎は憤々して何か云ひたさうな口をする。「あは、これア大變に買ひ取られた」と、親仁喉佛を見せる。「いや、買ひ取つたんぢやアない、廉く踏み倒した所でそれくらゐの價値はある」「何もかも、もう駄目ですア、子が可愛いことを覺える程に老い込んだんですから」

俊郎は、何か一大問題でも解決するやうに、疑と暫く考へて居たが、今度は首肯く代りに首を掉つた。「駄目ぢやあない、決して駄目ぢやあない、親方の今の生活も亦面白さ、千萬里果しの無い青海原を倉庫にして、財産を限り無く貯へて置き、網や釣を持つて行つては、其中自分の入要なだけを取つて来る、誰に尾を掉ることも吠え著くことも要らない、勝手氣儘な暮しをして、云ひたい事を云ひ食ひたい物を食ひ、寝たい時に寝、起きたい時に起き、働きたい時に働き、休みたい時に休む、呑氣でいゝぢやアないか、それに、おかみさんが働き者で、此店を旨くやつて行く、磯ちゃんも云ふ羽が生えて飛びさうな活きた娘もある、僕から見ると、人間世界の幸福が此家だけに集まつて居るやうだよ、あゝ大分酒が利いて来た」

お磯は吹き出して、父の腰に額を當てた、羽が生えて飛び出しさうな活きた娘と云はれたのが唯だ、脚も無く可笑しく耻かしいのであらう、お崎は又難か致でも拂ふやうな手附をして「は、旦那は勿々お口が旨い」とだけ人物相應の事を云ふ、中に久平一人が眞面目廣つて「さうかも知れませんがね」

小子も詮方無しにさう思つて諦めて居りますよ」と首肯くのである

家の中はや、暗くなつて来た「お磯や、店と此所へランジを點けて、それから、阿母と二人で飯を食つて了ひな」「お、此方は緩り御馳走になるんだから、遠慮せずと食べて下さい」

これで談話の段落が切れると、俊郎は不圖袂の中の物に氣が附いた「あゝ、忘れて居た」と云つて取出したのは小さな紙包、中から出た葉巻煙草は、たつた二本、これでも、一本一圓餘りとすれば一寸した手土産である「どうも有難う御座います、何よりの品で」と、久平改まつて禮を云ふ「まあ、喫み給へ」「貴方も」「僕のは此方に在る」袂から更に一本取出した

口を切つて、煙燻すを捲る、主客の顔を臆にして紫の煙が立つ、妙なる薫がする

「こんな臭え物、何所が好かんべえ」「馬鹿、田舎者」娘は又親仁に叱られた

其十六

十分飲ませられた上に、飯を一膳番茶で咽喉へ送つて、もう御暇と立ち掛けたのは丁度夜の八時半頃である「お磯や、旦那をお送り申さないか」と久平も膝を立てた、けれども、お磯は迷惑さうに唯だもぢ／＼するのである

「もう睡いのかよ、眞誠に、赤ん坊で仕様が無えなア」お崎が又赤ん坊呼ばはりを振廻す「睡いもん

かね「お磯は屹となつて母を睨む」そんなら、何故返事をしねえだよ」「……………」
 立上つた俊郎は、徐に笑を含んでお磯の様子を眺め下して居たが「お内儀さん、無理だよ、僕に見られた爲に、もう海へ入ることも止さうと云ふ程の磯ちやんぢやアないか、其極り悪さがまだ失せない中に、どうして送つて行かれるもんかね、餘程僕を虫が好かないと見える」と言葉を挟んだ「あら、あんな事を被仰つて、そんなら御送り申しますよ」と、お磯は弾かれたやうに立上つた「冗談だよ、實はね、僕はこれから漫々風に吹かれて歩いて、酒を醒さうと思つてるんだから、送つて貰はない方が好いよ」「だつて、虫が好かないから送らないなんて被仰るんですもの」「だから冗談だよ」「わたし、どうしても御送り申しますよ」「又そんな我儘を云つて、旦那を出しに使つて、夜遊びに出てえんだらう、だから、赤ん坊で困るつて云ふだよ」お磯は何所迄も赤ん坊で娘を取つて押へやうとする

「お内儀さん」俊郎は凍と呼んだ「はい」お磯は目を圓くする「何故赤ん坊ぢやア悪いのか、世間の母親は、好く口癖のやうに、自分の娘は赤ん坊でいけないとか、ねんねえで仕様が無いとか云ふやうだが、それは間違つてると思ふ、娘が何時迄も罪が無くつて居て呉れるのは本人よりも第一親達の幸福ぢやないか、これがどうだ、十六七の娘が、萬一親が茫乎してる中に赤ん坊でなくなつて了つたら、それこそ大變な心配だらう」

「さうです、さうです」久平は忙しく首肯してお磯と顔を見合はし、俊郎は言葉を繼ぐ、お磯は俯いて聴いて居る

「先刻も云つた通り、人間何時迄も子供で居られる程幸福な事は無い、磯ちやんは、斯うして御父さん御母さんに秘藏されてるから、其幸福も受けられるんだが、僕なんか、十八の年齢からもう子供で居ることが出来なくなつた、いや、其以前だつて半分は子供でなかつたんだよ」、仕舞は消えて太い溜息になる

お磯は顔を擧げた「御父さんも御母さんも、もう御亡くなんなさつたのけえ」と、酸ばいやうな顔をして、細い聲を長く引く「父は十八の冬に、母はそれよりすつと、前に」「おやまア、さうですけえ」、お磯の聲は愈々細く益々長くなる

「だけど、玉井さんは東京の大金持で、旦那は其所の御嬢様の御駕様におなりなさるでせう」唐突にお崎の調子が變つたので、俊郎は思はず冷りとした、但し、何故冷りとしたかは自分にも判らない、「だ、誰に聞いた」や、狼狽の氣味「別荘の婆さんが、主家の御嬢様の御駕様になるくれえの人だから、學問が出来て、そして大層好い方だつて、旦那を傑く擧めて行つたですよ、先刻買物に来なさつて」「餘計な事を喋る婆々だ」と呟いて、掛念の目で一座を見渡す

久平は、にやり〜と下目を使つて居、お崎は、感心したやうな羨ましいやうな目で見上げて居、

お磯は一人調度面である「御嬢様は大變御美しいんですつてね」と探ぐるやうに云つた之を聞くや、久平は俄に首を擧げて「そら見ろ、餘り赤ん坊だ〜ッて虐めるもんだから、そろ〜赤ん坊でない事を云ひ出して来たぞ、御要心々々々」と笑ひもせず投げ出したそれが如何にも奇抜なのが、溢り掛けた俊郎の顔も、見る〜相恰が崩れて了つた「厭な御父さん」と、お磯は眞赤になる

此儘にして出ると、お磯が手持無沙汰であらうと思つて、俊郎は新しく口を切つた敷島を吸ひ始め暫し暖簾を背に蹲んだ「僕は金持を嫌ふんぢやアない、それに、玉井の叔父は金持の中でも判つた人間だから、僕と話が合ふし、死んだ僕の父のお蔭で作つた財産だからつて、僕の爲には、自分の子に掛けるよりも、なほ金を惜まずに出して呉れるから、普通から云つたら、まア僕は幸福な人間だらうけれども、それを苦しく思ふのと、叔父の娘を妻にしなけれアならないのを迷惑に思ふのは、僕の天性でもあらうが、一つは、早くから子供で居られなくなつたからなんだね、だから、僕は力て子供にならうとばかり思つてんだ」としんみり云ふと、久平は「成程」と腹の底から捧つたやうな聲を出す、お磯は、半分判つて半分判らないやうに目を動かす「ぢあア、旦那と其お嬢様とは從兄妹同士けえ、お崎には、人の云つた事を味はう餘裕が無く、思つた事は直ぐ口へ發するのである「いや、親戚でも何でもなけれども、今云つたやうな關係で、十八の冬から玉井の家へ引取られたから、主人を叔父と呼んで來てるんだ」と俊郎は説明したが、「話込んでると切りが無い」と、早言になつて、盛然と立上つた

又明日を約して、敷島を三個取り、麻裏草履を一足下さして穿き、穿いて來たお作婆々の古下駄は當人を取りに寄越すからと云つて立出でた

山から海へ吹く涼しい夜風に酒氣を散らして、別荘へ戻れば、東京から電報が來て居る、封を切つて讀むと俊郎の眉が蹙んだ「婆や、明日の朝の十時發の汽車で、喜代さんが此方へ來るとさ」

其十七

勢ひ好く葉山の方から驅けて來た四喜續の俵が、玉井の別荘の前で停まつた、爺やと婆やとは、轉ぶやうに驅け出る「相變らず見得を張つて遣つて來たな」と俊郎は冷笑して、巻煙草を啣へた儘、腋掛窓に腰を掛けて、横目で來る者を迎へる

第一の俵から降り立つたのは、水色の地へ、萬葉の葉と莖とを淡墨に花を白く莖を銀泥で現はした絹の重ね着に、絹羅珍の帯を軽く結び、頭は束髪に瑠璃金覆輪の三枚櫛と白薔薇の一輪さし、足は絹足袋に千代田草履、ヴェールから手袋、指のダイヤモンドから胸の金鎖、蝙蝠傘から手提着に至る迄、隙間も無く武裝を凝らした當世風の令嬢である、年齢は十九か二十ぐらゐ、細過る程の細面で、色の白いは

白粉の力はかりでないらしく、切長の吊上つた目は涼しい方、鼻は細く高く、口はやゝ「へ」の字の傾きあつて、惣體に嚴く淋しいけれども、眉毛の優しいのと、身體が顔の割に容りとして肉附の悪くないとの爲に和げられて、其間に却つて趣を生じ、先づ何所へ押出しても退けを取らぬ立派な美人である

第二の俣は、四隅を革で包んで革紐で括つた柳行李、革製の大靴、絨氈製の中靴、蓑籠、網裏、釘着の箱等、山のやうに荷物を積んで、之には後押が一人附いて居る

第三の俣からは、ズツクの靴を車夫に提げさせた三十許の女、第四からは、小な柳行李を自分で提げた十八九の女が降りた。年取つた方は丸髷で、秩父の紺緋の單衣に黒縹子と藍鼠に蘆を白く染抜いた緋との晝夜帯を締め、若い方は又束髪で、同じく秩父の荒い矢緋の單衣を着、帯は紫縹子と紅入幽禪との腹合せである、年取つた方は小肥りで色淺黒く、有りふれた中位の容貌で、やかましうな人相の見える所ぐらゐが特徴であらう、若い方は顔も目も、圓くつて、色は白いと髪める程でもないが、兩の頬が薄紅を刷いて居る爲に、如何にも鮮かに見え、お轉變らしい代りには、男好きのする受くるしい娘である

件の行列は、爺や婆やが恐れ敬つての案内に連れて、堂々と玄關から乗込む、丸髷が出納係らしく踏留つて車夫の相手になる、紙幣と銀貨とが式臺へ投出される「阿彌ぢやアないか」と大喝一聲の響渡

るは、酒手の強請を刳着けたのであらう、其勢ひの凄じさに、多勢を待ひ車夫共も勞易したらしく、がやゝと驚き合つて出て行つた

長者が崎の方に向つて襖を開いた十疊とこれに續いた六疊とは、新來の人と荷と、取出した着物とで、芝居の樂屋のやうになつた、そこへ、煙草の煙を先立にして、俊郎がぬツと現れ出でる「やア、大變な騒ぎだね」之を見て令嬢は解き掛けた帯を兩手で押へ、赤くなつて小腰を屈めた「御免下さいまし、汗を掻きましたもんで御座いますから、着換へてから御挨拶申さうと存じまして、失禮な風を御目に掛けます」「いゝぢやアないか喜代さん、そんな形式的な遠慮は要らないよ、夏向こんな土地のこんな家へ来て、お互に一々着物を着たり脱いだりする所を、見まい見られまいとしちやア、究屈でたまらなくなるんだ、四疊半へ引込んだつて、貸戸から透いて見えるから仕様が無い、見られるのが厭なら、便所へ入つて着換へるさ」「は、又若旦那様か面白事被仰つて」と高く徹る聲で丸髷が喋くり掛けたが、俄に氣が附いたやうにびたりと坐り「わたしとした事が、なんて粗忽なんで御座いませう、まだ御挨拶も申上げずに」と手を突いて「大勢で御邪魔に上りましたして御座います、何分宜しく」と頭を下げた

東髪の娘も、それを真似るやうに同じ事をして「御暑う御座います」と小さな聲で云つた
俊郎は、疊の上に巻煙草の灰が落ちるにも構はず、無頓着に笑つて「お種も構はず着換へるがいゝ」

「はい」と丸盤「京や、お前も」「はい」と東髪「それから、もう湯が沸いた頃だ、加減を見乍ら僕が先登するから、喜代さんも入る仕度をするがよからう、僕の浴は早いせ」

令嬢は云ふ迄も無く俊郎が許縁の喜代子、丸盤の名はお種で、年來の功に依り重く用ゐられて居る女中、東髪はお京と云つて、これは小間使らしい小間使である

喜代子に對しては目上の權威を振廻し、お種お京をも主人風に伏させる所、俊郎が平生玉井家に於て高く地歩を占めて居る状態を窺ふべしである、俊郎の地位として俊郎ぐらゐにやることは、並大抵の者に出来ない業ではないか

「京ちゃん、御嬢様の御召換はわたしが御手傳申すんだから、お前さん早く着換へて若旦那様の御着中を流して上げて下さい」お種の聲は能く響くので、中庭を隔て、可なり離れて居る湯殿から反響が来た「婆やが流して呉れてるからいよ」

暫く間を置いて、今度は湯殿から聲が来た「何故照太郎君を連れて来ないの」「御坊ツちやまは、旦那様や奥様と御一緒に鹽原へ被入るんで御座います」とお種が鳴返す裏手では、仁殿爺々が釘着の箱を毀す音

其十八

鐘詰のいろく、珍しい漬物、塩詰の酒類、菓子など、喜代子が持つて来た食品は夥しいものである、婆やを下働に、お種が臺所を司どつて、晝飯の仕度をする

俊郎は四疊半の脇掛窓に腰を掛けて詩吟して居る浴を了へた喜代子は、縮緬の白地に荒磯模様のある浴衣を着て、朱鷺色縮緬の扱帯を前結びにだらりと下げ、それを餘り派手だと思つたか、群青色の絹の羽織をふはりと引掛け、白縮の單衣に唐縮緬の帯を締めたお京を供にして、飯を待つ間の漫歩きを門内の松陰に試みて居る

そこへ、息急ぎ早足に入つて来た者がある、毛縷子の蝙蝠傘を肩に掛けて、魚の燦きが隙いて見える、笠を提げた十六七の娘はお磯である、紺地の絞の單衣に、帯は赤が勝つた唐縮緬の片側を見せて締めて、新しい黒塗の下駄に紫の鼻緒のすがつたのを穿き、美事に多い頭の毛を惣髪銀杏返にしたのが、結立と見えて、水が垂りさうに光つて居る、顔も、白い物は塗らないが念入れて磨いたらしく清らかに光澤を帯んで居るのである、今朝婆やが買物に行つたから、無論昨夜の電報の事を話したのであらう、別荘の主人の娘——大金持の御嬢様が来て居る所へ行くのであるからと、多少武裝を施したやうに見える所、子供らしくつても矢張女である

門迄は駆けるやうに急いで追つて来たが、門の前で一息繼いで、俄に落付拂ひ、淑やかな足取りで進み入つた、遙に、玄關の内を覗込んで、常に變る華やかな様子に目を光らしたが、右へ反れて勝手

方へ向はうとして、不圖松陰に人の氣配がするを覺り、振返つて見た、すると件の目覺ましい打扮の
 が、權のある顔を昂然と擧げて、頭からも指からも輝きを放ち、これでも眩しくないかと云はぬばかり
 に目を射たので、お磯は覺えず立停つて頭を下げた、それが自然に御辭宜になつて、顔を擧げると赤
 くなつて居る

「御嬢様御覽遊ばせ、御魚を持つて参りました」と、お京は驕出しさうにする、海岸へ來て見る魚で
 あるから、活きて居るものと思つて、好奇心を動かしたのであらう「お〜」と云つて喜代子は歩み寄
 った

お磯は氣を利かして籠の蓋を取つた、急に明くなつたのに驚いたか、中の魚が激測激しい音を立て
 て躍る、喜代子もお京も悔りして後へ下る

「其御魚は何？」喜代子は高ぶらずに、友達を待遇ふやうな口調で訊ねた「黒鯛とあいなめで御座い
 ます」と俯いて低く答へる「毎日此家へ御魚を持つて來て下さるの」「今朝婆やさんが御出でなす
 つて、御晝の間に合ふやうにつて被仰いましたから、急いで持つて参りましたけれども」と徐に云つ
 て、感心したやうに喜代子を見上げる、此如何にも貴さうな、御嬢様と呼ばずに御姫様と敬ひたいく
 らぬ人が、どうしてこんなに優しく丁寧に自分を待遇するのであらうと、不思議に且つ有難く思ふの
 らしい

「ちよいと、お前さんの家は漁師？」お京は、蓮ッ葉に傍から口を出した「漁師で御座います、お磯
 の聲は、始めて持前の凍と餘韻のあるのになつた

「おい〜、其所で引止めて居ると、折角の魚が古くなるよ、磯ちゃん、構はず裏口迄駆けて持つて
 行つて御呉れ」と、權子の内から、煙まぢりに俊郎の大聲が出た

之を聞かや、お磯は其方へ目を遣りもせず、驚いたやうに駆け出して、松の間を影のやうに薄れつ
 裏口へ向つた

喜代子は、笑を含んだ顔で徐々と權子の前へ歩み寄り、腕程の太さの松に手を掛けて、煙草の煙の
 出るあたりを仰向き加減に見たが「お〜、酷い嬢だ」と云つて、慌て、離した其手を打振るのである

「喜代さん、魚は活きてたらう」「え〜、活きて居りました」「東京で食ふ魚とは味がちがふせ」

「もう、あの娘と御心易くおなりなさいましたの、磯ちゃんなんて名迄御存じで、ほ〜、けれど
 も、色の黒いところが漁師の娘らしいだけで、外は申分の無い子で御座いますねえ、あれで幾歳で御
 座いませう」「十七さ、あれア僕の……何と云つたらいいかなア」と首を捻る

喜代子は笑顔ながら少し色を變へる、お京は目を置く

「さうだ、矢張り友人だ」と首肯して「僕の友人の娘だ」と云ひ切つた

「へえ、あの子の御父さんと貴方が御友達？」「極く親しい友人だ、俊郎は眞面目である「あの人の

の御父さんと御友達だなんて被仰いますと、何だか、若旦那様も御年寄らしくつて被在いますねえ。お京は手を打たぬばかりにして晒ふのである「さうさ、お京なんか、僕から見れば子供だ」と、俊郎大きくなつて感張る

内の方からはお種のお聲「若旦那様、御魚は只今に致しませうか、さう致しますと、御飯を些と御待ちなすつて頂かなければなりませんですから」「當り前さ、魚を晩迄置かれて堪るもんか、此海岸ぢやア、死んだ魚は猫だつて食べません」

外では、空の籃を提げたお磯が、恭しく御辭宜をして、喜代子とお京との後を通る「磯ちゃん、東京からウキスキーが来たから、御父さんに、晩に遊びに来て下さいッて云つて御呉れ」と俊郎は後から聲を掛けて「あれでも、土地の若い者の競争物になつてゐるらしいから、いづれ悶着の卵だ」と、二人に向つて吐くやうに云つた

其十九

此日の夕飯が済むと、俊郎の發議で、爺々婆々だけを留守居に一同打連れて、散歩に出た

海と空とが一色の紫に古びて行く中に、染め抜かれたやうな葡萄色の富士は、どんなに喜代子の美威を刺戟したか、憧としたやうに息を深くして「あゝ好いこと」と立停つた

海に臨んだ茅葺の高雅な建物は、もう薄墨で繪かれたやうになつた「喜代さん、あれが御用邸だよ」

「真誠ですか」「他の事とは違ふ、嘘を吐いてたまるもんか、實にいんだらう、御用邸と云へば、廣く殿しくなければならぬもの、やうに思つてる者へ、此質素と風雅とを極めたのを見せてやりたいね」「左様で御座いますねえ」とは云つたが、如何にも氣の無い挨拶である

俊郎は急に不愉快になつた、此夕暮の景色を好いと思ふぐるゐの美感は持つて居るけれども、喜代子には真誠に消素と高雅との趣味を解するだけの柄が無いのである、御用邸としては案外に小さく粗末だと思ふ色が掩ひ得ないのである、かうなると夕暮の景色を好いと云つたのも、どれ程の度合の目でいゝと見た結果か、唯だ、黒みがゝつた紫の海と空、及び、葡萄色に染められた三角形の富士を、著物の模様でも見るやうな氣で美しく思つたのか、何だか譯が判らない、何も、喜代子とお磯とを比べて見やうと思ふのではなく、喜代子よりお磯の方が趣味が高いのぢやアあるまいかなど、は、無論思ひも寄らないのであるが、妙に百合の花を風に庇つて、潮煙の中へ首を振込むやうに、沖の白波を覗き込んだ時のお磯の姿が目に見えて、消さうと思つても消えないのである

人家の立て込んだ所へ行くと、喜代子の耀きに目を引かれて、南側から出て見る者が多い、かの理髪床と氷店と並んだ所などは、目で見る上に口で種々の批評をする者が多いのである、けれども、其服装——就中頭と指と胸とに打たれて出る聲で、敢て悪口を云ふのではない

割に慎深く淑かな性質ではあるが、斯なると、自然に得意の色の爪めくを掩ふことが出来ない、俊郎は喜代子の素振を厭に思つた

聽て荒物屋の前となつた「此所だよ、僕の友人の家は」と俊郎は自慢さうに云つて、突と店へ入り「親方、御在宅かね」と呼んだ「被入い、さアどうぞ」と、太く重い聲が響いて、久平の大きな顔が暖簾の間から出た「今日は同伴が多いから、此所で御免を蒙らう」俊郎は、まだ燈火の點かない薄暗い店頭にも、むづと腰を掛けて、喜代子以下を願で招いた「掛けろよ」

喜代子は、済ました顔で「え」と云つたが、入りさうにもない「入つて掛けるといふぢやアないか」俊郎の聲は少し尖り掛ける「ぢやア、御免を蒙りませう」餘儀無く入つて来て、ちよと小腰を屈め、俊郎と少し離れて、窮屈さうに店の一隅を占める

「碓や、座蒲團を持つて來な」聲の下から、お碓は四枚の座蒲團を抱へて出て、二枚は俊郎と喜代子との腰近く押遣り、二枚は明いて居る所へ並べて置き、それから身を下げて「被入いまし」と極りが悪さうに御辭宜をした「おい、お種もお京も入つて掛けるんだよ、何だつて、詰らない遠慮なんかしてゐるんだ」俊郎は叱るやうに云ふのである

二人は恐るゝ入つて来て、座蒲團を押退け腰を掛ける、俊郎と喜代子とは、座蒲團の上に腰を掛け直す「これでやつと納まつた、女と云ふものは下らなく遠慮するからいけない」と笑つて俊郎は暖簾

の前に相撲取のやうな身體を据ゑて居る久平へ顔を向けた

お碓は茶を入れやうと云つて引込んだ

「親方、昨夕は御馳走になりました、實に愉快であつた、あんな愉快な酒を飲んだことが無い、東京からウキスキーが來たから、例の日本海の汽船の活劇を思ひ出すやうに二人で飲まうぢやアないか、これから僕の方へ來給へ」「有難う御座います、今晚は娯が近所の佛事の手傳に行きましたから、店を見てやらなければなりません」「お内儀さんは留守かえ、碓ちゃん一人ぢやア淋しからうし、ぢやア明日の晩來て呉れ給へ」「へえ、有難う御座います」

所へ、お碓が茶盆を持出す

「茶もいけれど、僕は冷たい物が飲みたいな、そんなに鹹い物も食はないやうだが、非常に咽喉か渴いた、氷屋は近所に無いやうだし、理髮床の隣迄行くも億劫だし」と、あの前に屯して居る若い者共か、先夜お碓と一緒に通つた時に、變な事を云つたそれを思ひ出し、思はず苦笑ひをする其顔を見上げたお碓も妙な笑を含み掛けたが、俄に切つて棄てたやうに相格を立て直して「……りますと、冷たい御水が御座いますから、一手桶汲んで参りませう」と立上つた「それア結構い水は氷よりい、汲んで來る中に温くなつちやア詰らないから、其井戸へ飲みに行かう、碓ちゃん内して御呉れ」はッしと膝を打つて、勇ましく立上つた俊郎を、喜代子もお種お京も驚いたや

上げる

「一同で行かう」と、俊郎は戶外へ飛出したて

其二十

裏手から出られると覺しく、お碓は蚤くも柄杓附の水桶を片手に提げて、谷へ降りる阪路の真闇な所に立ち、一同の來るを待つて居る

往來にはまだ薄明りが残つて居るけれども、晝だつて物凄いくらゐな此木下闇の急な阪路は、さながら奈落へ下る底の無い穴のやうに暗く深いのである、冷々した風が下から吹上げて來る、すつと低い所に居るお碓が白地の浴衣の姿は、地獄の途中にふはくして居る幽霊が手招きするやうにも、見様に依つては見られるのである

「さア行かう、僕に附いて來るんだよ、氣を付けて降りないと、地面が濕つて居る所があるんだよ」と云ひさま、俊郎は探り足に降り始めた「何だが、氣味が悪いやうですねえ」と、喜代子は二の足を踏む「お嬢様、御止し遊ばせ、御怪我があつちやア大變で御座いますから」と、お碓は後から袖を引く、眞誠の忠義者なら、前へ廻つて止めなければならぬまい、震へ聲になつて居るは、第一自分が恐いのであらう、まして、お碓は「お、氣味が悪い」と縮んで、たちく後へ退ると云ふ始末、木や草

よりも人間の數が多い東京で育つて來た者は、こんな所へ來ると男でも意氣地が無いのである

俊郎は早やお碓の傍送降りて振返つた「どうしたんだ」「氣味が悪いんで御座いますもの」「は、御姫様はちがつたもんだ、けれども、巴板額も跣足で逃るやうな、豪傑の御腰元が二人迄附いてるんぢやアないか」「御冗談被仰いませ、こんな凄じい所は誰だつて恐う御座いますよ」と、お碓が躍起となる「ふ、ふ、ふ、こんな凄じい所とは振つてるね、口も八町手も八町のお種豪傑が凄いつて云ふくらいだから、これア餘程凄じい所だらう、碓ちゃん、お前なんか凄くつて身體が小さくなりさうだらう」「は、お碓は微かに笑を漏した

「若旦那様、田舎の子と一緒になすつちやア、可哀相ぢやア御座いませんか、お種は口惜しうに訴へる「田舎の子？ふむ、田舎の子と一緒にされたのが、口惜しいか、それぢやア、僕は田舎の子と一緒に水を汲みに行くから、都の方方は上でお待ち遊ばしませ」云ひ棄て、俊郎はすんく降る、お碓も俊郎に後から推されて足を早めた

「東京の奴はあれだから嫌ひさ、少しでも木か草のある所へ來ると、直に恐いとか凄いとか吐して、却つてそれを自慢にしてやアがる、さう云はなけれア、東京者の借券が下るとでも思つてやアがるんだらう、あんな奴等は、何時迄も彼所に立往生さして、懲さしてやる方がいゝから、ゆつくり行つてゆつくり戻らう、なアに、おれが附かなけれア、あれで別荘へも歸れないのさ」と、歩き乍ら呟やく

やうに云ふのである

坂路を降り盡くして、山と川との間を少し左へ行くと、こゝにも亦二三本の古い木があつて、風でもなく、人を刺すやうな冷い氣が其下から動いて来る、草履の裏に濕氣を感ずるので、隙かして見ると、まだ白みの少し残る空が影を落して、路の上を一筋刀のやうに光らして居る「水が滴れて居りますから」と云つて、お磯はひよい／＼跳ぶ、俊郎も、成るべく濡れて居ない所を選つて足を下し、何所迄もお磯に續くと、三方から崖に圍まれた些の空地に、岩を穿つた井戸があり、若い女が二個、水を汲み了へて、其中一人が手桶を持ち上げやうとして居る

「磯ちゃんけえ」「あゝ」「誰だよ、一緒に来たの、源さんけえ、よう／＼」「誰があんな奴と、お磯の舌は此井戸の水より冷たい」「ちやア誰だらう」

さう云ふ中に、俊郎は突／＼身を進めた、貝殻か石か、底に白く圓い物が二つ三つ見えて、深さは縁に三四尺しか無いが、水は縁迄溢れて居るのである「ヤア、これア好い水だ、柄杓で汲むのかえ」「え、」「ちやア、僕に汲まして呉れ、別嬪達、飛ツちりがかゝるかも知れないけど、御免を蒙るよ」と、さぶり柄杓を突込んだ

二人の女は、俊郎が無頓著の振舞と其大きな聲とに肝を潰したらしく、物をも云はず手桶を持ち上げて、そこ／＼に立去つたが姿は木の蔭に隠れるや、聲々に呼はつた「源さんへ云ひ附けるよ」「源さ

んがえらく憤つてゐたアよ」之を聞くと、お磯も負けじと大聲を擧げるのである「たんと云ひ附けるよ、あんな奴が憤つたつて何恐いんだえ」

俊郎は、早や大柄杓で手桶へ水を満たし、最後の二柄杓を仰いで、がぶり／＼息をも繼がずに遣つたが、餘りを打棄ると口を開いた「源さんて、お前の情人かえ」中音の如何にも平氣らしい調子である「お、厭だ、あんないけ好かない奴」お磯は憤氣になつた

笠が一つ、小さい人魂のやうに、井戸の水氣を暮つて飛んで来たが、人の氣配に驚いて、くるりと輪を描いて引返すや、高く／＼飛び上がつて消え失せた、夜は眞の間になつた

其二十一

水を張つた手桶を提げて急な坂路を登ること、十七の小娘にはや、荷が勝つて居るやうである、口には出さぬが、息の切れ具合、水の溢れ鹽梅に依つて、それと察しられるのである

「磯ちゃん、僕が持つてやらう、僕に提げさせて呉れ」「いゝえ、好う御座います」「好う御座いますッて云ふ聲が、そんなに震へてちやア、仕様がなないちやアないか、剛情を張らずに此方へ寄越せつては」「そんなら、済みませんですけど、御手を御添へなにつて下さい」「二人で持たうと云ふのか、むゝそれも好からう」お磯は右の手、俊郎は左の手を下して、手桶の横木を握り合ひ、二人の間に冷

たい水を提げて、足拍子を揃へ坂路を登つた

「随分急な坂だ、かうして、重い物を持って上ると、一層急なやうに思はれるね、ヤツ失策つた、しこたま水を浴びた」これからなほ急になりますから、ちよつと此所で休んで参りませうか」「それも好からう」手桶を置くと、二人は吻と息をした、俊郎は、喜代子を始め、お種お京などが如何なつたかと云ふことも忘れて、唯だ何と無く興味を覚えるのである

何所からか、微に百合の花が匂つて来る「こんな所にも、百合が生えてるのかねえ」「何所かの家で植えて置くんぞせう」仰げばかの隠道のやうに木の繁つた所が、頭の上に真黒な口を開いて居る

と見ると、天から降るやうに黒い着物を着た男が一人驅け降りた、蹴立てる小石がばらばらと散りお碓と俊郎との脚を掠め腰を擦つて飛ぶのである、其中から一つ手桶に當つた「呀」と云ふ間もなく、眞一文字に驅降る勢ひ止め難く、俊郎に碓と突當つた

俊郎が若し浮つかりして居たなら、仰向に突倒されたのかも知れない、けれども、蚤くも手桶を下へ置いて、それを力に身を沈め、明いてる右の手を前へ出して防いだので、突當つた男が却つて平手で胸を突かれ、横へこつて壁に打突かつた「な、何をするだア」「お前こそ何を、此狭い坂路を理不盡に飛び下る者があるか、おれが若し茫乎して居たら、お前に突倒されたんだらう、これから氣を附けるが、いゝぞ」沈着いて底力ある俊郎が獅子、而も云ふ事は理の當然である

見れば、紺紺の單衣を着た漁師らしい若者、顔も手足も着物の色と差別無く、開の中に黒牛のやうに動いて見えるのであるから、潮に染め日に烘つて、鍛えに鍛えた身體であらうと思はれる「何を」と云つて腕を捲る

此無法に、俊郎は怒心頭から發した「何をとは何だ」、喝する聲に崖も震ふばかりである

「御止しなさいまし」と、お碓が徐に袖を引く

俊郎は自分乍ら少々安ッほかつたと思ひ直して「は、は、は」と高く晒つたが、獨り首肯いて、急に袂を搜し始めた、取出したは燐寸である、「自分が突當つて人を咎める、其無法な加減が氣に入つたら、どんな顔をしてる先生か、御目に掛つて置かう」ぱつと燐寸を指す、一點の小さい煙を圍んで、周圍が茫乎と圓く明るくなつた、水気が充満して居るので、明りの中は五彩の霧である

不意を打たれて若者は悔りとなり、顔を背けてどん／＼驅降りた、背で逃げると云ふ譯でもあるまいが、拍子で驅出したのがどうも逃げるやうに見られるのである「は、は、は、」間に引く人の氣配を見送つて俊郎は又華やかに晒つた「畜生、覺えてやアがれ」「道の低い所から口惜しさうな聲が響いて来た

「碓ちゃん、さア行かう」始の通りに、二人で手桶を提げたが「あれが源八で御座います」と云つてお碓は俊郎に引かれるやうに足を進めた「さうか、あゝさうか、あれが其源さんかえ、それぢやア、

突當つたのも故意とだね、お前と一緒に歩くのが焼けるんだ、餘程の執心と見える、けれども、見當違ひに仇敵と狙はれちやア、僕が大迷惑だ、俊郎は事も無げな笑ひ聲である「ふ、お磯は深く俯いて、有りや無しやの笑ひを漏らしたばかり

往來へ出て見ると、喜代子もお種お京も居ない「歸つたか知らん」と云ひつゝ、手桶はお磯一人に提げさして、一足先に店を覗くと、三人所在が無さうに腰を掛けて居るのである

其二十二

お磯と一緒に水を汲みに行つた翌の朝である

平生六時前に起る俊郎が、今朝に限つて七時を過ぎても熱く寝込んで居る、御飯ですと呼起されて不承無精に蚊帳を潜り出たが、顔はいく加減に洗ひ、飯を食ふの氣が無さうで、食ひ了るや、例の四疊半に腹遣つて、例の通り巻煙草を煙らし始めた

高く止まつて居るのかと思はれる程、深く、自分から進んで俊郎の部屋へなど入つたことの無い喜代子が、どう考へたか唯だ一人で遣つて来た、これも今朝に限つた事の一つである「御氣分が悪くつて被在いますの」「いや別に」と、俊郎は頬杖を突いた

それだけで話が途切れた、俊郎は済まして煙ばかり吹き、喜代子は手持無沙汰に横を向いて、や

二分ばかりを無言で過ごしたが「む」と云つて、勃如と起上つたは俊郎である

少し驚いた顔を、喜代子は正面に向ける

「喜代子さん、君はあのお磯と云ふ娘をどう思ふ」喜代子は益々驚いた様子で、一ばいに目を腫るばかりである「おい、どう思ふツてば」喜代子は、何か其素振を俊郎に怪まれたとでも思ふやうに「標榜のいゝ娘だと思ひます」とときまぎする「そんな事ぢやアないよ」と冷笑ふやうに云つたが、赤くなつた顔は掩ふことが出来ない

詰まり俊郎には、自分の胸中の秘密を喜代子が看破しやアしまいかとの不安がある爲に、先んずれば人を制するの筆法を用ひたが、稍々おつかなびつくりの氣味を免れないのである

「ぢやア何？どんな事？」喜代子は寧ろ怪訝顔になつた「愈々、彼奴は騒動の卵なんだせ」徐に遣つて退けた時、やう／＼俊郎の度胸は据つた「さう？」と、喜代子は怪擬顔の上に更に輝きを發して来た「實はね」と云ひ掛けて、にたりとなり「止さうか」と落した「云つて聞かして下さいまし」喜代子は笑ひを含み乍ら恨めしうな顔になる「昨夕僕が、あのお磯と水を汲みに行つたらう」「え、」と首肯した喜代子の目は、好奇心に燃えて不安に動くのである「水を汲んで歸ると、態と坂の上の方から驅けて来て、僕へ突當つた若い者があゝ、これが其一件なんだ」「一件ツて何」「お磯に頸ツたけツて奴さ、僕がお磯と二人で、日が暮れてから人の滅多に行かない所へ、水を汲みになんか行つた

んで、それを聞くと焼けて堪らなくなつたと見える、詰まり、戀の敵として僕に遺恨を含んだね、凄いちやアないか、僕は殺されるかも知れないせ、色男はちがつたもんだらう」云ひ切つて、天井も吹飛さんばかりに、放圍も無く大きく晒つた

「あら、厭だ」喜代子は急に冷たく高くなる「何故」「だつて」「何がだつてだ」「だつて、馬鹿々々しいちやア御座いませんか」「何がそんなに馬鹿々々しいんだ」喜代子と俊郎とは、主客地を轉じて、役割があべこべになつた

「だつて貴方、そんな詰らない田舎娘と御心易立になさる爲に、譯の判らない漁師やなんかの若い者に恨みを御受けなさるなんて、第一貴方の御位が下るんぢやア御座いませんか、御氣を御附けなすつて下さいましよ」かう云つた時の喜代子は、すつかり其、慎深さうな淑やかな持前を失くして、世の中にこんな詰らなく馬鹿々々しい事があるもんかと云ふやうに、如何にも伶俐振つたやうな、上品がつたやうな高慢ちきな顔になつた

俊郎は、胡座に組んで居た左右の膝頭を立て直し、兩の手に之を抱へて威心したやうに首を傾け、「は、ア、位が下りますかね、語を換へれば、僕の尊嚴が害はれると、云ふんですね」と獨語らしく吐く、それが、相手を愚弄した極の態度に見えるのである

其二十三

愚弄されても、憤るにはまだ早いと思つたのであらう、喜代子は黙つて俊郎の動靜を窺ひ、次の草を待つて居る、其の目使ひは、俊郎との距離が今迄より急に延びたかのやうである

「僕には、位だの尊嚴だのつて、そんな傑いものはない、喜代さんにはあるかも知れないが」と願を反らせる、言葉尻の冷たさ加減が至極妙である

「縦令あつたつて」と繼いで少し控へ「僕は其無上に有難い理由を認めない」と云ひ切つた「喜代さんが假令黄金の冠を戴いて、ダイヤモンド繋ぎの衣裳を着て、全身から五色の光を放つて僕の前に立つたつて、僕の目には矢張り唯だの喜代さんとしか映らない、僕は唯だ喜代さんが人間としての價値を認めるだけさ、成程お磯は、見る影も無い田舎娘に相違無いが、僕の畏敬する友人の子だから、僕は、これにも相當に重きを置き又相當に敬意を懷いて居る、あれの親父は喜代さんの所謂詰らない方に屬する漁師だよ、けれども、人間としての價値には、確に尊ぶべき點がある、我々の學ぶべき點がある、強いてとは云はないが——又取て虚榮心がどうのと云つて喜代さんを攻撃する譯でもないが、若し喜代さんが、あのお磯に就いても共に磋くべき美點を見出し、あのお磯の父にも、敬意を以て對すべき點を見出し、さうして、黄金とダイヤモンドとを離れた生粹の人間になつて、それを味はつて

呉れるなら、僕はどんなに愉快だらう。どんなに満足だらう、これは唯だ、お磯親子に就いてばかり云ふんぢやアない、すべて、かう云ふ心の持方で、社會にも人間にも對して貰ひたいんだ」俊郎の顔には次第に血が騰り、愚弄の調子も何時しか改まつて、果ては人の胸に沁むやうに沈痛になつた

聞いて居る中に、喜代子の顔の緒りは緩み、だん／＼極りが悪さうに笑顔になつて、俯く顔が赤く染つた「又くだらないことを申しました」と口籠る

俊郎は、澁い顔をして、喜代子の額際を眺める
平生俊郎が、如何に、自分の趣味に喜代子を同化しやうと訓練して居るかは、これに依つても窺はれるのである

「けれども、亂暴な漁師の若い者に、恨みなんか御受けなすぢやア」と、喜代子は形を改めて頭を擧げた「構はないよ、此方に後暗い事さへなければ、却つて面白いぢやアないか、僕は却つて、調子つてやらうと思ふ」と、俊郎は強ねたやうに顔を横に向ける「御止しなさいまし」と云ふ喜代子の聲は細く沈んで居る

ふと又舊の眞向に直ると、喜代子の深く響んだ心配顔が目映つたので、俊郎は軽く二つ首肯した「いゝよ、僕にだつて僕だけの分別はあるんだから、心配しなくつていゝよ」「わたくしも變だと思ひました、種と京と三人で坂の上立つて居りましたら、出掛けに後へ来て、態とわたくしを押退けてどん／＼驅降りた人が御座いましたか、あれがさうなんで御座いますね」「むゝ、それだ／＼して見ると、僕はかぢぢやアない、喜代さんにも恨みを含んでるんだね、劍呑々々、喜代さんも要心しなければならぬよ」俊郎は苦笑ひである「厭だこと、こんな所に長居しすに、何所か外のいゝ避暑地へ參らうぢやア御座いませんか」「卑怯な事を言ひ給ふな、喜代さんの平生の抱負に對しても、耻かしい譯ぢやアないか」「だつて」「あの突當つた奴へ公然に打突かつて、どんな奴か研究して見なければならぬ、僕は構はないけれども、お磯へどれぐらゐの仇をするか確めないと、餘り無責任だらうぢやアないか、自分の爲に、女の子一匹を苦しい目に逢ふ運命に落して、知らん面をしてるのは、第一男兒として卑怯未練ぢやないか、だから、あの源八とか云ふ奴の誤解を解いて、心から謝らせない中は、僕は秋谷を去るまいと覺悟した」眉を上げて、きつぱりと宣言した俊郎の聲には、是迄に無い音樂のやうな震へを帯びた高い調子が含まれて居るのである

喜代子は、目を落して、石像のやうに固くなつた「心配する事は無いツてば」「だつて」「好くだつて云ひたがる人だ、秋谷迄だつてを賣りに來たのかえ、御苦勞千萬に」もう、こんな小さな問題は念頭から打棄つたと云ふやうに、俊郎は兩手を延ばして大欠伸を一つ「だん／＼雷が近くなつて來た、これア面白い天氣になりさうだせ」

其二十四

喜代子が物思はしげな様子で四疊半を出た後、俊郎は今着いたばかりの東京新聞を手に取つて、湯屈凌ぎに細かく讀み始めた

非常に蒸暑くつて、頭は鼎でも冠つたやうに重いのであるが、時々冷々とした風が一棧動いて来る、遠雷の音も聞こえる、驟雨が来るかも知れない

「きやツ」と、消立たましい女の叫び聲に、俊郎は新聞紙を捻擲にして、立上つた

聲は門の方である、何事だらう、何者だらうと、怪み訝る間もあらせず、色を變じて駆込む者はお碓である、手に魚の籃を提げて居るから、平生の通り晝の副食物を持つて来たのであらうが、此娘があんな聲を出したのなら、餘程非常の事に出會したにちがひない「碓ちゃん、どうした」と聲を掛け

たけれども、お碓はそれに答へをなさず、松の間を見え隠れに、裏手の方へ駆けて通つた

思ひ當る事があるだけに、俊郎の胸には云ひ得ぬ不安が湧き出でた、歸りにお碓が此前を通る時、是非呼止めて聞訊さなければならぬと、一心に待構へて居たが、やゝ時経つても歸る姿が見えない

どうしたので暮らうと心配して居る所へ、お種を随へて喜代子が後に入つて来た「悪い奴が後から附

いて来て、あの娘を虐めるさうですから、爺やにでも送らせませうか」と、喜代子が眉を擡めると、

「あの、昨夕若旦那様へ突當つた奴で、源とか申しますさうで御座いますよ」と、お種は厭に首を編めて、人を嚇かすやうに咽喉で物を云ふ「むくさうか、其奴が門の前でお碓を待つて居るのか」と云ふ中に、俊郎の顔色は少し變つて来た「執拗い奴だな」と目を光らして、疑と考へる様子であつたが「好し」と首肯いて、斷乎と頭を擧げた「爺やぢやア不可まい、僕が送つてやらう」「若旦那様が」と悔りして、お種は喜代子の顔色を窺ふ

喜代子は唯だ、不安らしく且つ恨めしさうに、俊郎の顔を見上げるばかりである

「あんな、賤しい漁師の娘なんかを、若旦那様が御送り遊ばさないたつて、爺やさんで不可なければ一人で歸らした方が宜しいぢやア御座いませんか、こんな土地で御座いますから、風儀も亂れて居りませう、あの娘が男に附纏はれるも、何か深い譯のある事かも知れないぢやア御座いませんか」と言葉に力を込めて、屹とお種は俊郎の顔を睥めたが、相手に口を開かせずに直ぐ押冠せた「それア、若旦那様の御心は消くつて被在います、けれども、いくら若旦那様が清い御心であの娘を御庇ひ遊ばしても、其御心が源とか申す奴に通らないんで御座いますよ、變に勘ぐつて、若旦那様に情婦を取られたか何ぞのやうに思つて、屹度無鐵砲な事を致しますよ、譯の判らない田舎者の無法な奴は、一番異う御座いますからね、御身分ちがひの相手で、御勝ち遊ばしたつて御辱まれにもなりませんし、これ

ア、若旦那様の方から御手を御引き遊ばして、一切あの娘の事に就いて御掛り合ひの無いやうに遊ばした方が宜しいかと、失禮ながら種は存じますけれども、御嬢様の御考へは如何で被在いませう」建板に水、自分は斯道の博士だと云はぬばかり、仕済し顔に辯じ了つて、意味ありげな上目使ひに、じろりと喜代子を見る、成程、お種は喜代子の附人として寄越された女である

喜代子は黙つて俯いて居るけれども、お種好く云つて呉れたとの満足は、自然に口のほとりに現はれるのである

黙つて聞いて居たから、感心してそれに随ふのかと思ひの外、云ふだけ云はして俊郎は首を振り出した、喜代子とお種とは案外の顔を見合せる

「どうあつても、これア僕が送らなければならぬ責任だ、若し源八とか云ふ男が變に誤解してるのなら、お種の爲にそれを辨明するのも僕の責任ぢやアないか、それを、無鐵砲の事をされアしまいかと恐がつて、責任を逃れ、辱罵い女の子が看すく慮められるのを、知らん面して見てるなんて、そんな卑怯な真似は僕に出来やアしない、僕は何も酔興で送りたがるんぢやアない、意地で送るんだ、送らなければ僕は男兒でない、縦令門の前に待つて居たつて、僕が一緒に出たら、其源八と云ふ奴も豈夫暴行を加へやアしまい」「いゝえ、亂暴な事をしないと限りませんで御座いますよ」「お種は罵起となる」「いゝさ、亂暴な事をしたら、此方にも仕構があるから」俊郎は事も無げに笑つて返けるの

である「ぢやア、若旦那様は、其源八とか申す奴の出やうに依つちやア、立廻りでも何でも遊ばさうと被仰るんで御座いますか、あの漁師の娘の爲ならどんな事でも」「お種、言葉が過ぎるぞ、お前の知つた事でないから、黙つて居ろ」俊郎は鋭く一喝を浴せる「へえ」お種は口惜さうに俯く

俊郎は、眼を怒らして轟然と立上り、兵兒帯を解いて、低く、固く締め直すや、葉巻一本、新しく火を附けて脚へ、喜代子とお種との不満顔を尻目に掛けて、突と四疊半を立出でた

間も無く、麻裏草履を踏占めて、大跨に緩りと歩く俊郎の姿が、庭の松の間に認められた「磯ちゃん、磯ちゃん」と大聲に呼ぶ

其二十五

お磯が空になつた魚籠を提げて裏手から出て来るを待合せ、俊郎はそれと並んで門に向つた、喜代子とお種とは、厭な顔をして家の中から見送るのである

門の際へ行くと、俊郎は突と身を挺んで、一足先に門外へ出たが、反身になつてすと海面を見渡した「やア、あの雲の塊だな、時々冷たい風を送るのは」と、高く強い聲で氣持が好さうに獨語したが、門から少し離れて用ありげに蹲んで居る男に屹と目を着け、忽ち又何喰はぬ顔に視線を反らして、沖の方に黒山をなす雲の塊に注いだ「あの中に、雷も電も含まれてるんだ、今に此方へ驟雨

を持つて来るだらう、やア、段々擴がつて来た、實に壯觀だ」と手を舉げ、指先で、大空へ雲の塊の輪廓を描く

蹲んで居た男は、俊郎の出で来たのが餘程氣になると見えて、もち／＼身を揉む様子であつたが、とう／＼立上つて人家のある方へ向き、ふら／＼詰らなさうに歩き出した

所へ、お磯が覺束無げに門を出た「磯ちゃん、今に夕立がやつて来るかも知れないから、急いで行かうぢやアないか、僕はお前を家送送つて上げるよ」と、俊郎は態と先行く男に聞こえるやうに呼ばはつた

雲は見る／＼擴がつて、其黒い翼の端が見上げる頭の上に及び掛けた、天の三分の一は瞬く間に吞まれて、其二も最早危い、雷は、途を塞ぐ物がない爲に、思ふさま海の上を轉がり廻るのである、實に海の上の夕立雲程雄大な觀物は無く、海の上の雷鳴程壯烈な聞物は無い、此觀物此聞物に壓倒されて、海の面積は縮まつたやうに見え、其波音は小さく弱く薄ッへんに聞こえる、俊郎は雀躍するばかり氣持が好く、胸が開いて廣くなるを覺えた、お磯と源八との事の爲に、少なからず頭を悩ませ氣を疲らした自分を今更可笑く思ふやうになつて、我知らず「は／＼／＼」と、底が抜ける程高く晒つた、天を仰いでゐる

「どうかなさいましたの」お磯は怪慥顔になる、先行く男も、妙な顔をして、ちよつと振り返る

「いや、どうもしないけれども、僕には、此夕立雲の景色と雷の音程氣持のいゝものはないんだよ」と勢好く云つて、又一つ晒ふ、お磯もそれに誘はれて笑顔になつたが、先行く男を瞥と見るや、俄に立淀んで、俊郎を楯に身を守らうとする「家送送つて下さいますか」と小聲で云つて、祈るやうに眸を凝らす

黙つて、確と首肯いて、凝と顔を見ると、お磯は少し赤くなつて俯く

「呷くやうなお磯の小聲が耳に入つたらしく、先行く男は又も振り返つたが、それは丁度、お磯が俊郎に顔を見られて、赤くなつて俯きかけた途端であつた

恐ろしい形相になつて、今にも飛び戻つて握みかゝるかと思はれたが「さア、降らない中に急いで行かう」と、俊郎が猛然と足を進めたのに度膽を抜かれたらしく、又ふら／＼と、追立てられて是非無くと云ふやうに歩き出した

お磯は楯を離れじと俊郎に續く

兎角後が氣になるやうに、なほも幾度と無く振り返る男は、勢ひ込んで前へ進む俊郎とお磯とに、ち迫越されさうになつて、少なからず慌てた様子であつたが、さりとして、急に足を早めるも變だ、つたらしく、思／＼／＼と吐いて、路の傍へ身を退いた

目立ぬやうに身構へをして横向に立停つた男の前を、殆んど磨れ／＼に、俊郎は平氣な顔で通りぬ

きた

此所が、お磯に取つては大事の關門であらう、俊郎の一方の脇へ、びたりと身を寄せて、抱へられた形になり、立停つた男の目を逃れるやうにして、通り過ぎてから「厭な奴」と舌打した

俊郎は、態と聞かぬ振に葉巻の煙をしたたか吹出して「これア、磯ちゃんの家へ行く迄持たないやうだせ」と仰向く

黒い雲は更にそれより黒い雲を吐出して限無く、黒い曲線の輪廓の上に更に黒い曲線の輪廓が重なつて、果しもなく擴がり行き、それに連れる電も雷も、一段は一段より激しくなつて來、遂には、其大半圓形の雲の塊の中に成る變化が起り、油のやうな氣が八方に流れ擴がつて、雲と雲との重なり目を塗潰して了つた、海は灰色になつて、平生に見られぬ蛇の腹のやうな厭な光澤を帯びて來た「わたくしは降られたつて構ひませんですけど、貴方にお氣の毒で御座いますね」「お前が構はないなら、僕だつて構はないさ」

俊郎は、もつと何か云ふことがあるやうで、それが急に胸に浮ばない、お磯も何か云ひたさうに見えるながら、口を開かずに居る、手持無沙汰になつたので、ふと俊郎が後を振向くと、お磯も同じやうに振返つた、それが丁度申合したやうに見えるのである
後からは、彼の男が深く考込みながら附いて來る、夕立雲は其翼の肩を壓着ける

男が段々近づいて來たので、何時しか自分等の足の鈍くなつて居るのに氣が附いた「急がう」と、強く一つ煙を吸込んで、ふツと後へ吹送るや、氣を變へて足を早め出した

其二十六

顔に吹掛かる一葉濃き葉巻の煙をば、忌ま／＼しさうに手を掉つた拂つた男は、唇を噛んで二人の後姿を睨むのである「畜生」聞こえない程の聲をば、更に齒で止めて緊して噛占めた「態と見せ附けやアがらねえでも、い／＼ぢやアねえか、畜生、真賊にどうして呉れべえか」自業に鬨子を弾ましてやぶれかぶれ、聞こえても構はないと云ふやうに嗷鳴つて退け、腕を擡んで、眩と身構へしたが、素破や、どん／＼驅出して二人へ追附き、磯郎を突飛ばすかお磯を引戻すかと思ひの外、又も姿然となつて、擡んだ腕を其儘に組合せ、前よりも一層深く、死ぬか生きるかの大問題でも控へて居るやうに考へ込む

夕立雲は、低く更に低く、其男の俛れた首時つた肩を壓着ける、雷は其頂に鳴り、電は其背に光る二十三四の、骨太で肉附の好い體軀、力みのある締つた顔に、濃く感つた眉蛇のやうな血走つた目それに、剛い頭の毛の長く揃へて角刈にしたのが、百日盪めいて益々凄みを添へる、色は煤竹に油を塗つたやうで、鼻だけや、赤みを帯んで居る、紺紺の單衣に紺木綿の兵子帯、裾は短くて臍を露はし

襦は開いて鳩尾迄見える、山桐の芋下駄に赤小豆皮の鼻緒のすがつたのを穿き、腰に手拭を挿んで居るのである、強さうな、さうして執念深さうな男である

二人は、只管足を早めて、雷の音込め後に男の怒鳴るやうな聲が聞えたけれども、振返りもせず急いだので、後から鈍々と遣つて来る男との距離が餘程遠くなつた、後から追つて来るものは、驟雨か男か、二人は其驟雨を逃れやうと足を早めるのか、其男を避けやうとてか

「彼奴が源八かえ」と、俊郎は歩きながら訊ねる「え」と、お碓は歩き乍ら首肯く「昨夕突當つた奴？」「え」と「虫の好かない奴だねえ」「え、眞誠に厭な奴で御座いますよ、人がみんな恐がるもんですから、いゝ氣になつて勝手な眞似をするんで御座いますの、わたくし、あんな奴恐かア御座いませんですよ、先刻見たいに、力任せに手首を握つて引張られますと、痛くつて仕様が御座いませんですよ、手へ食附いて、振離してやりましたけれど、握られた所がこんなに赤くなりまして、まだびりびり致しますの」「白くはないけれども、骨細なのにふっくりと肉が着いて、無類に格恰のいゝ手を、惜氣も無く臂迄捲つて見せる

二人の歩みは、知らずくりに又鈍くなる「餘ッ程執念深さうな奴だ、蛇見たいな目をして居る」感心したやうな調子で云つた俊郎の顔には、又少し不安の色が表はれ掛けたが、一切り、目が瞬む程の激しい電と共に、空が崩れ落ちたかとはかりの雷鳴に「愉快」と絶叫して、打つて變つた快然たる状

態になり「彼奴ア、立石の下の河童の化物かも知れないせ、碓ちやんが、始終彼所へ入つて泳いだもんだから、深く見込んで、陸迄附いて来たんだらう」と、事も無げに云ひ棄てた

一粒二粒、蠶豆程の雨が落ちて来た「今にさアつとやつて来るよ、驅けやうか」「え、驅けませう」二人はどんく驅出した、ばらくと、大粒の雨が篩はれるやうに疎に落る、何所と無くごうツざあツと音がする、土の香が鼻を衝く

閃一闪轟一轟と、空が二つに裂かれた合圖と共に、どうツと瀑布なす雨が注いで来た、雲のやうに湧く土煙に包まれて、お碓も俊郎も暫し互に見失ふ程である、而も、雨は一旦たゞき散らした土煙を又忽に打鏡めて、今度は、雨と雨との間を縫ふ撒の濃さに、矢張二人を手探りに探り合はせやうとするのである

さながら間斷無く頭から湯湯を注がれるやうで、息も塞がりさうな苦みのある代には、全身に云ふべからざる快味を感じる「幾に暖かい雨だねえ」「何か、咽ッほいやうな匂ひがするやうですねえ、身體に毒ちやアないでせうか」「毒ちやアない、薬だよ、極くいゝ温泉の湯瀑に打たれたつて、こんなに身體が溶けるやうにいゝ心持にはならねやアしない」「さうでせうか」お碓の言葉遣ひは、例よりぞんざいな程心易立てになつた、雨の仕業が俊郎とお碓との距離を一段縮めたのである

雨は愈々強く、瀑布の中に更に瀑布が落ち込むやうで、眼中皆白きが間を、電の線が、青く紫に貫い

て通る、雨の音と雷の響とは、互に他の一方を潰さうとして競争する、俊郎とお磯とは、一人々々の力では此自然界の大革命に敵對することが出来ずに、知らず／＼相寄り相扶けて、久平夫婦が慌て、板戸を締めて居る前に、濡鼠のやうになつて現はれた時には、確と手を執り合つて居たのである

其二十七

久平の店は、底迄濡込んだ若い男女を呑んで、全部霽々と板戸に鐘はれた、外は板も壁も破れよと百千の砲丸の打つ音、内は夜のやうな暗黒である「酷い驟雨だねえ」と叫ぶ俊郎の聲も、聞こえぬ程の雨と雷、隙間から突いて入る電光の爲に、何所に誰が居るか判るだけである「此酷い天氣に、好く御出でなさいましたね」と、久平も大きな聲「磯ちゃんを送つて来たんだよ」「それアア、御氣味が悪く切に、どうも有難う御座えます、そんなに濡れちやア、どうもかうもなんねえだから、御氣味が悪くつても親仁の著物に御換へなせえまし、お磯も、著物を出してやるから、そこで著換へてから上がるだア」と嬌「ついでに、御面倒だらうが、足も洗はして貰いたい」「何面倒なもんですか」と、嬌は立つ「盥は裏に出て居るだアから」と呟いて、何かは知らず、新しい桶に水を漲らして、乾いた手拭を添へて持つて来る「足を入れてもいいのかえ」「よう御座えますとも」又引込んだと思つたら、今度は、白と紺との二枚の單衣を持つて出る、白は俊郎の前へ置き、紺はお磯の前へ置いた

俊郎は、水に漬けたやうな著物を脱いで先づ頭から身軀を乾いた手拭で拭き、足を洗つて上がり、出された單衣をば「済まない」と云つて着たが「帯もぐしよ」だ、蚊帳の釣手でも何でもいゝから貸して呉れーと手を出した「これア、氣の利かねえ事を致しました」と、嬌は急いで奥へ行つて、單衣の抽斗をがた／＼云はせ、妻びたやうな小倉の角帯を出して来た

其間にお磯も足を洗つて、びし／＼濡れの著物を脱棄て、母が出した紺飛白に著換へた様子であるが家内が暗いので、脱いで着る間の極りの悪い繼目が見えずに済んだ、但しこれは、帯を出して呉れとは云はず前を合はしただけで、自身奥へ締めに行つたのである

驟雨は激しい程長持のしないものである、ひたぶる猛り狂つて、今に天地を引くりかへすぞと觸込んでも、何かに追立てられるやうに慌た／＼しく通り過ぎて、嚇かした程の事も無く済み、名残の雫をばらり／＼と落して、懸て、洗つたやうな晴天が後を押して来るのである

「開けねえか、もう雨が歇んだア」と手暴く戸を敲く者がある、嬌が出て、板戸を一枚引開けるとのそりと入り込んだのは、頭からも裾からも水の走る濡男である、「朝日を一つ呉んねえ」、膨れ聲で云つて、銅貨をざらりと投出す

「源さんけえ、あらい驟雨であつたねえ」と、順繰りに戸袋の中へ戸を送り込んで居る手を止め、端近く置いてある箱から、巻煙草を一つ抜いて渡す

男は、それを受取る間も、目を前方へ遣つて奥ばかり窺つて居るのである、確に心が手許に無い帯を締め了つて、久平に向ひ合ひに店へ坐込んだ俊郎は、源と云ふ聲を聞いて、吃と其男を見ると百日憂然たる頭の毛が雨に打たれて額に垂れ、平は幾條と無く顔を傳つて、凄みのある目が一層厭らしく光り、一心に奥を窺ふ氣込、慄とする程である、其執念深さ、其圖々しさには、俊郎も少し氣味が悪くなつた

源八と呼ばれた男、昨夕俊郎へ突當つた源八——先刻力任せにお磯の手首を握つて引立て行かうとした源八——にちがひの無い男は、煙草を取つても立去らず、懐を捜し腰を撫でなどして、態どらしくまごついて居る、かうして、お磯の奥から出るを待つのであらう、けれども、お磯は何をして居るのか、或は源八の來たのを避ける爲か、何時迄経つても出て來ないのである、さしもの源八も、少し極まりが悪くなつたと覺しく、煙草の口を切つて一本抜出したが、野呂臭く燐寸を摺つて、緩々と火を附け、吸込む迄には餘程時が経つた、けれども、お磯はまだ現れ出でない

立去らうとしては又止まり、首を捻つて何か考へて居る「源公、さうして居ちやア冷いだらう、早く家へ歸つて、著物を換へるがい、ちやアないか、毒だせ」と、久平が口を開く「む」と唸つて、じろり久平を見た目の凄さ「お前、どうかしてるのか」と久平は苦笑ひする「どうもして居ねえ」と劍突を食はせさま、俊郎に一睨みを呉れて、のそりと出て行つた

「何だか知らないが、厭な男だねえ」と、俊郎は一つ探りを入れて見る「土地の若い者の頭に立つ男ですが、今日はどうかしてるんでせう」久平も嫌も、別段氣に止めない様子である、親は迂濶な者、源八と自分の娘との間の暗潮がどれ程急なのか、一向御存じないと見える

「御父さん、源八の奴をどうかして御呉れ、あたしを虐めるんだから」暖簾の内でお磯の聲「は、手前又、源八が調戲つたのを眞に受けて、びんしやん勿附けでもしたんだらう」親仁はてんで受附けない「若え男てえ者ア、色んな事を云つて調戲ふもんだ、それを一つ／＼眞に受けて、憤つたり劍突を食はしたりしちやア、人に笑はれるだアよ、もう子供で無えだから、これから氣を附けねえか」娘は又其持前の非子供論を振廻す

暖簾押分けて、立出たお磯は、ゆくり無く俊郎と顔を見合して、父も母も自分を知らないと訴へるやうな色を表はすのである

其二十八

驟雨が過ぎて後の清く軽い氣は、家の中にも襲ひ入るのである

「どうも御世話になつた、ちやア、此着物は借りて行きますよ、借りついでに下駄も貸して貰はう」俊郎は、洗ひ上げられた天地に充満てる新しい空氣を貪りに出やうとするのである

「まア、御緩らなせえまし、もう御晝で御座えますから」「眞誠に、あの酷い驟雨にお磯を送つて下さつた御親切は、どう御禮を申上げたらいゝでせう、責めて、御緩くり御飯でも上つて下さいませんか」夫婦が口を揃へて引止める、けれども、俊郎がお磯を送つたのをたゞ驟雨の爲とのみ吞込んで、それより深い込み入つた理由があらうとは、夢にも思ひ到らない様子である、母は娘をまだ子供と思ひ、父は何時迄も子供にして置かうと思つて居る中に、娘は何時の間にか子供でなくなるべく發達するのである、否、世間がそれへ迫つて子供でなくならせるのである、お磯を何時迄も子供で置くことに同意し、寧ろそれを奨励した俊郎迄が知らず、世間の側に捲込まれて、お磯に子供でなくなれと迫るの餘儀なきに陥りさうではないか

度々馳走になるは氣の毒であり、且つは新しい景色のまだ遷ろはない中に出て見やうとの慾が盛であるから、勤められるを幸ひ居たいと思ふ情に打勝つて「難有いけれども、晝飯には磯ちゃんがつつて来て呉れた魚があるから、別荘へ入つて食べやう」と立上がつた「そんなら、晩に又被入い」「晩には、ウキスキーを持つて来て、親方と二人で日本海の記念會を開かう」と土間に向ひ「此所に在下駄を借りてつてもいゝだらう」と、有合ふ古下駄を突掛ける「此方の好いのを」と娘が立つを「いや、これで結構、ついでに敷島を三つ記けて置いて呉れ給へ」と自分で取り、曇る書戸外へ飛出した「驟雨が過ぎて直ぐ入日を見せて呉れると、眺向の廿法なだけけれども、まだ晝前だから、後の景色

が其割に榮えやアしまい」かう呟いて周圍を見廻したが「いや、さうでもない、驟雨が激しかった故か、後の景色も思ひ切つて引立つた、實にどうも、羽が生えて空へ飛上りさうな氣持だ」と、嘸鳴るやうな勢ひで云つて、ちよつと店を覗込み、久平と顔見合はして「はッはッは」と、氣持の好ささうな晒ひ聲を残し、悠々と歩き出した

草木は、今迄の古びた緑を脱して、底に包んで居た新しい色を出したやうに鮮かな緑を吐き、一葉づゝ、躊躇し飛動し、霧のやうな生氣を迸らして居る、空氣の澄んでさうして密なこと、一寸づゝでも一尺づゝでも、切取つて手に載せられさうである、これを箱詰にして貯へて置たら、死人を蘇らす靈藥となるのであらう

浮いて居る土の粉は残らず洗ひ流された上、皮を一枚剝取られたやうに、往來は堅く光澤を帯び、著しく凸凹が目立つのである、晴天の日よりも、却つて下駄の響が牙えて聞える

日の光も磨かれて美しくなり、海も空も灰汁が抜けたやうにすつきりとして、平生さうでない人家の屋根も柱も壁も板戸も皆光澤が出た、先刻の驟雨は物を洗ふ以上に激しかったのである、物をたゞ、物を摺り、物を研いで、すべての鏽を落したのである、俊郎などは、あの驟雨に鏽を落された物の随一であらう

例の床屋にも水屋にも、一切り若い者の屯集を断つて居る、語を換へて云へば、床屋も水屋も暫く

は儲を落された儘で居るのである

俊郎はすつと其前を通り過ぎた、通り過ぎて四五間行つた時、ぬつと床屋を立出でた男がある、源八である、着物も糊の剛い白餅に着換へ、今剃刀を當てたばかりと見える顔晴渡つて、見違へるやうな若者振にはなつたけれども、其目の中の凄みだけは蔽ふことが出来ない、俊郎の後姿を見送つてちよつと考へる様子であつたが、思ひ切つて早足に追ひ越つた「旦那、失敬ですけど、其所迄御一緒に参りませう」と言葉を買つて、びたりと俊郎に押並ぶ

俊郎は屹と打見たが「君は昨夕突當つた人だね」と單刀直入

其二十九

單刀直入に、昨夕突當つた人だと切込まれて、悔りするかと思ひの外、源八は「へえ」と頭を掻き乍らも、案外に平氣なもので「其御佞びをしへえと思つて、旦那の通るのを待つて居たアです」と、厭味ツたらしい笑顔で、俊郎へ横目を使ふ、何とも云へない、虫に障るいけすかない奴である

「どう思つて突當つたんだ」俊郎は力めて平氣に構へる
「實アね、お磯の阿魔を蹴ッ飛ばさうと思つて仕掛けた事だけど、見當ちげえして、旦那へ突當つたんだ」何故お磯を蹴飛ばさうと思ふんだ」俊郎の構へは益々平氣である

肩を並べて緩り歩く、俊郎が借着の單衣も源八が着て居るのも、祭の揃ひか何かと覺しく、「あきや」と平假名で崩したのを繋いだ同じ柄で、それに角帯を不器用に結んだ風は、俊郎も矢張村の若い者らしく見えるのである

「蹴ッ飛ばしても蹂躪つても、打殺しても犬に食はしても、い、譯があるだアよ」と憎てらしく空囁くを「さうか、餘程御安くない譯がある見えるね」と茶かして掛ける「御安くも御高くも、此譯はかしは、旦那に聞いて貰はなきアなんねえだ、でねえと、旦那が飛んでも無えまぢげえをするかも知んねえだから」「面白さうだね、ぢやア聞かして貰はうか」「お磯は俺の情婦だアよ」「さうかえ」、俊郎はちよつと肩を寄せ掛けたが、直に輕蔑の笑ひを含んだ調處面に變る「彼奴、見掛けに似合はねえ手管女だから、旦那をい、加減に胡麻化して、生焼らしく見せ掛けて居るかも知んねえだけど、もう、ひゝが入つた疵物でさあ、東京から來た男せえ見ると直ぐ浮氣を起しやアがつて、あゝしてべたつきやアがるだアよ、親仁も阿母もぐるになつて、散々ッ腹食ひ散らかした上で、うんと搾り取るべえツて魂膽なんだから、旦那氣を附けねえと、酷え目に逢えますせ、それにお磯をどうかしたら、第一俺が承知しねえだから、さう思つて貰ふべえ」云ひ了つて、例の目でさうり俊郎を睨む、挨拶の仕様に依つては唯だ置くまじき見張である

俊郎は世の中にこんな詰らなく馬鹿々々しい問題は無いと云ふやふに「ふゝ」と、輕少に粗末に

「厄談」と苦笑ひ
「元談ぢやアない、眞面目だよ、どうぞ、お磯を僕へ譲つて呉れてもいいだらう」「え、譲つて上げませう」苦笑ひも尋常の苦みではない「眞誠か」装つたと判るやうに恥となつて見せる「旦那、元談は扱にして、これから、お磯の家へ入びたつたり、一緒に水を汲みに行つたり、往來を見せびらかして歩つたりすることは、奇麗に止して下せえよ、俺の顔にかゝるだアから」

此に至つて、俊郎はとう／＼顔色を變へた、お磯と其身と關係があると云ふのも、お磯が見掛に似合はぬ手管者だと云ふのも、久平夫婦がお磯を囹に使ふと云ふのも、皆源八が自分とお磯との近づき合ふことを妨げやうとする、汚い根性から出た虚構に相違無いと看破した積りで、頭から調戲つて掛かつたのであるが、斯う何所迄も眞剣で切込まれては、不圖、或はそうぢやアあるまいかと思はれて来る、一度疑ひが起ると、もう自分で自分の心の働きを支配することが出来ない、何だか知らずむしやくしやとなる、第一、最初から虫の好かない源八が、高く地歩を占めて、自分の行動を束縛しやうと掛かるのが、癪に障つて堪らない「失敬な事を云ふな、己は己の勝手、往來も歩けば人の家へも行くんだ」と一喝した

其三十三

源八は顔を青く目を血走らして、嫉妬の烟火の爲に、身内が苦しいかと思はれる程に手足を震はしたが、彌子は厭に沈着いて言葉使ひも叮嚀になり「それ旦那の御勝手です、ただ、お磯を旦那がどうかなすつちやア、私は此面を旦那の土足で踏まれたと同じに思ひます、男が手を下げて頼みますから、どうぞお磯だけは御止しなすつて下せえまし」と、思ひ込んで大地へ踏まる、驟雨前の天氣のやうに、何だか底氣味が悪い

俊郎は憤るにも憤られず、せう事無し笑顔になつた「どうかしちやアいけないの、止せのと云ふは、それア何の事だ、お前は、己を見違へて居るな、お磯と汚い關係を結ばうとする者と思つてるなおい、もう少し目を開け、お前等になんかどう思はれたつて、己は痛くも痒くもないけれども、立派な一人前の若い者が、そんな玻璃細工見たいな目玉を持つて居ちやア、困るぢやアないか」と極め着ける「……………」源八は案外な顔をしながらも、何か云ひたさうに唇を動かす

「己は秋谷の別荘へ避暑に來て居るから秋谷の往來を歩く、久平と前から知つて居るから久平の家へ行く、それが何だえ、それが悪いかえ、それがお前に損でもさせるのかえ、何だつて、お磯がどうし

たつて、お磯が何だえ、子供ぢやアないか、田舎の子供ぢやアないか、日向ッ臭い、潮水ッ臭い唯の田舎ッ子ぢやアないか、それを己がどうするもんか、どうしたつて仕様があるもんか、お前の目にはお磯が辨天様に見えるかも知れないが、己の目は、生れッから潮風が浸込まない故か、どうしてもさうは拜めない、濱邊の女はどれもこれも同じやうに見える、おい、冗談ぢやアないせ、お磯なんか頼まれたつて眞平だ」果は、馬鹿々々しさに、鼻でふんとやつて「第一、己の目にやア、お磯はまだ子供としか見えないんだが」と、却つて源八を怪むやうな、様子を見せた

源八は、扱ては自分の見當違ひであつたかと思つたらしく、急に萎れ返つて耻かしさうに低れた首が、もう擧がらなくなつた

「おい源八さん、どうした、何所迄己と一緒に行く氣だ」云はれて源八は、悔りと上目を使つた、耻かしさうな色の底に、まだ少し疑ひの曇りが残つて居る「成程、別荘にやア、東京から天人見たいな許縁の御嬢様も来て居なさるし、其外様な別嬢も見えるから、何も酔興に、あんな田舎者の、潮ッ風に吹晒されたお磯を、どうかなさらうとする筈はねえだけ」と沈んだ調子で云つて、ぐツと唇を噛む、今度は、お磯の價値を落された口惜しさが加はつたのである、これで、俊郎が若しお磯を飽迄も美味喰ひにこなしたら、打つて變つて、お磯を庇ふ爲に俊郎へ食つてかゝらうと云ふ見解である、別荘内の事迄も知つて居る、眞誠に厭らしい男である

「さうさ、僕だつてそれ程の酔興者でもないのさ」俊郎の調子は顔と共に和んだ「だけど」源八は非常にもづかしい面になつて考へ込む「おい、もうそんなに心配しなくつてもいいよ、あんな女の子がそんなに大事なのか、秋谷にだつてさらにあるだらう」

冷かしても眞面目である「旦那、萬一お磯をどうかなさらうもんなら、お磯も此源八も可哀相ですから、餘ッ程氣を附けて下せえよ、お磯がへたつたつて、旦那の方が確りして居て下すつたら心配な事は無えですから」と、もう泣くやうな聲になつて頼むばかりである

俊郎も稍氣の毒を催して來た、厭な奴ながらも、それ程迄一生懸命にお磯を思込む心根は、不惑なものだと思つた、して見ると、お磯は頻りに厭な奴だのいけ好かない奴だのと云つて嫌ふやうな素振を見せるのだけれども、或は一度此男と好みを通じたのが事實で、自分に心を移した爲に此男を袖にするよと云ふやうないきさつとも、満更無いと打消されないやうである、兎に角、こんな事の起つたのも、本はと云へば自分が餘りにお磯に近づき過ぎたからである、と始めて霧が晴れたやうに自分の立場を認めた、そこで、容を改めて確と打首肯いた「大丈夫だ、決して心配な事は無い」

其三十一

御用邸の手前で、源八は叮嚀に御辭宜をして引返した、後姿に目を著けると、屈托したやうに頭

を低れて、肩ばかり高くなつて見える、まだ疑ひが残つて居るらしい。夢が覺めたやうな心地になつて、別荘の門を徐に入ると、松の間の路から家の構へが、今迄に無く住好げに懐かしく見える、葉巻を煙らせながら、喜代子と染々趣味ある談話が見たくなつた、喜代子を自分の趣味に同化すべく訓練することを樂みたくなつた、今迄覺えない心地である。お磯も送り届けた、源八とも當つて碎けた、驟雨も過ぎた、日本晴がした、萬事とん／＼拍子に片が附いた、俊郎は豁然として家内へ入つた。

もう晝飯で、一同茶の間に集まつて居る。無言ですつと入ると、捷懸いお京が「あら、お歸り遊ばせ、只今爺やさんが御衣服と御履物を持つて出ました」と云ひさま立上がつて、小腰を屈め襪を取りつ／＼とん／＼極り好く驅出して、玄關へ行き「爺やさん、若旦那様はもう御歸りになりましたよ」と呼ぶ、お京の身體は小さい時から舞踊で責められたと聞いたが、成程こんな場合に効驗が見えると感心すると共に、ふと、あのお磯に舞踊を稽古したらどうだらうと思ひ、急に又そんな詰らないことを思ふまいと打消した。喜代子とお磯とは、挨拶だけが叮嚀で、何所か打解けずに俊郎の様子を窺ひ、此方の出やうに依つて態度を極めやうとの風が見える、俊郎はそれも尤もと思つた「酷い驟雨であつたねえ、途中でやられてぐし／＼濡れになつちやつたから、御覽、こんな物を借著して来たよ、着る時は味氣が附かなかつ

たが、後で見ると、祭の揃ひらしい柄さ、源八の野郎もこれと同じ物を着て出て、驟雨に洗はれた舞臺で、鞘當の一幕物を演じたと思つて呉れ、どうだ、僕も秋谷の若い者の仲間に入る榮譽を得られさうだらう」と突立つて見せる。

喜代子は、呆氣に取られて眺めてばかり居る。先刻嗚鳴られたのを根に持つて、已むを得ない用向の外は口を開くまいと覺悟したやうに、つんと濟まして居たお磯も、かうなると、生れ附いての鏡舌だから我慢が出来ない「間も無くあの恐ろしい驟雨で御座いますから、どう遊ばしたかと思つて、御案じ申して居りましたんで御座いますよ、あの源八とか申す奴が、若旦那様へ突掛りませんで御座いましたか」

俊郎は御出でなすつたと首肯いた「物事は何でも當つて碎けるだよ、行きには、僕の出したのが出抜けであつたもんだから、面喰つて手出しもしなかつたんだが十分に覺悟を極めたと見えて、待受けて、筋骨通りに飛出した」「へえ、若旦那様が御勝ちになりましたか」「いやどう懸命で、お磯の爲なら生命も投出さうと云ふ意氣込だから、全く凄かつたよ」「へえ、」
 つたら、懐から出刃刀かナイフが飛出しさうな見振だつた「へえ、凄う御座いますも飯を食ふよ」「あら、只今御膳を出しますから、どうぞ其續きを」「とう／＼人を講つた、續きを讀まなければ、飯も食はせないのか」「左様で御座いますとも、それア」

此次は詰らないよ、だつて馬鹿々々しいぢやアないか、誰があんな田舎娘の子供見たいな奴(ら)の相手を擇ばず喧嘩なんかする奴があるもんか、第一、僕がいくら酔興だつて、あの娘をどうかとする者のやうに見當違ひをされちやア可哀相ぢやアないか、だから、頭から笑つて〜笑ひやつたんだよ、其方から見たら女かも知れないけれども、此方は石塊か丸太の切ぐらゐにしかいんだから、心配するなつてさ、何とも思はないから、狗兎でも連れた氣になつて、苦にせずにな歩けるんぢやアないか、馬鹿々々しいと云つたらいか、可笑しいと云つたらいか、まるッきり御話にならないよ」「それで、結局どうなりました」「今度は喜代子が口を挟む「野郎もとう〜悟つて、今度は滅茶々に謝るのさ、謝るのはい、が、僕にお磯を美味噺に云はれたのが口惜かつたと見えて、別荘には、天人見たいな許縁の御嬢様が居るから、お磯なんか鼻汁も引つかげないのは當然だつて、けちな厭味を云やアがつた、は〜、は〜」

「よう〜、御嬢様御存なさいまし」「お種は手を拍つて喋り立てる「は〜、は〜」お京も艶やかに笑ふ「あら厭だ」、喜代子は耳迄赤くなる、これで、お磯問題は煎餅よりも脆く揉み壊されて了つた

其三十二

秋谷に来てから、俊郎の身には業外に事が多いけれども、別荘に居て單調の生活から繰返して居

る喜代子主従は、早や何か變つた事珍しい事を求めるやうになつた、晝飯を食ひながら、各自に勝手な事を云ふのである「鎌倉あたりだと、見物する古跡も多いし、海岸の具合もい〜んだけれども」と喜代子が出し掛ければ「それに、東京の人も澤山参りますから、賑かて宜しう御座いますけれども」とお京が繼足す、お種は二人の「けれども」を受けて「此地は、御淋しくつて、別に見物する所も御座いませんし、それに海岸が悪う御座いますから、不可まません御座いますねえ」と結ぶ

これで、秋谷の海岸は三人の女に否定されたのである、俊郎が出なければならぬ「さう云ふけれども、鎌倉や逗子葉山は肺病の巢だよ、賑かな所がい〜なら、淺草觀音の豆賣婆々になるさ、相州の海岸で此所程景色のい、所は無く、それに雑沓でないのが何よりぢやアないか、退屈なら、遊び事は澤山にある、山へ百合の花を取りに行く、海へ鱒を釣りに出る、それから、舟へ乗つて天神島あたりへ行つて見る、これ等は、追々僕がやつて見やうと思つてる事だよ、其中に段々面白くなつて来るからまあ我慢をして居給へ、演劇に中毒した療治だと思つて」「御口が悪い、中毒する程御演劇が看られると宜しう御座いますけれども、ねえ御嬢様」又もやお種が御嬢様を楯にする「あんまり詰らない〜ツて云ふと、乾度詰つて仕様の無い事が出来るもんだよ」「は〜、詰る事つてどんな事？」と喜代子が乗り出す「詰らない事の反對さ、睡氣覺しになる事さ」「誰がそんな事を致しますの」「誰も遣る者が無ければ、僕が遣つてもいいさ」「どうしてなさいますの」「さうさね、此邊で睡氣覺しに

なりさうな事は、僕も喜代さんも、お頼もお京も、みんな海へ飛込んで死ぬんだね、さうしたら四人情死とか何とか云つて、世の中が大騒ぎになる、三人情死は稀にあるけれども、四人情死は先づ珍らしからう」「お、厭、それこそ詰らない事ぢやア御座いませんか」

軍饅口を利用して晝飯の膳を賑はして居る所へ一旦那、内のお磯が山へ百合の花を取りに行つて、悪い奴に追掛られました「だアよ」と、田舎女の抛り出したやうな、高調子が響いて来た「えッ」と振向けば、四疊半の檎子に外から捉まつて、座敷越しに此方を覗くは、久平の娘である

箸を投げて立上がり「追掛けられてどうした」と叫び乍ら駈出る「どうなつたか判らねえで、親仁がお磯の行つた通りの路を捜しに行きました、山傳えに此家の裏へ逃げて来るかも知れねえですから、濟ねえけど、旦那も裏の山へ上つて右の方の路を捜して見て下せえまし」どんなに急いで来たか、息がせい／＼して汗が球を吹いて居る「悪い奴ッてどんな奴だ」「先刻ぐしよ濡れで、店へ煙草を買ひに来た奴でさア、何でも今日はお磯を手込めにするだアつて、後を附けて山へ行つたさうですよ、あんな野郎に娘を疵物にさして堪るもんかつて、親仁が眞赤に憤つて馳けて行きましたから、殺して呉れなければいゝと心配して居ります」「む、あの源八の畜生だな」「旦那もう名前も御存じけえ」「好し、僕が行つてやる」「内の親仁は憤るとおツかねえ人ですから、野郎を殺さねえやうに、宥めてやつて下せえまし」「む、心得た」

檎子の内と外との問答が了つて、俊郎は有台ふ上草履を突掛けるや、疾風の如く裏手へ飛び出したお磯を手込めにする云ふ以上は、情婦だと自分に斷つた源八の言葉はから嘘であると悟ると共に、憤りは足の土踏ますから腦天迄突上げ、同時に、お磯の清淨を知つて、其處女を保護しやうとの念も嫌に、山へ百合を取りに行つたは、自分へ持つて来て呉れやうとするのであらうと思へば、お磯に對する情は、一刹那に燃え上つて、矢も鐵砲も耐らず、裏口の枝折戸に錠の掛つて居るを開けるも闕かしく、運動で鍛へた身の軽さ、柱に手を觸れると見えたが、閃然と外へ飛起した

其三十三

俊郎は、松ばかり生きて居る後の山へ一氣に驅登り、吻と息をすると共に、帽子を冠つて居ないことに気が附いた、けれどもそんな事どころでないから、暑いのを我慢してすん／＼進んだ

細徑の左右に岐れる所となつて、教へられた通り右を取り、登つたり降つたりして何所迄も驅けると、松は次第に数を減じて雑木の数が次第に加はつて来る、路は山の脊梁を繞うて走るので、所々に谷へ降る枝があるけれども、それに構はず高い所を進んだが、何所迄行つても果しが無く、人ツ子一個に逢はない

かうして時を費す間に、お磯がどうかなくなつて了やアしまいかとの虞れがある、久平は又何所を捜し

て居るのだらう

立停まつて耳を澄ましたが、聞こえるものは松吹く風、鳥の聲、虫の音ばかりである、目に見えるものは青空と山の緑とで、海も村も山に隔てられて居る、細かに視れば、足許に燕子が咲いて居る、女郎花も見える、少し離れた蛭の上に重い頭を低れて白く染抜かれたやうになつて居るは百合の花である、お磯はあんな危ない所の花も取るのであらうか、立停まると、茨に掻かれたか、茅の葉に切られたか、痛みに放へられて足の疵を知るのである

どうとも仕様が無い、無暗に進んで山深く入つて了ひ、出る路に迷ふやうなことがあつては、自分も亦捜される人にならなければならぬかも知れないから、先づ此大きな切株に撫子の咲き添うた所を根據として、何とは無しに大きな聲を出して見やうと「おーい」と、咽喉の堪へ得る限りに叫んだ

續いて一聲、又一聲、三聲目に「おーい」と反響がある

方角も位置も明かでない、男か女かも知れないけれど、兎に角餘り遠くない所から發する聲には相違無いので、更に一聲「おーい」と呼んだ、けれども、今度は應へが無いのである、それでは、今の反響は嶽であつたかと、俊郎は痛く失望する、云ふべからざる不安が湧く、泉のやうに汗が湧く

あの蛇のやうな血走つた目をして、何所迄執念深いか判らない源八、言語から擧動迄、尋常と違つて狂氣じみた所のある源八、此往來断えた山中で、何所かの谷際へお磯を追詰めた上の事は、想像

するさへ血が頭に騰る、あんな奴であるから、お磯が縦令鷲に攫まれた小雀のやうに観念して爲すが儘に任せたとして、たゞ懸んだぐらゐで壓らず、それ以上の事に及ぶかも知れない、況して、お磯が之に抵抗つた結果はどうなるであらうと思へば、胸の動悸がぐるりに高まつて来る、また捉へられずに逃げ廻つて居るのなら、女の子だから聲を擧げて救ひを求めなければならぬ、もう擧げられた上だつて、捻伏せられた上だつて、息の塞がらない中は悲鳴を發するに相違無い、それ等の激しい聲が此静な山中に聞こえない筈はない、また捉まらないのであつて呉れるといふけれど、もう、聲も出されぬ羽目になつて居るのではあるまいか、出すべき聲も無くなつて了つたのではあるまいかと、覺えず俊郎は戦慄した

すると、出し抜けに耳近く「おーい」と呼ぶ聲がある、俊郎は胸りしながら「おーい」と應へた、「静に〜、大きな聲を出しちやアいけません」と云ひつゝ、一叢の青茅を押分けて立出でた者は、深く眉の皺んで居る久平である「お、磯ちゃんが見當らないの」お磯が行つた通りの路を取つた筈の久平が、反對の路から進んだ俊郎に逢ふ迄、手を空しく眉を皺めて居るを以て見れば、事柄は益々重大である

久平はちよつと頭を下げて「どうも、飛んだ事を願ひまして、御苦勞様です」と、眉間の皺を伸す眉間の皺は伸つても、深い心配の曇りは晴れない「まだ見附かりません、どうも、お磯一人なら太

きな聲を出して呼んでもよう御座いますが、悪い奴に附かれて居るんですから、此方の聲が聞こえたら狼狽へて何をするか判りませんです」「ぢやア、どうしたらいいだらう」俊郎の氣込は、自分の身上の大事を久平に頼むと云ふやうである。「一番百合の多い谷へ見當を附けて入つて見ましたが、何の手掛りもありませんですから、今度は、此方の片ツべらを捜しませう」村に向つた方と反對の谷を指した

「ぢやア早く行かう、かうしてる間にも、磯ちゃんがどうかかなりやアしまいかと心配だ」さア、夫が心配です、疵物にされて了つた後ぢやア、取返しが付きませんですから」

久平を先に、俊郎も後から押掛るやうに促いて、雑木の深い谷へ降り始めた「此方は濕ッ氣も多う御座いますから、御氣を御附けにならないと滑りますよ」と、久平は囁くさうに云つた「おつと危い、大丈夫」滑り掛けて踏止まる「御静に」久平は直と立停まり、腰を屈めて耳を側てる「む、何か来たやうだ」、俊郎も小さい聲

俊郎を手招きして、久平は木の蔭に身を隠した、俊郎も抜き足して藪の後へ入つた
息急き谷から驅登るは源八である

其三十四

谷から驅登る者を源八と見るや、十分近寄りして、久平は突と木蔭を立出でた「むッ」と、身體に驚愕の波を打たして、倒れんばかりに反りかへる

久平は隙かさず直と詰寄つて、重く強く鐵の車の軋るやうな聲を出し「お磯をどうした」と唯一言

例の、祭の揃ひらしい浴衣で、湯を浴びたやうに汗を流し、裾は高く端折つた上に片肌を脱いだ源八は、勢ひを附ける爲に引叫けたのか、酒氣を帯びて居るのである

「俺ア知らねえ」俊郎が一緒に來たのを見て、酒の爲に一層赤く光る蛇の目に毒々しい嫉妬の色を浮べ、暴々しく刎附けた、目尻から頬に掛けて、左の半面にベツとりと、赤色に黒みを帯んだ、血の塊のやうなものが食ッ附いて居る、熱く視ると、肌を脱いだ肩から二の腕に掛けて、其飛ツちりが點々と木瓜の花を綴づつて居る、氣の故か腥い臭ひもするやうである、而もそれが源八の身體から出たものとは見えない

俊郎は愕然とした

路に立塞がつて、暫くの間凝と源八を睨んで居た久平は「うぬ、知らねえ事があるか」と、火薬の燭發したやうな猛烈の叫び諸共、躍り掛つて肌を掛がない方の二の腕を、着物の上からむづと握む

「何するだア」と眉を擧げて、放振しさま身を沈めると見えたが、握拳よりも大きい巖片を拾つ

て、いきなり高く振上げた、其殺伐の悪相、二目と見られない程凄く恐ろしい、俊郎は思ったより始末の悪い相手だと思つた

けれども久平は悔ともしない「は、そんな物を振上げて、俺へ打着けやうと云ふのか、さア、打着けろ、打着けて見ろ、世界の果から果へ飛んで歩いて、生命を玩具よりぞんざいに取扱つた久平だ、身軀なんか、半分缺いて取られたつて、残る半分で鯨鯨立をして見せやうツて男だ、些と年齢を食つたつて、己等見たいな青二才に齒が立つもんか」何ツ、俺だつて秋谷の源八だア」と擬勢は張つても、少々凹たれ氣味が見え出したのである

隙を窺つて、久平は電の如く左手を飛ばし、巖片を振上げた源八が右手の手首を取るより早く、木の枝でも曲げるやうに捻曲げて、咩と握つた手に力を込めると、脆くも巖片を地に落した

「弱い癖に、若い者の頭だなんて、威張つて居やアがる」と罵りさま、源八を大地へ捻倒して足下に踏まへた

起きやうと腕けば、踵に力を込めて背骨をぐりぐりやる、刺られるやうに苦しいか、又平太張つて顔は紫に、目は飛出す程に睨つて、きりく歯を切る、久平の力は凡庸でないと見える「さア、お磯をどうした、お磯か何所に居る」「云はねえ、知らねえ」「畜生、執拗い奴だ、云はなきや斯うだ」全身の力と目量とを一方の踵に集めて、ぎゅうく刺り着ける

「い、云はねえ、こ、殺せ」「弱音を吹くな、それでも秋谷の源八だつて廣言が吐けるが」「ど、どうでもしろ」と、土に喰ひ着、「真誠にか」と、搾り出すやうに云ふと、今迄變らなかつた久平の顔が、見るく震へるやうに筋肉を動かして来て、一面に紅を刷いた、源八の背中に、銅の柱のやうに突立て、居た脚を、ぐつと曲げると、どんと膝を突いた、めりくと音がして、源八の背骨が折れたかと思つた「嗚」と源八は唸る「うぬ」と吼えて、鐵よりも固い拳を打振り、腦天横面の嫌ひ無く、滅多撲りに撲り着ける「嗚、嗚」と云ふばかりで、源八の頭は平ツたくなつたかと思られる、顔が半分土に埋つたかと思はれる

「まだ云はないか」「し、知らねえ」「源八、それで済むと思ふか、大事の娘を貴様にかどうかされたか判らなくして、云はなきや仕様が無いツて手を弘かれるか引かれないか、俺の身になつても考へて見ろ」「ど、どうされたつて、し、知らねえものは知らねえ」「むい、度胸だ、そんなら貴様と俺の根競べ、云はない中は、何時迄でも斯うして死な、いやうに生きないやうに苦ましてやる」又も拳を喰はせる「殺せ、殺して呉れ」そりく悲鳴になつて来た

久平は拳を収めて、持て餘したやうに首を傾けたが、屹と首肯して俊郎を振り返り「旦那、其邊を捜して、蛇を一匹捉まへて下さいませんか」

其三十五

「蛇を一匹捉まへて下さい」と、久平は聲を鋭くして繰返した

「蛇？」と聲を震はして源八は恐ろしい力になり、背に乗った久平の身體をぐらぐらと揺つて、勿返さうと、狂氣のやうに腕く「どつこい、さうは行かない」と、今度は馬乗に跨がり、兩手で首筋をぎゅーつと押へ着ける「蛇を早く捉まへて下さい」「蛇かえ、蛇は僕の好物だ、生かして持つて来るのか、但しは殺してか」俊郎は蚤くも源八が蛇を恐がることを悟り、態と斯う乗地になつて云つた

久平我意を得たりとばかり打首肯いて「出来るなら、生きた儘で頂きたいんです」と語氣を強める「宜しい、ちやア、よろしくする奴を引纏んで来やう」「か、勘忍して呉ろ、蛇を持つて来られちやア、堪らねえ」源八はもう勿返さうと剣氣力さへ無く、萎えたやうになつて震へるばかりである

「む、蛇が厭なら、お磯が何所に居るか云へ、強がりに似合はず蛇を恐がることを知つて、貴様を責めるなんざア、俺に似合はない卑怯な真似をするやうだけれども、あんまり貴様の構へが無法だから、せう事無しにする事なんだ、さア、お磯をどうした」「口惜しいなア」「畜生、まだそんな執拗い事を云つてやアがる、旦那、役に立つても立たなくつても、兎に角蛇を捉まへて来て置いて下さい」「もう、捉めへて来なくつてもいいだよ、始ツから云つたつて構はねえけれど、馬鹿ア見た、

から、云ふのも業腹だと思つたアよ」蛇の化身見たいな男が、こんなに蛇を恐がるとは、不思議な病である

「どうした、早く云へ」久平は業を凌やす「お磯の阿魔め、まるで兎の子見てえに、簀でも何でもびよん／＼跳びやアがつて、どうしても捕められねえだ、俺ア、海の中なら誰にも負けねえ積りだけど、山を驅けることア其割に行かねえ、く、苦しい、ちつと緩めて呉れ」「好し、緩めてやらう、ちやア、お磯に逃げられたつて云ふんだなア」「残念だけど逃げられたア」「嘘を吐いたつて逃がしつこはないぞ、それにちがひないか」「俺だつて源八だ、かうなれア嘘は吐かねえ」「好し、そんなら立て、貴様を引張つて我家へ行つて見て、お磯が歸つて居たら好し、居なかつた時の仕様は、俺に考へがあるから」久平先づ立上つて源八を引起すに、餘程苦しかつたと見えて、青くなつてひよろひよろして居るのである、汗みづくの顔を地面へ擦着けられたのであるから、鼻、額、腮、頬骨のあたりが泥に塗れて、かの血の塊が粘いたやうに見える部分を、一層凄く見せる

久平は屹と打見て「何だ、其頬べたの赤い物は」と詰問た、俊郎は拳を握つて息を弾ませる「何でもねえだよ、問かれることを避ける様子である」「何でも無いことは無い、何だか云へ」と久平の見服は恐しくなる「百合の花の粉だアよ」と案外の答へ「何故百合の花の粉を著けた」「そんな事を聞かねえでもい、ちやアねえか」と極りが悪さう

久平は、突然手を伸べて、指先で源八の頬べたを擦り、それを鼻に持つて来て嗅いで黙つて首肯いた、それを見て、俊郎も始めて吻と胸の痞へを下した、成程百合の花の茎には、赤くべとくする粉が多くあつて、一旦物に粘くと容易に落ちないのである、それが汗に溶けて捏られたから、不審を打つべき物になつて、見える筈である、けれども、其百合の花の粉が何故頬に粘いたか、それも俊郎は聞きたかつたが、久平を差置いて出しやばるのも、此場合能てないと思ひ直して口を噤んだ。「歸りは、貴様がお磯を追掛けた通りの路を案内しろ、些でも胡麻化すと承知しないぞ、貴様も若い者の頭に立つ男だから、逃げも隠れもしまい、手を掛けないから先に立て」「ちやア、斯う行かう」口惜しさうな顔をして先に立ち、其身が駈登つた路を降り始めた

其三十六

いくらも降りぬに、路は左右へ岐れる、左は眞直に谷に向ひ、右は山の腰を繞つて斜に上を指して居る、源八は會釋もせず右へ折れて、力無げにひよろ／＼と歩く、二人も無言で後に附いた一町餘り行くと、路は又山の上へ昇り、春梁を越して、今迄と反對の片ツべら、即ち村に向つた方の谷へ降りるのである、成程斯うもあらう、お磯は村を出て此谷へ百合の花を探りに入り、源八に追掛けられて上へ逃げ、山を越して反對の谷へ降りかけたが、斯くては益々人里に遠ざかると氣が附いたのであらうと思はれる

たので、山の腰を繞つて、久平と俊郎とが降り掛けた路へ出、そこらで、源八が後れたのを幸ひ、藪の中へでも姿を隠して、血眼になつて前ばかり見て驅ける源八を遣り過さし、取つて返して逆に逃延びたのであらうと思はれる

谷へ降りると木立が深い、苦蒸した巖もあり、ちよろ／＼した溪流もある、一體に濕つぽくつて薄暗い「此所が一番百合の多い所です」と久平が説明した

成程、所々に白い物が見える、それも、手の届く所、足の到る所のは、大抵お磯に取られたらしく高い所、危い所にばかり残つて居るのである、いゝ匂ひがする

進むに随つて、百合の匂ひが高くなつて来る、何所か一塊り澤山開いて居るらしく思はれる「非常に百合が匂つて来る」と、俊郎が獨語のやうに云ふと「匂ふ筈だア」と源八が冷笑ふ、何か意味がありさうである

路が曲つて、溪流を跨ぎ越さなければならぬ所へ行くと、夏の残雪かとはかり、一坪ばかりの地面が唯だ白く見える、如何にも目覺しい見物で、高い匂ひは其所から發するのである「やア」と、感に堪えた聲を漏らして、俊郎は我知らず踵よりも前へ出た

巖と木とが重なり合つて日の光を遮り、一際此所は薄暗いので、離れては好く判らなかつたが、傍へ寄つて視ると、それは地から生えて居る百合の花ではなくつて、散散に踏み散らされたのである、

莖に附いた儘に棄てられてあるのも少くない「此所だらう、貴様がお磯を捉まへやうとしたのは」久平は出し抜けに大聲を擧げた「む、源八は厭な顔をして横を向く、俊郎も首肯いて會得した

花を踏んで出ると、間もなく林が薄くなつて、谷もだんく開き、畑となり、田となり、何時しか人家に近い所となつた「源八、顔を洗へ」路に傍うて清い流水がある「もう勘忍して呉ろ、人に見られるのが厭だアから」源八は逃腰になる「おい、もう蛇が居ないと思つて、そんな事を吐すか、そんな卑怯を働く氣なら、こつちも遠慮は無い、引すつても己の家迄連れてかすにやア置かないぞ」と立向へば「逃げやアしねえ」と氣味悪い笑顔になる笑顔とは見えす齒をむき出したやうである「そんなら黙つて一緒に行け、顔を洗つて前をきちんと合はして、何でも無い風をして行つたら、人に見られつつて極りが悪い事はあるまい、さア洗へ」

強く恐しい男で、さうして、際立たぬ所に何とも云へない優しい思ひ遣りのある男であると、愈々俊郎は久平に敬服した

是非無く源八は流水に臨んで顔を洗ふ、洗つて了ふと、矢張源八を先に立て、久平と俊郎とは並んで行くのである

應て荒物店の前である、源八は立停まつて、何とも云へない顔で二人を見返つた

「入れ」と、後から源八を店へ押入れて「お磯が居るか」と呼ぶと「御父さん何？」と、平生と少し

もちがふ様子無く、暖簾掻分けて立出で掛けたお磯は、源八を見るや、蝶か何そのやうに、閃然と身を返して引込んだ

久平と俊郎とは、顔を見合はして暫し呆氣に取られた、餘りに何でも無いお磯の様子に、安心を通り起して拍子抜けがしたのである

「お磯出て来い」、久平は呼戻す「源八が居るから厭」「己が居るから大丈夫だ、出て来い」と押返され、少し顔を赤くし、下目を使つて、厭々さうに出て来た「お磯、源八にどうもされないか」「百合の花を取つてたら、そつとわたしの傍へ寄つて来て、出し抜けに聲を掛けたから、捉まへられない中に逃げてやつたんだよ」「それだけか」「あ」と、俊郎を偷み視て眞赤になる

「ちやア好し、源八出で行け、今度お磯へ手でも掛けやうものなら、こんな手緩い事ちやア濟まさないぞ」ぐつと久平が睨むと、源八も恨めしさうに睨み返して、のそりくと出て行つたが、獨り首肯く様子が後姿に見えたので、俊郎には此後が氣遣はれる

源八が見えなくなつたので「磯ちゃん、源八の頬べたに百合の花の粉が粘つてたが、あれアどうしたんだえ」と云つて、俊郎は腰を掛けた、お磯は又も頬を染めて「捉まへやうと手を出しましたから十本ばかり持つてた百合の花で、横ツ面を打つてやりましたの、花がばらばらに散つちまつて、ほんとに口惜しう御座いましたよ」と、俊郎の思はくを推測るやうに見上げる

十本の莖に著いた花は、二十餘りもあるであらう、一輪でも人の顔が隠れる程の大きく白い花を、二十餘り集めたのが、お磯の身邊を離れて虚空に波を打ち、崩れ落ちて源八の顔を覆うたことを思ふと、大切れの雪が八方に亂れ飛ぶ、薫りのある清い風はそれに随つて起る、お磯の身にもばらばらと花が掛かる、源八は刃で斬られたよりも激しく驚愕に打たれる、顔を背けてたちたちと下る、其間に蝶よりも捷くお磯が逃げ出す、それ等の段取が今日に見るやうである

其三十七

久平が源八を懲らしてから二三日経つと、玉井別邸の勝手口から「御免下せえ」と、問の延びた此邊の漁師言葉の高調子で、案内を乞ふ者がある

お種が出て用向を訊ねると「些と、此方に御出でなさる旦那へ御願申してえ事があつて参りやした」と云ふのである「貴方は何と被仰る仁?」「なに、旦那へ御目に掛ると判るだアから、村の若え者だアつて云つて御呉んなせえ」厭に莞爾々々した氣味の悪い男である、年齢は二十餘り幾何も長らないやうであるが、談判交渉に慣れた、若い者仲間の口利らしく見える、其外、格子戸の外に、退しい若い者が二個立つて居る

お種は此所ぞと氣色ばんで「お前さん達はそれで好からうが、土偶の坊ぢやアあるまいし、名も云

はないし用も云はない人なんか、誰が取次するもんですか、馬鹿にしてゐるぢやないか」と刎着ける若い者は、ちよつと案外に思つたらしかつたが、忽ち又雅さうな笑顔に戻つて「お神さん、奥さんそんな事を云はねえなつて、旦那に逢つて話をすれア判る事だアから、取次いで下せえよ、俺等の名前なんか、云つたつて云はねえなつて、同じ事さ、何も名前を云はれねえつて譯ぢやアねえだけど村の若え者の總代になつて来たアだから、別に名前なんか云はねえでも好かんべえ、村の若え者の總代が旦那に御目に掛りてえつて、さう云つて下せえ」と柔かに云ふ中に、お種を肩ともせぬ氣込が見えるのである「へん、お神さんの奥さんだのつて、人を上げたり下げたりしてよ、お前さん達に馬鹿にされるやうな人間と見損なつてるのかえ、名前を云はない人は取次がないよ」と劍突を食はして、突と立上がる「あつ、それアいけねえ、待つてお呉んなせえ、此方ア、何も自分の用で来たアぢやアねえだ、旦那の用だよ、旦那の爲に来たアだよ」と、若い者の聲も高くなる

四疊半に晝飯を了へた身體を横たへて、例の通り煙に埋もれて居る俊郎は、段々高くなる双方の聲を聞き附けて、眉を顰めて起上つたが、暫く考へて屹と打首背き、すーつと玄關へ立出でた「お種、僕を尋ねて来た人なら、客間の方へ通してお呉れよ」「だつて、自分の名前も申しませんですもの」「まアい、ぢやアないか、こんな所へ来て、そんな固ツ苦しい事を云つたつて仕様がなないよ、さア、君達上り給へ」無雜作に捌くと、すん／＼先に立つて奥へ行く

「おい、お前達も入りなよ」格子戸の外に立つて居た二個も入る、お種は面を膨らして奥へ案内する結構な座敷の飾りが、簾戸を透す庭の緑に映合ふ光景は、三人の若い者にちよつと場打てをさしたやうである、入口の敷居に傍うた墨を守つて、三人表こつたやうになつて居る「さア、遠慮しなす——つと此方へ出て呉れ給へ、お京、座蒲團だよ」聲の下からお京が入つて来て、夏座蒲團を三枚手早く並べ、淑やかに且つ敏速く身をこなして、す——つと音もせず退いた、三人はこれにも舌を捲いた様子である「さア、遠慮されちやア困るよ、僕は斯うして御免を蒙つて居るんだから」大きな座蒲團の上に無手と坐り込んで、氣を焦つやうに平手を延べる「ちやア旦那、俺ア田舎者で、禮儀も何も知んねえだから、御免下せえよ」と、稍さうな笑顔の若い者が先に座蒲團へ乗ると、二個の逞しいのも、それに倣つて窮屈さうに膝を折る

「一體何の用かね、俊郎は軽く訊ねた「へえ」と、笑顔の若い者が頭を掻いてもちもぢしたが、下に居並んだ二個を見返つて「云つて退けべえか」と赤くなる「云はねえちやア濟むめえ」と一個は肩腕を張る「ちやア云ふべえ」と、座蒲團から二寸ばかり膝を乗り出す「旦那、俺ア田舎者で、禮儀も何も知んねえだから、いけぞんせえな言葉があつても、憤らねえで下せえよ、私ア秋谷の吉助てえ者です、苗字は鈴木です、此男は鐵五郎、其方は勇吉でさ、みんな御初に御目に掛ります」今度は聞ひもせぬに自分から名乗つて、取つて附けたやうに頭を下げる

其三十八

まだ場打てが落着かないと見えて、立派に名乗つた迄はいゝが、續く言葉に困つて殆ど笑顔が少し赤くなる

「何か、村の若い者の總代で来て呉れたやうに聞こえたが、面白い儘しでもあるのかね」と、俊郎の方から話を引出してやる

「實は、お磯の事で上りました、一生懸命の體で皮を切つた「む、お磯と云ふは、久平の娘のお磯か」と云つて俊郎は首肯した

首肯したのは向の言葉に對して、ない、此奴儂は源八の手下で、源八に使はれて来たのだと悟つたから、首肯したのである

「其お磯の事です、旦那は此地へ始めてだから、お磯がこれ迄の事も、お磯と源八の事も、御存じねえでせうが、あの阿魔は、秋谷で評判の男ッ喰ひで、十四の歳から浮名を歌はれたもんでさ、今ちやア、若え者仲間で幅の利く源八の持物と極つて居るだアから、土地の者は誰も手出しをしねえだけどうして、手に了へねえ浮氣者の尻體で、一個ちやア食ひ足りねえだから、手前の方から男に手出しをしやアがつて、土地の者が相手にならねえと、東京から潮湯治に来る者を引掛けて、据膳を食はせ

へえとするでさア、葉山の別荘へ奉公に行つた折なんざア、其所の若旦那だか若様だかを、旨く誑し込みやアがつて、着物を拵へて貰つたり、金を搾つたり、秋谷中引ツくらげへるやうな評判でしたよ」破れるやうな大きな聲で、一生懸命に息をも継かず、眞赤になつて喋り立てたが、舌が乾いたと見え、お京が俯める茶をがぶりとやつた

「ふむ、思つたより面白い娘だね」暫く間を置いて、俊郎は平氣と云ふことを現はす標識でもあるやうな調子を聞かした

「え」と、吉助と名乗る若い者は拍子抜けの状態であつたが、膝に置いた両手に力溜を入れて、これではならぬと勇氣を回復した様子になつた

「それで、東京者を引掛けて居る間に限つて、見度な程源八を振り抜くでさア、源八は強え確りした男だアけど、正直者だけに憤りツぼくつて、物の云ひ廻しが下手だアから、お磯と焼餅喧嘩をしたつて事情を知らねえ者にやア、源八が悪いやうに聞えませア、旦那、あのお磯てえ阿魔は、酔でも蕩蕩でも食はれた代物ぢやアありませんせ、子供見てえに見せかけるの、彼奴の手管だアよ、何所迄度胸が据つていけすうしいだか、果しが知れねえや、源八が憤ると、平氣な面アして、にや／＼笑ひやがつて、手前なんかとア情婦でも何でもねえだ、手前がそんな事を云つて、人の戀路の邪魔するだアつて、誰の前でも構はねえで、公然に赤恥を掻かせるだアもの、源八の憤るのも無理アねえや、そ

れでも、ぞつこん惚込んだ弱味は仕方がねえもんで、どうしてもお磯を思切れねえだよ、源八程の男が何てさまだんべえツて、若い者仲間がみんな齒痒い／＼がつて居るだアけど、考へて見ると又可哀相でなんねえ所もある、旦那、さうぢやア御座えませんか」吉助はやう／＼度胸が据つて、俊郎の様子を窺ふ呼吸も調ひ、額の汗を拭く餘裕も出来た

「ふむ、愈々面白い娘だ、俊郎は寧ろ奥に入つて聞くのである

「旦那、あんまり面白くもねえ事になりさうな話でさ、憤らずに此後を聞いて下ツせえよ」吉助は少々強ね氣味になる「さうかね、どんな話だか聞かう」「こんな話でさ、旦那は立派な御方で、又繪に描いたやうな御嬢様も一緒に來て居なさるし、其外お茶を注いで呉れた別嬪さんも傍に居るだアから、あんな田舎者の潮ッ風に吹き晒された、お磯なんかへ、酔興に手出しはなさらめえが、今云つた通りで、お磯の阿魔が旦那を手に入れべえと思つて夢中になつて居るだアから、源八は又修羅を燃して、お磯の後ばかり追掛け廻して居るでさア、所がそれ、二三日前の例の一件でせう」吉助は、眸を据ゑて、疑と俊郎を見込む「山で有つた事か」俊郎は苦い顔をして首肯「それでさ、其山で有つた事でさ、それア、久平の憤つたのも無理がねえだよ、久平も婦も、お磯の所業をみんな知つて居て、能と知んねえ面アして居るだア、一つ穴の貉だアつて、悪く云ふ者もあるだアけど、さう云ふの、ア可哀相でさ、親馬鹿で、すつかりお磯に胡麻化されて、自分の娘をまだ子供だと思つて居るだアもの、源八

にあんな事をされちやア、腹を立てるのア當然でさ、だから、山でお磯を追掛け損つて久平に出會した時、お磯と俺の仲は斯うくッて、私なら洗えされえ云つて了ふだアけど、あんな、無口な偏屈者だアから、さうは行かねえや、それに、久平一個ならどうにか極りの着けやうもあつたらうが、仇敵と思ふ旦那が一緒だアから、源八も意地だ、糞自棄になつて、久平へ武者振り附いて見たが、それはいけねえ、もう下り坂になつたつて、鯨も尻尾を捲いて逃げる鯨鋒の久平だ、源八の強えの人間強みだけど、久平の強えつたら、魔の物だか化物だか判りやアしねえ」我知らず話に身が入つて、手真似迄加はり掛けたが、面白い話をして聞かせる爲に來たのでないと、自分の役目に氣が附いたらしく、悔りしたやうに吉助は言葉を切る

其三十九

出し抜けに言葉を切つたのが、自分ながら餘り輕卒だと悟つたのであらう、やゝ慌て氣味に後を繼いだ「で、旦那が御覽なすつた通り、散々久平に折檻されて、意地も張り通せず謝まつた上、引立てられて久平の店迄行つたアで、張合ふ旦那が一緒だけに、源八の男はどうしても立たねえだ、今迄若え者の束ねをして居た男だアから、顔を踏潰されたのがどんなに辛えか判りやしねえだ」と云つて仔細らしく腕を組み、顔を前へ突出して、背中を低く平つたくする「それア氣の毒であつたね」

「氣の毒なだけで済むならい、けど、あゝ云ふ男だアから、男が立たねえ、顔が潰れた、もう世間の人に合はず顔はねえッて、閉籠つて塞いでばかり居るだアよ、友達が行つても逢はねえで、もう生きて居ねえ、死ぬだアくッて、口癖に云つて居るでさア、他の者たちがつて、死ぬつて云やア死に兼ねえ男だアから、私等アはア、悉らく心配して居ますよ」斯う云つて、吉助は嚇かすやうに俊郎を見込むのである

「成程、そんな事を云ひさうな男だ」俊郎は平氣な構へを崩さない「云ふばかりぢやアねえですよ、死ぬつて斷つたからにやア、屹度死にますだアよ、それに、源八が死ぬ段になると、唯は死にませんや、恨みに思ふ者を其儘にしめて自分ばかり死ぬやうな、そんな淡泊した源八ぢやアありませんや源八が死ぬ日にやア、死人や怪我人の他に四五人は出來すにやア濟みませんや」「凄さうだね、僕なんか、其四五人の随一に目指されさうだ、いや、それも亦睡氣さましになつて面白さ」と高く晒ふ暫く呆氣に取られた吉助は、相手の思つたより手剛いに、作戦計畫を變へる必要を感じたらしく、「かう云つちやア、何だか旦那を嚇かして來たやうですけど、全く死に掛けて居るですから、源八が可哀相でさ、いゝ若え者を一人、今生かすも殺すも旦那の胸一つにある事だアから、こゝの所を、どうにか考へて貰えてえもんです」と折れて出た「さう云はれて見ると、僕は自分が思つてるより傑いんだね、僕の働きで人間一個の生命が取止められるなら、これ程満足な事は無いんだから、身に叶ふ

事なら何でもするよ、一體僕がどうすれアいゝんだ」俊郎も眞面目になつた
 之を聞くと、吉助は坐り直して頭を下げ「さう被仰つて下されア、私等もはア、顔が立つと云ふも
 んでさ、有難う御座えます」と又も最初の猪さうな笑顔になる

それに乘らすに「さう無暗に有難がられちやア困るよ、身に叶ふ事なら、即ち僕が仕ていゝと思ふ
 事なら、するつて云ふんだ、何事だか聞かない中に、禮を受ける趣意は無いちやアないか、さう云ふ腹ぢ
 やアあるまいが、君の出方は何だか人の言葉質を取らうとするやうに見えて拙いよ、僕に頼む事があ
 るなら、露骨に其事柄を述べ給へ」と逆振を食はせると「へえ」と吉助恐縮して「そんなら、打明け
 て申ませう」と、額を撫でる「云ふがいゝさ」俊郎は儼然と構へた「實ア、今話した事を旦那から
 お磯へ云つて貰つて、お磯の手で源八の生命を取止めさせてえでさ、お磯が浮氣を止して源八一個を
 大事に守つたら、源八の男も立つて、死なねえツたつて済むですよ、それから、久平どんにも、お磯
 と源八の仲を、よく判るやうに旦那から話して、先達は手暴え事をして済まなかつたつて、久平ど
 んに一言源八へ謝つて貰つたら、もう後にいざこざが残らねえで、源八の顔は前よりも却つて立派に
 なりますから、どんなに旦那を思ふか知れませんが、この所を考へて下さつて、旦那、どうぞ
 一つ源八を助けてやつて下せえまし」恐るゝ俊郎の顔色を伺ひながら、覺束無げに云ひ了つて、そ
 一つと腋の下の汗を拭く

其四十

結果如何にと、一心に睜つた目を注ぐ吉助を、俊郎は唯だ莞爾やかに見下して居る

中庭を控えた次の間には、簀戸を隔て、お種とお京との置物のやうに凝然と坐つて居るのが見える
 何時の間にか来て、此方の會話に耳を側て、居る様子である

中庭に臨んだ楹側に、更に今一重の簀戸を隔てた立姿は、喜代子の外の人とは見えない、問ふ迄も
 無く、是亦心を耳に集めて居るのちがひないのである

俊郎は徐に巻煙草の吸口を唇から離した「宜しい、承知した、お磯は僕の言葉の通りにするかどうかどう
 か判らないが、出来得るだけ説き勧めて見やう、けれども、久平に僕の口から云ふ事だけは、今から
 受合ひ兼ねよ、何故かとなると、これアお磯の身に掛る事なんだから、先づお磯の意見を聞いて成
 べくならお磯から云はせる事にするのが順當なんだ、縦合僕から云ふにしても、お磯の承知を得なけ
 れアならない、けれども、僕の考へでは、久平へそんな事を云つたら、源八へ謝るところか、お磯を
 まだ子供だとはかし思つてるんだから、それを聞いてどんなに憤るか判りやアしない、お磯は勿論厳
 しく折檻されるし、源八だつてもなほ酷い目に合はされるだらう、だから、僕から唯だお磯へ君達の
 云ふ事を傳へて、若し君達の云ふ通り、お磯が僕に心ある爲に、或は僕を手管に倣めやうとする爲に

今迄關係のあつた源八を疎むと云ふやうな事があるなら「此所迄云つて、急に聲を高く調子を鋭くし
「それア宜しくない心得だから、お磯を妹のやうには思つて居るけれども、どうかしやうと云ふ心など
は微塵も僕に無いことを、好く看込むやうに云つて聞かせ、源八を大事にしると諭してやらう、それ
でいゝんだらう」と自分で首肯く、獨でいゝに極めたのである

けれども、吉助はまだ不足顔である「えゝ」と氣の無い挨拶をする

「それで不可いのかえ」俊郎は少し氣を焦ち出す「不可え事アねえですけど、お磯を妹のやうに思ふ
ツて事も、止して貰えてえもんです、久平の家へ行く事も」「おいゝゝ、黙つて聞いてると、随分勝
手な事を云ふね」態と笑顔を装つたのは、較憤つた徴である「失禮ですけれど」と吉助はまごつく、
「失禮と云ふ事を知つてゐるなら、何故そんな、人の身の上を差圖するやうな事を云ふ、妹のやうに
思はうが思ふまいが、己の自由でお前等が口を挿む問題とはちがふ、第一、己をお磯と汚い關係を結
ばうとする者と値踏をしてかゝるのが、無禮千萬だぞ、源八にも云つたが、お磯はお前等にやア花の
やうに見えるかも知れないけれども、己の目からは、土の塊同然の田舎娘だ、お前等に頼まれたつ
て、誰が酔興に手出しなんかするもんか、失敬な事を云ふな、それから何だと、久平の家へも行つち
やアいけないと、お前等、それでも人に對する禮儀を知つてゐるか、人に向つて物を云ふことを知つて
るか、お前等だつて小學校ぐらゐは卒業してゐたらう、些と考へて見るがいゝゝ、古昔の暴君ならいざ

知らず、己が以前から心易い久平と云ふ友達の家を訪ねることを、今の世の中で誰が止めることが出來
る、他に何の意味も無い友人の交際を、誰が無法に止めることが出來る、己は此度始めて秋谷へ來た
が、久平とは此土地を知らない前からの知り合ひだぞ、氣を附けて物を云へ、だんゝ調子が鋭くな
つて、仕舞には雷のやうな聲で嗚鳴つた

吉助も、二個の逞しい男も、氣を吞まれて黙りになる

「早く返つて源八へさう云へ、己はお磯なんかと、頼まれたつて汚い關係に結びやアしないから、何も
心配することは無いつて、見つともない、男らしくない、そんなこせゝした料簡ぢやア、女の子に
愛想を盡かされるのは當然だから、お磯に嫌はれまいと思ふなら、邪推だの、嫉妬だの、そんな女の
腐つたの見たいなけらな真似は止して、男らしく、頼もしく、お磯に不足を起させないやうに、先づ
自分の頭の蠅を追ふがいゝ、一旦關係した女に心變りをされるのは、男が意氣地無いからだ、女に不
足の起される罪は男にあるんだ、己がさう云つたつて傳へて呉れ」云ふだけ云つて、自分の方から起
つ

「どうも済みませんでした」と、吉助を始め三人の者は、逃げるやうに出て行く

俊郎は、荒々しく客間を出て、居間の四疊半へ入るや、どんと引くりかへつて強く舌打した、さう
かと思ふと、大きな聲で笑ひ出す

俊郎の頭腦は無茶苦茶に擾亂された、お磯が自分に意があるらしいことは、認むべき材料もあるけれども、それが果して眞の心か、或は源八や吉助の云ふやうな手管かと迄は、まだ見境が著かない中に、蚤くも源八とお磯の關係があると云ふ事を信じなければならなくなつた、随つて、お磯に男を食ひ散らす癖があると云ふ事も實際らしく思はれる、して見ると、どうもお磯なる人間が判らなくなる今迄單純に考へたのが、自分の淺蕪な爲と思ふより外は無くなる、けれども、俊郎はまだお磯に對する好意を失ふ程に到らない、また自分でそれを失ふことを怕れるのである、怕れると共に口惜しい思ひが胸に滿ちて来る「女は、戀愛でなくつて一度男と關係するの餘儀無きに至ると、心の不満足に堪へ兼ねて墮落に陥るが、其後眞の戀愛を得ると共に、どんな障害でも打破つて、墮落から身を脱しやうと力めるものだ」と獨語して、強めて自から慰めた

其四十一

三人の若い者が返つて、まだ五六分しか経たない、道草を食はないたつて、理髮床の前迄も行くまと思はれる頃に、俊郎は猛然と立上つた、縮の單衣に絹絞の兵子帯の打扮を其儘、麥稈帽子を取るより早く「ちよつと出て来るよ」と云ひ棄て、例の麻裏草履を突掛け、どん／＼驅出して門を離れ

た

日は熱いけれども風は涼しい、一文字に海岸の路を驅通つて御用邸の前も打過ぎ、人家のある所となると、今や理髮床へ入り掛けて居る三人の姿が認められる、同時に、俊郎は足を緩めて息を繼ぎ、手帕を取出して汗を拭き、敷島を一本啣へて燐寸を摺り、沈著いた足取になつた

理髮床つ入口に立寄ると、今迄大きな聲で、俊郎を訪ねた一部始終を悪口まじりに物語つて居た吉助は「あッ」と悔りして口を噤んだ「おい君、僕はこれから行つて、君に頼まれた事をお磯に云ふんだが、豈夫久平夫婦の前で話されもしまし、だから、お磯を連れ出して濱邊でもぶらつきながら話すんだよ、先刻も云つた通り、お磯と汚ない關係を結ぶなんて事は、此方ア馬鹿々々しくつて、頼まれたつて厭なんだから、お磯と僕と歩く所を見つて、見當ちがひの焼餅を焼くなつて、源八君へ好く傳へて呉れ給へ」暖簾の中へ首を突込み、幾分か人を馬鹿にした調子で、さら／＼と遣つて退けると吉助は唯だ「どうも濟みません」と恐れ入るばかりである

吉助に附いて來た二個の頑丈な若者を始め、其外二三人、皆荒膽をひしがれ、呆氣に取られた面をして、きよろ／＼俊郎の顔を瞻るのである

矢鱈に暖簾ばかり出るやうだが、今一つ店と奥とを仕切る暖簾があつて、ふはりふはり風の通路を見せて居る、其下から、瞥と俊郎を覗いて引込んだ男は、確に源八と睨まれた

俊郎は、云ふべき事を云つて了つて、突と理髮屋の入口を離れるや、後振返りもせず、悠々と歩みを進めた、二三人理髮床から首を出して、後影を見送りながら、何か小聲で罵り合ふ様子である。不圖、歩きながら俊郎が考へると、自分は今秋谷の若い者全體から仇敵と狙はれて居るのであると氣が附いた、高が知れた事であるから、別にそれを恐いとも思はず、又此秋谷の土地を去りさへしたら、掛り合ひの残らない事であるから、詰る所、此地に居る間の退屈凌ぎ、此地を引上げて後の話の種類と、却つて面白く思ふ程であるが、今一段深く考へて見ると、自分は兎に角、お磯及びお磯の一家の爲に不安である、自分に疚しい所が無いからと云つて、平氣に今迄通りの態度を守り、或は無責任に突然此地を去つたら、危険がお磯一家に及ぶかも知れない、それを知りつゝも、それに處する方法を請じないのは卑怯である、又、是迄に進んで此後を煙のやうにしては、話の種類としても纏まりが附かないぢやアないか、お磯の心も此上に確める必要があるし、且つは、お磯が是迄の経歴をも——若し源八や吉助などの云ふやうな毒婦であるなら男を喰ひ散らす、莫連娘であるなら、其何故に毒婦となり莫連娘となつたか、ならなければならなかつたかも——十分本人に就いて研究しなければならぬ、秋谷を去る前に此の如く自分が處理すべき重大の事件がある、これア迂濶に考へては居られぬと、俊郎は、今迄のすべて半分馬鹿にした調戲面の態度を改めて、眞面目に構へて掛らなければならぬ必要を感じ、凛と氣を引締めた。

聽て荒物店である、丁度お磯が一束の花を持って下駄を穿き掛けて居る出合頭であつた、別荘へ持つて行くのであらうが、今日は白百合でなくて演菊の蕭洒したのである。

「お、磯ちゃん、僕と一緒に濱邊へ出て呉れないか、貝殻を拾ひたいんだから」「ほ、貝殻を拾ふなんて」「貝殻を拾ふと可笑しいのか」と俊郎は却つて怪慥顔である「だつて、子供見たいぢやア御座いませんか」「さうぢやアないんだよ、貝殻を拾つて遊ぶんぢやアない、學問の上から調る事があつて、變つた貝殻を探すんだよ」「ぢやア参りませう、けれども、此花はどう致しませう」「僕が貰ふさ、貝殻と一緒に別荘へ持つて歸るさ、お神さん、磯ちゃんに濱邊へ行つて貰つてもいいの」「よう御座いますとも」と、折柄店に坐つて居た嬢が、快く承知した。久平は、例の通り晝寝の鼾聲を聞かせるだけである。

其四十二

谷へ降りて、小川の吐出し口に向つた、小川を隔て、立石を望む位置の、細かい砂がしつとりと滲色を見せた部分で、波の子と云ふ小貝が、名詮自稱波の退いた後から現はれては又慌て、姿を隠すほとりに、俊郎とお磯とが立停つた。

「どんな貝で御座いますの」お磯は優しく品を装つて訊ねる。

例の大きい紺絞を裾長に来て、紅入幽禪の唐縮緬を外側に見せた帯、それも尋常な御太鼓に結んで頭は珍しく束髪にして居るが、輪廓の張り加減は確に喜代子を真似たものと見える、顔は例より少し白く、唇も例より少し紅い、目立たないやうに薄化粧したのちがひない、其粧り榮えがして、美しく品が好くなつたこと、驚くばかりである、別荘へ行つても、綺羅を飾つて化粧に浮身を賽す東京の女共に、あんまり見劣りするやうな風をしたくないとの、單純な女の競争心から出たのであるか、或は特に意があつて俊郎に自分を好く見せやうとの野心から出たのであるか、何方か判らないけれども兎に角、目覺しく美しくなつたことだけは事實である

「貝なんかどうでもいゝのさ」と云つて、俊郎は笑ひ顔になる「あら」と、お磯は態とらしい案外面になつたが、見る／＼嬉しさうな極りが悪さうな色に頬を染めて俯向いた「些とお前に話したい事が出来たが、家内ぢやア具合が悪いから、此所迄出て貰つたんだよ」「……」「……」お磯は益々赤くなつて愈々低く俯向く、こんな所を見ると、どうしても男ッ食ひの小毒婦と信ずることが出来ない、全くのうぶである

俊郎は又心の底で叫んだ、縦令お磯が墮落して、其肉體は汚れて了つても、それは、周囲の社會が此娘に迫つて餘儀無く墮落せしめたので、此娘はまだ眞の戀愛の味を嘗め知らない、墮落したゞけそれだけ戀愛に餓を感じて、之を求めるに矢も鱈もたまらないのであると

お磯が毒婦だ莫連娘だと云ふことを信するの材料を得て、縦令全く之に對する好意を失はない迄も好意の上の或心が急に冷却するを覺え、同時に、冷却を覺えた爲に始めて其或心あるを自分で確めたのであるが、今こんな所を見ると、一旦冷却した或心が漫に復び燃え立つのである

けれども、俊郎は今、頭腦を醒まして問題を判断し、且つ之を決定しなければならぬ地位に居るのである、そこで、先づ氣を鎮めて沈着くことを考へ、暫し無言に仰向いた後、屹と容を改めて嚴しくなつた「磯ぢやん、僕は妙な事を頼まれたのだよ」「あら、貴方の御話ぢやア御座いませんの、お磯は落膽した案外面」「む、僕の話ぢやアない、僕の話なら態態こんな所迄出て貰はないつたつていゝんだがね、これア餘ッ程妙な話なんだ」お磯は懸念さうに俊郎の顔を瞻つて、氣の無い首肯を一つする

「正直に打明けて貰ひたいんだが、お前は源八と云ふ男と唯だの仲ぢやアあるまい」「……」「……」、俛首て顔を見せまじとする「これを正直に打明けて呉れないと、お前の身に飛んだ災難が来るばかりでなく、お前の御父さんも、此僕も、連累を食つて危い目に逢はなければならぬんだ、源八がお前に心變りをされた上に、御父さんに酷く折檻されて、もう男が立たないから死んで了ふと覺悟を極めてるとは、僕確な所から聞いたんだ、縦令源八との關係は、お前の厭がるのを、無理にどうかしたのが始りであつても、兎に角唯だの仲でない」と云ふ事だけは眞誠だらう、え、さうだらう」

色が變つて段々青くなり、鬢の後れ毛にも震へが見えて来たお磯は、俯向いた儘目を押へて、微かに首肯いた「む、それにちがひないか、好く正直に打明けて呉れた」と、優しく云つた積りの俊郎の言葉の末は、我にもあらず怪しく震へた、斯くあらうとは思つて居ただけけれども、實際本人にそれと答へられては、自然に口惜さ情なきが湧返るを免れないのである

「さうすると、一旦關係して源八を強面くすると云ふ事はどうだらう、俺迄も源八を大事にして、其中には源八とお前とが天下晴れて一緒になられるやうに、御父さんや御母さんの許可を得た方がい、ちやアないか、實は、お前と僕との仲を源八に疑はれて、直接に談判を受けた事もあるし、又、先刻吉助とか云ふ若い者と他に二個が別荘へ遣つて来て、源八はこれ〜で世間へ顔向けがならない爲に死ぬ覺悟を極めてるんだから、貴方からお磯へ云つて、源八の生命を取止めるやうにして呉れろつて乙に擲んだ事を云ふんだ、源八の廻し者と判つたんで、いゝ加減にあしらつて返さうとしたんだが、圖に乗つて失敬な事を吐すから、仕舞にやア、嗚鳴り附けたり冷笑つたりして返してやつたのさ、かう云ふ次第で僕も行掛りではあるし、痛くもない腹を探られるのも厭だから、一つお前の料簡を聞いた上で、御父さんにも話し込み、改めて公然に、源八とお前との媒合をしやうと思ふが、どうだね」云ふ中に、恨めしさうな目を舉げて、凝と俊郎を睨めて居たお磯は、一ばいの涙を湛えて又俯向いた

其四十三

お磯は袂を目に當て、涙を拭いたが、次から次と突掛けて来るので、唇を震はして何か云はうとするけれども、言語をなすことが出来ない、とう〜、堪り兼ねたと見えて、わツと泣き出した

「人が来ると見つともない、泣くのは止して呉れ、泣かなくつても話は判る」と云へば「わたし、口惜しう御座います」と、堤が切れたやう全身に波を打たして、却つて激しく泣き立てる

「一體どうした理由なんだ」「先達見たいに、わたしが山へ行つたら後から追掛けて来て、人を捻倒しましたの、いくら聲を出したつて、誰も来て呉れないんですもの、そうして、此事を人に云ふな、云つたら、わたしを殺して自分も死ぬんだつて、一生懸命になつて嚇かすんですもの、其折はわたしも十五で子供でしたから、恐くつて黙つてたんですけれども、近頃になると、あへこべに、云ふ事を聞かなければ前からの事を云ふつて、わたしを追ひ廻すんですの、わたし厭で〜たまらないんですから、どうかして下さいませんか」「泣きながら、術無げに俊郎へ寄り縋るのである

俊郎は、果してさうであつたと胸の中で叫んだ「む、さうだらう、僕もあの源八と云ふ奴を見る、大方そんな事をする畜生だらうと思つた、けれども、源八の外に、お前は種々の男を拵へたさうぢやアないか」「そんなに種々の男なんか拵へやアしませんわ」と、今度は左迄耻かしさうでもない

俊郎の語氣に同情が含まれて居たので、先づ「安心したのであらう」「そんなに拵へないたつて、二人や三人は拵へたらう」「それア、源八にあんな事をされて、どうせ自棄になつてる身體なんですもの生きてたつて些も面白い事に無いし、そんならつて、死ぬのも詰らないし、向から引掛つて来る馬鹿があつたら、いゝ加減に玩弄物にして、責めて見當らひの仇敵でも取つてやらなければ、間尺に合はないちやア御座いませんか」「莫連娘の本相を、こゝに始めて俊郎の前に現はして、舌の切れ味牙々しく痰阿を切り掛けたが、俄に氣が附いて眞赤になつた「はゝ、こんな事を申しまして、嘸愛想を御盡かしになつたんで御座いませう」と口籠る

「むゝ、俊郎は唸るやうな聲を出した「ちやア、假りに、お前の身體は古物になつたとしても、心だけはまだ新しいと云ふんだね、心はまだ誰にも許さないんだね」「えゝ、さうで御座いますの、けれども、心だけ新しいつたつて、誰もそれを見て呉れる人が無いから、眞誠に詰りませんわ、こんなことを思つて来ると、口惜しくつてゝ堪らなくなりますから、思はないやうにゝゝつて、御轉婆をしたり、淫奔をしたり、自分で自分を玩弄物にしてるんですけど、そんな具合に被仰られると、又苦しつて仕様が無くなりますの」「悶えに堪へないやうに身を揺り、兩手に乳房を押へて、下唇を破れるばかりに噛み、瞬きもせず睜つた目からは、大粒の涙をぼろりゝと落す

「御父さんも御母さんも、お前にそんな苦しみがあることを知らず、まだ罪の無い子供だと思つてる

んだね」と胸を擗るやうに云つて、お磯に劣らない口惜しさうな顔で、骨にも徹るばかりの視線を女の眼中に射込む

お磯は、折返した袂の端を確と齒に噛み止めて、ぶるゝと身を震はせつゝ、直と寄添うたが、自分の穢れを耻るやうに、たちゝと跟いて後へ下つた

「それゝ、後から波が加ゝる」と、肩に手を掛けて前へ引寄せれば、倒れかゝるやうに男の胸に額を押當てゝ、しくゝ忍び音に泣くのである

俊郎は一通り周囲を見廻したが、人の近附く様子も見えないので、其儘お磯の耳へ口を寄せた「誰にも許さない新しい心を、僕に呉れないか」

驚くか、耻しがるか、嬉しがるか、どちらにしても、際立つて容を變るだらうと思ひの外「わたしはもう貴方へ上げて居りますの、貴方にやア、あんな御嬢様も被在るんだから、どうせわたしの心なんか受けて下さらないでせうけど、わたし一個で、もう貴方へ上げたと極めて居りますわ」と、沈着いてしんみりと云つて、凝固まつたやうに身を小さくする

其四十四

俊郎は、お磯の震へが傳染つたかとはばかり、激しい身の揺ぎに、立つて居る砂地も揺れる程になつ

た、これは俊郎が生れてからまだ味ひ知らぬ氣持である、あまりの堪へ難さに、胸に溢るゝ云ふべき事の數々を、暫し咽喉元で食ひ止めて、「人が來ると不可いから、歩きながら話さう」と、震へる聲を押鎮めて云つた

小川に附いて少し遡つて、「へ」の字形した假橋をば、立石の方へと渡り越した「あんな、外面ばかり飾つてる御嬢様風の女は、僕と肌が合はない、僕は、これから裸百貫の男になつて、誰の助けも受けずに自分の腕一つで、土臺下から敲き上げやうと思つてるんだから、どうせあの家には長く厄介になつて居ないんだ、だから」此所迄云つて言葉を切り、今迄歩いた小川の反對の岸をば、濱邊に向つてすたゝゝ進み行く

お磯は人と言葉とを同時に追掛けて、何所迄もと随ふ、濱菊と晝顔とが開いて居る所となつて、俊郎は直と立停つた「源八の耳へも入るやうに、吉助とか云ふ男へ斷つて置いたから、今日は、磯ちやんと一緒に歩くことだけなら、奴儂の目に觸れたつて構やアしない、心配しなくつてもいゝよ」「そんな事、心配なんかするもんですか、それよりは、今御話なすつた續きをどうぞ」と、お磯はもう夢中に一方へ傾いて居るのである「むゝ、だから、磯ちやんさへ構はないなら、僕は磯ちやんの心ばかりでなく、心の入物たる身體も貰ひたいと思ふんだ、心を貰つたつて、入物が無けれア仕様が無いぢやアないか」云ひやうに依つては滑稽に聞こゆべき事をば、至極眞面目腐つて談じ込んだ「だつてわ

たしの身體はもう汚れて了つたんですもの、お磯は氣の毒さうに残念さうに答へた「僕は、一旦の身體の汚れは心で洗へると思ふ、磯ちやんがまだ汚れない新しい心を僕に呉れやうと決心したら、それと一緒に身體も清潔に洗はれたものと思ふ、秋谷ばかりに日が照らない、お前さへ確りして、此後身體も心も共に清潔にして、一度洗つた身體を決して二度と汚さずに、待つて居て呉れたら、僕はどうでもして自分の力で立つて行ける工夫をして、お前を呼びに來やうよ、御父さん御母さんに願つて、公然に貰つて行けさ、獨りだから離さないつたら、店を畳んで貰つて、御父さん御母さんも一緒に連れてくさ、世間がぐすゝ云つたら、世間を相手にして戦ふのも亦面白ぢやアないか、僕は、お前を此儘に秋谷に置くと、身體も心も仕舞にやア滅茶々々になつちまうだらうと思ふんだ、それが惜しくつて堪らない、残念で堪らない、口惜しくつて堪らない、糞ッ、構ふもんか、二人が思ふ儘に仕様ぢやアないか」と、顔も目の中も、酒に酔つたやうに赤くして、迫るやうに身を磨り寄せ、足許の晝顔も濱菊も滅茶々々に蹂躪つた

お磯はこれ聞きながら、一旦赤くなつた顔を眞背に變らして、倒れさうに跟く身體を、俊郎の手に縋つて撐へ、其儘鞆と握つて「勘忍して下さいまし」と有るか無きかの聲を聞かしたが、自分の方から激しく振離して「其御心は死んでも忘れやアしません、其御心を戴いたら、わたし死んでも遺憾い事は御座いませんです、わたしの心は、一生貴方の陰身に附添うて、御離しなさらうとなすつたつ

て離れやアしません」と、軋り出すやうに齒を締めて云ふ「だから、心ばかりでなく、身體も呉れたつていゝぢやアないか」俊郎はやゝ怪慥顔になつた「いゝえ、身體は上げられません」と振絞つたかと思へば、さり／＼と齒を噛み鳴らすのである

俊郎は案外の眼を睜つて、火のやうな息を吐いた、胸の動悸は立石の下の巖打つ波のやうである、心は呉れても身體は呉れられないと云ふには、何か深い仔細がなければならぬが、其仔細は果して何であらう、或は、源八などでなく、他に深く云ひかはして未來を約束した男がある爲に、妖婦式の手管を施して、自分を胡麻化すのではあるまいかと疑ひ、同時に、源八のあゝするの無理が無いと身に引較べる程の嫉妬心も起したが、考へ直して見ると、それなら、顔の色迄眞蒼にして、あんなに残念さうに云ふ筈がない、如何に手管が旨いつたつて、手管ばかりではあんなになられるもんぢやアないと、仕舞には何が何やら判らなくなつて、海邊に好くある、固く滑な蘭のやうな草の上に腰を下し、足を投出して砂を蹴り始めた

暫くは二人共無言である

俊郎は唯だ何となしに蹂躪つた濱菊の莖を扶け起した、白い蝶が一羽、翩々と飛んで来てそれに止らうとする途端、手を離すと濱菊は倒れる、蝶は驚いて横さまに飛退いたが、更に斜に騰つて、お磯が手に持つて居る濱菊の束を慕ひ寄る

「何故身體は呉れられないんだ」と、暫く經つてから夢を見て居るやうにうつとりと訊ねた「其理由を申しますと、貴方が愛想を御盡かしなさいますから」と、お磯の顔色は益々悪くなるばかりである「だつて、云はなけれア判らないぢやアないか」俊郎は憤となる「ぢやア、申しても宜しう御座いますか」と、お磯は蒼くなつた顔に電のやうな光を走らせる

其四十五

「いゝどころか、云つて貰はなけれア、片が附かなくなつて不可ないぢやアないか」と、俊郎は足を投げ出した儘で、お磯を睨むやうに見上げた「片が附かない」と、俊郎の云つた通りを口の中に繰返しそれを味ふやうに首を傾けたが、頼みの綱も切れ果てたとばかり絶望の面持になつて「片が附きますそれを云つて了ふと、何も蚊もみんな片が附きます、けれども、一度は云はなけれアならない事で、云はないたつて判らずに濟まない事なんですから、寧ろ此所で片を附けて了ひませう」と太息を吐いた

睨むやうに見上げて居た俊郎の目は、次第に氣の毒さうな色に沾つて來た、けれども、口を開かずにお磯が云ひ出すのを待つて居る

幾度か云はうと構へては唇を噛んで止した後、思ひ切つて「わにし、先々月から見る物を見ません

の「と忍び音に叫びつゝ、突倒されたやうに身を投出して、俊郎が砂を蹴て居る足のほとりに頭を埋めた

「見る物つて何だえ」女の事に精しくない俊郎は、半分判つたやうでも確にそれと見當が附かない、「女の役で御座います」と苦しうに云つて、大地に吞まれて了ひたさうに身を揉む「あ、さうか」「膝を打つて、彈かれたやうに飛起き、棒のやうに突立つて、固く腕を組合はせた俊郎は「む、」と、例の特色ある陰り聲を聞かせる外に、言語をなすことが出来ない

「それア困つたねえ」暫く経つてから、頭を掉つて仰向けた顔は、お磯よりも一際蒼いかと見られたお磯は何時迄さうしても居られぬと思つたか、力無く身を起し掛けたが、立ち上がる迄には至り兼ね、跪いて俊郎を眩しうに見上げた、身も世もあられず、どうしたらいいか法が附かないから、救つて呉れ助けて呉れと、口に云はないが目で祈るのである

一旦仰向いた顔を又俯向けて、跪いて延び上つたお磯の腹部に目を注ぎ、次第に上の方に移つて顔に及んだ目を目と見合ふに及んで、慌て、横へ反した

「今日は八月の七日か、先々月からと云つても、日數にしちやアまだ幾等も経たないんだね、外から見ちやアまだ判らないんだか、愈々それにはがひないのかね」さうでなくつて呉れ、ばい」と念じる俊郎の心は、自分が其密事の相手でも、是程痛切ではあるまい

萎れて首肯くお磯には、それにちがひないと認めるだけの事があるのであらう

「源八のかえ」俊郎は我乍ら聲の殺り果てたに驚く程である「多分さうだらうと思ひます」「お磯の答へは益々案外である

餘りの事、氣の毒の思ひも失せ果てさうになつたが、貴様は汚れた奴だから今直ぐに死ねと云へば、聲の下から海へ驅けても行ささうなお磯の様子を見ては、又むらむらと、どうかして、此惑むべき青春の女子を救つてやりたいとの心が起つて来る、すると、一旦源八に汚されたのが不運の始まりで、始終彼の毒手の外に身を置くべき安全の地を得ない爲に、棄鉢になつて、お磯自身が所謂見當らがひの復讐を始め、向から引掛つて来る馬鹿な男を、手當り任せに玩弄物にするやうになつたと云ふ事に、無理が無いと同情する氣にもなる、それに同情すると、誰の胤と確に定めることの出来ない子を孕んだ事をも、矢張り已を得ない結果と認めてかゝらなければならなくなる「残酷な運命だア」と投げ出すやうに云つて、両手に顔を掩うたのが、俊郎が爲し得る唯一つの事であつた

「貴方、わたしの爲に泣いて下さいますか、もうそれで、わたしは死んでも宜しう御座います、わたしもどうかして下るものなら下して下したいと思つて、色々不養生もしましたけど、身體を弱らせるばかりで利目が見えませんが、どうせ汚れた身體だから、どうでもなるやうになれと、今ちやア棄鉢に構へて度胸を据えて居ります、ですから、わたしを可哀相だと思召して、心だけを貴方には

かしの上げを許して下さいますなら、わたしが何をしやうか、どんな真似をしやうか、源八に脛を食はせやうか、誰とどうしやうか、御氣に止めずに笑つて見て居て下さつて、誰が貴方へ何と御頼みしても、知らないつて勿附けて下さりませんか、此後だつて、御暇があつたら時々秋谷へ来て下さいますやうに御願ひ申します、わたしも亦、身體が軽くなりましたら、秋谷を飛び出して何かしやうと思ひますから、變つた所で變つた御目に掛りやうをすることがあるかも知れません」と満面に決斷と熱心とを輝かして、何時しか耻かしさうな氣色も失せ、驚くべき雄辯になつて、滔々と述べ立てた

「まア立ち給へ」と、跪いて居るお磯を親しく扶け起し「秋谷を飛び出して何をされるんだ」と氣遣はしげに訊ねた

其四十六

秋谷を飛び出して何をされる氣だと、氣遣はしげに訊ねられて、お磯は片頬に笑を寄せた「どうせ自棄の棄鉢ですから、汚れた身體は汚れた身體のやうに使はうと思ひますの、同じ使ふにも、秋谷ぢやア舞臺が小くつて使ひ榮えがしないぢやア御座いせんか、ですから、檜舞臺に出て、身體を得に使はうと思ひますの、男ッ食ひの、莫逆者のと、こんなけちな土地で云はれたつて始まりませんですからせう」と云ふので、略ぼどんな方面に向はうとする氣か、判る

「それア、磯ぢやんの標緻と身體で、それに十分磨きを掛けたら、龍に翼を添へたやうなもので、空の上でも水の底でも、通れない所がなくなるに極つてゐるさ、それに、お前の咽喉は天性音楽のやうな響を有つてるし、恰好だし意地があるから、一心不亂に藝事に觸んだら、屹度天下第一品になれるよ、だから、そんな自棄の棄鉢の事をしすに、今迄の取返しを、何でもいゝから立派な藝人になつて」と云ふ氣になつちやア呉れまいか、其事に極ると、僕はお前と義を結んで兄妹になつてもいゝんだよ兄妹になつてお前の力になつちやアどうだらう」一旦絶望に陥つた俊郎は、やうく希望の光の輝く明い路を見出して、自分が生き返つたやうに元氣を好くするのである

けれども、お磯はそれに氣が進まない様子である「え、兄妹になつて下さいますなら、わたしは此上に望みが御座いせん、わたしから御願ひ申したかつたんですけど、勿體無いと思つて控へて居りました」と喜ぶだけで、肝腎の自分の前途の事に就いては何とも答へない「それぢやア、僕といふ通りにして、自棄の棄鉢を止すか」「それは止さうたつて止されやアしません、たつて、口惜しく

どうせ云はれるんなら、東京の真中で云はれるやうにしやうと思ひますの、こんな田舎ツ平でも、潮ツ風の吹かない東京へ行つて、水道の水で磨いたら、御別荘の御嬢様見たいにやアなれないつたつて些は濫ン皮が剝けませうし、一生懸命何か藝事を稽古したら、人の真似ぐらゐは出来るやうになりませう」と云ふので、略ぼどんな方面に向はうとする氣か、判る

「それア、磯ぢやんの標緻と身體で、それに十分磨きを掛けたら、龍に翼を添へたやうなもので、空の上でも水の底でも、通れない所がなくなるに極つてゐるさ、それに、お前の咽喉は天性音楽のやうな響を有つてるし、恰好だし意地があるから、一心不亂に藝事に觸んだら、屹度天下第一品になれるよ、だから、そんな自棄の棄鉢の事をしすに、今迄の取返しを、何でもいゝから立派な藝人になつて」と云ふ氣になつちやア呉れまいか、其事に極ると、僕はお前と義を結んで兄妹になつてもいゝんだよ兄妹になつてお前の力になつちやアどうだらう」一旦絶望に陥つた俊郎は、やうく希望の光の輝く明い路を見出して、自分が生き返つたやうに元氣を好くするのである

けれども、お磯はそれに氣が進まない様子である「え、兄妹になつて下さいますなら、わたしは此上に望みが御座いせん、わたしから御願ひ申したかつたんですけど、勿體無いと思つて控へて居りました」と喜ぶだけで、肝腎の自分の前途の事に就いては何とも答へない「それぢやア、僕といふ通りにして、自棄の棄鉢を止すか」「それは止さうたつて止されやアしません、たつて、口惜しく

つて、口惜しさが骨迄浸込んで了つたんですもの、こんな身體に迄なり果て、了つてから、今更何と思つたつて、眞面目な人間が眞面目に相手にして呉れるんぢやなし、疵物は疵物だけに、満足でない世の中の渡りやうをしやうと思ひますの、始めは、源八一個を仇敵と狙つて、屹度返報をしやうと思ひましたけど、馬鹿々々しい、あんな奴一個を酷い目に合はせることを一生の仕事にしたつて埋らないと思ひ直しましてから、男が仇敵だ何でも男と云ふ者を酷い目に合はしてやることを稼業にしやうと、もう、固く心で極めて了りましたの「凄いい目になつて自分で首肯くお磯の見脈、誰が何と云つても動くまじき覺悟が見えるのである

「男が仇敵だつて云やア、僕も仇敵の片割なんだね」と俊郎は變な顔になる「貴方だけは別ですわ、貴方はわたしの心を上げた仁ぢやあ御座いせんか、貴方の前へ出た時にやア、幾歳になつてもわたしは清い生娘ですの、わたし眞人間になるは、貴方の前へ出た時はかりですの、此後貴方はどうおなりなすつたつて、あの御嬢様と一緒におなりなすつたつて、又わたしを御忘れになつたつて、わたしの貴方に上げた心は變りませんの、わたしの心の中には何時迄も今の貴方が被在いますの、それでわたしの氣が済みやアいゝんで、貴方の御邪魔にもならず、貴方にどうかして戴かうとも申しませんですから、御差支へがないでせう」かう云つた時のお磯の目は、凄みも口惜しさも消え失せて、うつとりと酔うたやうな色になつた

俊郎は、自分の力で、現にお磯を救へば救はれる機會に臨みながら、救ふべき方法を得ないのが、如何にも残念で堪らない、何かお磯を納得さすべき、底に答へるやうな説き方があるまいか、そして自棄の棄鉢から救うて、墮落の生涯を新しくさせ、藝道なら藝道に一心不乱ならしめることが出来まいか、自分が是程迄お磯を思ひ、お磯が是程迄自分を思ふのに、何故自分はお磯を自分の意見に随つて幸福の前途に向はせることが叶はず、何故お磯は自分の意見に随つて幸福の前途に向ふことが出来まいかと、胸を搔撈りたい程になつた

こんなに亂れた頭腦では、いゝ考へも出ないから、今日は先づこれだけにして、重ねて肝膽を碎きどうしてもお磯を救はない中は後へ退かぬと、双の拳を固く握つて確と自分に誓つた「僕も考へるから、お前も好く考へて置いて、此次に兩個が相談する迄、決して輕卒な事をするんぢやアないよ、今日はいはこれだけにして歸らう」

濱菊の花束が砂の上に残された

其四十七

お磯と、谷へ降りる坂路の上で別れて、態と荒物店へは立寄りせず、眞直に別荘を指して歸つた。理髮床の關所へさしかゝつた、吉助や源八がまだ居るか居ないかを確かすに、此前を素通りするは

卑怯であると思つて、前例に依り、暖簾の中へ首を突込んだ。

居る、吉助も他の二個の若い者も、奥へ入つて、何か食ひながら將装を指して居る様子である、大方、自分等が散財して、座敷を借りる禮の心に家の者にも食はせ、こゝに陣取つて、俊郎の歸りを待つて居るのであらう、外から覗けない所に今一個男が居る氣配は、どうも源八らしく思はれる。

「おい」と俊郎が聲を掛けると、吉助が直ぐ飛んで出る。「お磯に逢つて、頼まれたことを云つたよ、」

「それアどうも、有難う御座えました、お磯が承知致しましたか」いや、酷く劍突を食はせられたよ、どうであらうが、何をしやうが、自分の勝手だから、餘計な世話をするなとよ、僕も大きに器量を下げた次第さ、勿々どうして、僕の手丁へる女ぢやアない、仕方が無いから、僕は手を引くよ、後は君等が勝手にして呉れ給へ」「へえ、それぢやア、もうお磯とは口も御利きならねえですか」と、吉助は人を測量するやうに見上げ見下す。

俊郎は屹と眉を昂げて、全身を暖簾の中へ進め、身を益かして突立つた「おい君、又そんな妙に搦んだ事を云ふのか、口を利くとか利かないとか、そんな事は僕の自由で、誰だつて妨げることが出来ないんだ、君等がそんな事を云ふのは、甚だしい失敬だぞ」と敦圀く。

吉助は持て餘した様子になつて、奥を覗込み「出て来て呉れ」と呼ぶと「おう」と底響のする聲で答へて、みしりみしり立出でる者は、別人ならぬ源八である、眉間に夕立雲のやうな曇を合んで、例の

蛇のやうな眼をさらりと光らせ「旦那今日は」と、首肯の程の御辭宜をした。

最初から、源八が奥に控へて居ると悟つた俊郎は、出て來られたからつて別に驚きもしない「あゝ源八君か、君が居るなら話が早く判つていゝ、今云つた事は聞いたらうな」「聞きました」と、押切るやうに云ふ「今云つた通りの譯で、僕が此秋谷に居る間は、久平の店へも行けばお磯とも口を利くそれを君等が兎や角云つたつて仕様がなないよ、いや、口を利くばかりぢやアない、若し、お磯を無理に手込に合はして、一生廢つた疵物にした上に、卑怯にも辱しい女の子が身に疵を受けた弱味に附近で、執念深くそれを虐めやうとする奴があるなら、お磯が仇敵の助太刀になつて、其奴の手足をへし折るか、首を捻切るかしてやらうとも思ふ、けれども、僕とお磯は關係があるだらうなんて、汚い客な、僻んだ目で見ちやア、僕は痛くも痒くもないけれども、君等が大變損だらう、縦令君等にどうぞッて頼まれたつて、決してお磯と汚い關係なんか結びやアしない、お磯の心には買つてやるべき部分もある、けれども身軀はもう汚れてる、腐つてる、指の先を觸れるさへ厭だ、僕は自分と云ふ者を重んずることを知つてるから、こんな事に掛けちやア、君等と少し考へがちがふんだ、いゝか、判つたか、もう判つて呉れてもいゝだらう」と犂々釘か何かを打込むやうに云つて、詰らなさうに眉を擡める。

源八は腕を組み頭を低れて、暫く物を云はずに居たが「判つて呉れないのかえ」と俊郎に催促され

て「判りました、それぢやアもう、旦那へお願申す趣意もねえし、旦那とお磯の事を兎や角云ふ趣意も御座えません、これから先の事は、私の考へで遣りませう、どうも御手敷を掛けて濟みませんでした」と何か考へる所があるやうに、言葉の端に針を含んで、悪く叮嚀に云ふ「好し、それで話が極つた、どうも失敬した」と云ひ棄て、俊郎は突と店を出た

後に、忌ましくしさうな舌打が聞こえたので、ふと振り返り掛けたが、堯爾となつて其儘前に向つた

其四十八

別荘へ歸つたが、お磯が墮落を救うツて藝事なら藝事に脇目も觸れず進ませたいと希ふ心が、燃えるよりも熾である

誰の胤とも判らない子を孕んだ女を、俊郎はどうしやうとも思やアしない、縦令一度はどうかしやうと思つたにしても、さう聞いて厭にならずには居られない、だから、お磯に對する俊郎の今の心は、誰に何と云はれても忤しくないだけに潔白である、今迄は口に云ふ程潔白ではなかつたかも知れぬが今は確に口で云ふ以上に潔白である、其代り、お磯の身體の汚れを厭ふ度に劣らぬ熱心を以て、また汚されぬ其心を保護し、之を或一筋に向はせ、墮落の淵を脱して何處迄も高い所に昇らせやうとするのである、俊郎は今始めて、お磯に對する自分の態度を確に定めることが出来た

喜代子やお種が、心配顔で訊ねると、俊郎は「なアに、苦も無く片が付いたんだよ、僕は唯だ、お磯なんかとそんな馬鹿々々しい關係は結ばないツて事を、源八や何かに判らせるといふんだ、もうもう奴儂の疑ふ餘地が無いやうに明かにして来たんだから、此後いざこざは起らないよ、お磯と僕がどうするもんか」と機嫌好く答へ「それに、問詰めたら」と云ひ掛けて「いや、十五の歳とかに源八に手込にされたのが始まりで、自棄半分可なりに男を食ひ散らしたさうだ、誰がそんな奴をどうかするもんか」と反らしたが「けれども、そんな關係でなく、眞面目にお磯の墮落を救うツてやるのが、久平に對する僕の義務だ」と云ひ切り「些と喜代さんと相談があるんだから、お前達は暫時彼方へ行つて御呉れ」と、お種お京を遠ざけた

こゝは、客間の次に續いた座敷である、お種お京は中庭を隔てた茶の間へ下つた

俊郎は、此後心に疚しくない事をするのに、喜代子に疑はれながらでは面白くないから、蓋そ打明けて、喜代子を此事の相談相手にし、二人でお磯の前途を見てやる事にしたら、何をすることも公然に出来、且つは種々の便宜も得られるだらうと考へたのである「喜代さん、問詰めて見たら、お磯はもう誰の胤とも確と判らない子を孕んで、三月にもなるさうだ」「へえ」と、喜代子は他人の事ながら色を失ふ程に驚いた「どうせ、だん／＼促り出して来る腹だから、自然に判る時が来るんだけれど、我々の口から世間へ廣まるやうにはしたくないと思ふ、お種やお京にも秘密にして置いて呉れ給へ」

「えい」喜代子は確と首肯く「さう云ふやうな次第だから、僕がお磯にどうかうのと云ふ心の無い事は、喜代さんも認めて呉れるだらう、けれども、源八の手込に逢つたのが本で、自棄で墮落したお磯は可哀さうぢやアないか、お磯は兎に角、あの子一人しか無い久平夫婦が氣の毒ぢやアないか、だから、僕は喜代さんの力を借りて、二人でお磯を救はうと思ふが、喜代さんの考へはどうだらう」俊郎は底から眞面目である「どうして御救ひなさる御考へです」喜代子はあへこへに問返す「其事だね、お磯は腹の中の物を出して身體が軽くなつたら、東京へ出て、何か藝事を稽古して、妖婦になる練習を積んでから、自分の運命を滅茶々にされた仇討に、手當り任せ、世間の男を散々手玉に取つてやらうと云ふんだ」「へえい」と、喜代子は益々驚く「さうさしていいのなら、論も理屈も無いんだけれども、それぢやア、お磯は身體ばかりでなく心迄も墮落するんだ、だから、まだ幸ひ心迄も腐つて了はない今の中に、自棄の棄鉢な考へを棄てさして、どうせ向はうとしてる藝道へ、脇目も觸れず進むやうに、魂を入れ換へさしてやりたいと思ふんだ、もう一度僕から眞面目に説諭してどうしても其氣にならせずにやア置かないんだが、其氣になつたら、喜代さんと一緒に、久平夫婦が憤らないやうに好く宥めて、お磯の身の上を二人で引受けやうぢやアないか、腐つた肉の塊から、人間一人を造り上げるんだから、事業としても立派なものだらうと思ふ」暗中に變轉する心機は、自分でも明かに其針の先の指す所が判ない、俊郎は何時しか喜代子を未來の妻として遇し、喜代子と自分の距離をお磯と自分とのそれよりも近いものとして相談して居るのである

「氣の毒な人で御座いますねえ、貴方が其思召なら、誰に聞かしても見つともない事ぢやアないと思ひますから、御一緒にあの子を救ひませう」金の中に育つて来て、世の中に困難な問題があることを知らない喜代子は、別に大した事とも思はぬらしく、安受合に承知した、兎に角俊郎とお磯との間に危い傾きが無いことを確め得たので、安心したと云ふ氣色は、十分に見えるのである

若しもお磯が墮落して居ず、縱令今迄は墮落して居ても、これからの歴史を新しく清くして、而も墮落の結果の塊などを孕んでゐなかつたら、喜代子は俊郎にこんな近くに取扱はれなかつたのであらう、思へば、喜代子の境遇は淺ましいものである

其四十九

話が極つたので、爺やを使にお磯を呼びに遣つた、大事な用向であるから、是非一緒に連れて来いと吩咐けた

お磯が来る、俊郎は先づ四疊半へ引入れて差向ひになつた態々呼び迎へられた上に、靜な座敷へ引入られて差向ひと云ふ寸法なので、お磯は餘程面喰つた様子である「何か變つた御用で御座いますの」と、座にも着かぬに自分の方から訊ねる「別に變つた用

でもないけれども、今日は磯ちやんに確り心を定めて貰はなければならぬ、まあ、其座蒲團へ坐り給へ」俊郎は沈著き拂つたものである。「これで結構で御座います」と、端近い奥の上にひたりと小さく坐る「磯ちやん、お前はどうしても棄鉢を遣り通さなければならぬのか、それでお前が滅茶々々の一生を送るやうになつたら、僕はどう思つたつて、もうお前と顔を合はせることも、言葉を交すことも出来なくなるんぢやアないか、お前を立派な人間にして、何時迄も兄妹の交際をし、互に助け合ひたいと思ふ僕の心が水の泡になつて、他人同士よりもなほ疎遠にしなればならぬんぢやアないか、お前に逢ふことを避けるやうにしなればならぬんぢやアないか、僕は世の中には程詰らない是程残念なことはあるまいと思ふが、お前はそれ程に感じないと見えるね」かう云つた時の俊郎は、蔭で聞く人の思はくを願うでもなければ、お磯の心を測るでもない、全く肺肝から溢れた熱誠の聲なのである。決してもうお磯を自分の物にする機会を求めやうとの野心などは無く、今は唯だ、戀愛以外に戀愛と同じ度の愛を注ぐ人間として、對して居るので、何所迄もお磯を墮落から救ひ、立派な人間に仕上げてやりたいとの、清い熱心だけなのである。

他迄意地を張つて、一方に凝固まつたお磯も、これには痛く打たれた様子である。「わたくしの心は貴方に向けて居りますけど、どうせ貴方は、わたくしを穢らはしい醜類と思召して、これから先御言葉も戴けないものと、一人で極めて居りましたんで御座いますが、それ程迄に被仰つて下さいませ

と、又自分の身が惜くなりまして、世の中に未練が残ります、それぢやア、其御言葉を力に、被仰つて下さいませ通りに致しませう、どうぞ宜しく御願ひ申します」と、昨今心易立てに流れた言葉使ひを、始めて知合つた時のやうに叮嚀にして、低い聲で淑やかに述べた。

俊郎の頭腦へは「其御言葉を力に」の「力」と云ふ言葉が、「生命」と云ふやうな強い意味に響いて、あゝ、相手を確めることの出来ぬ子を孕む程に墮落して居なかつたならと、残念さ口惜さが又むらむらと起るのである。

「むい、よく僕の云ふ事を聞入れて呉れた、有難い」と、俊郎は聲を震はして云つて、堪らないやうに膝頭を動かしたが、じつと氣を沈著けて、色を正しくし「それぢやア、お前は今から僕の妹だ、世間普通の妹以上に可愛い妹だ、そこで、これから愈々御前の身が立行くやうにする相談だが、何時迄隠し了せる事でもないから、僕から、お前の身の上の今迄の事を、御父さん御母さんへ憤らないやうに話し、お前の身を預かる事にしやうと思ふ、子を生むにも、東京の然るべき病院へ入つてすると、世間にも表立せなくつても濟むし、金を添へて相當の事をしたら、貰つて育て、呉れる者もあるだらう、そして、お前の身を軽くして、日數が経つたら、藝事と云つても何が好きかお前の望みがあるだらうし、且つは、天性何に向くかと云ふ事も試めて見なければならぬが、鬼に角い、やうな事を選んで、斯道に向ふやうにしやうぢやアないか」と、眞面目に、而も柔かく、親切面に溢れて説いた。

「有難う御座います」と拝するやうに云つて、お磯はしく／＼泣出すのである。「好し、それも承知か、そんなら、此相談に人を一人加へさして呉れ、僕は男だし、お前は云ふ迄も無く女で、さうでなくつてさへ人に兎や角云はれてるんだから、お前と汚い關係がある爲に、お前の身を引受けてそんな事をさせるんだと思はれちやア、口惜しいちやアないか、口惜しいばかりか、第一、事をするに邪魔が入つていけないんだ、それにお前は尋常の身體ぢやないから、僕と悪い事をして孕んだなんかと間違へられちやア、何も蚊も打壊した、いくら僕がお前の力にならうとしても、お前が立派な人間にならうとしても、世間が許さなくなるんだ、だから、今此所へ來てる此別荘の主人の娘——喜代子つて云ふんだ、それをも此相談に加へて、僕と二人でお前の事をさせやうと思ふ、さうすると、天下晴れてお前の爲にどんな事でも出来るよ、これからお前の身を軽くする迄にも、軽くなくてから藝事を仕込むにも、打明けて云へば些と金が掛るんだが、喜代子と二人でする段になると、幾何でも、公然に出せるんだ、ねえい、だらう、世の中の事は一本調子ぢやアいかないもんだから」「御嬢様がそれを御承知なさいませうか」と、驚いたやうに頭を擧げて、一ぱいに目を瞪る、世の中にこんな案外な事があらうかと云ひたげな様子の底に、厭な氣色があり／＼と動いて見えるのである

其五十

俊郎は、女と云ふ者の御し易くないことを覺えた。此場合、喜代子がお前に同情を有つて、美しく清い心でお前の力にならうとして居るなどと云つたら、お磯は却つて厭に思つて喜ばないのであらう、肯て喜代子を自分の競争者と明かに見做して居る譯でもあるまいが、俊郎の出やうに依つては、亦敢て競争者と見做さない譯でもないやうな傾が見えるのである。ちよつと首を捻つたが、直ぐと心に首肯くやうな笑顔になつた「人の爲を謀る事だから功徳になるから、僕が勸めて承知させたんだ、名義だけさうして置かないと、是から事をするに具合が悪いんだから、いゝちやアないか、伶俐な磯ぢやんにも似合はない、そんな呼吸が判らないのか、お前の心は僕が貰つてるし、僕の心はお前へ遣つてあるんだから、二人の身體が此後どう別々に極つたつて、心ではお前の事を第一にして考へるんだよ」と低い聲で云つて「何も遠慮する事は無い、さうして貰ふのが氣の毒だと思つたら、一生懸命藝事に勵んで、立派な人間になつて呉れるさ、それが此上の無い報ひになるんだ」と、奥迄聞こえ渡るやうに調子を高くした「有難う御座います」とお磯は頭を下げ、其儘凝と考へ込んだが「さうでなくつてさへ、御嬢様は御優しくつて、わたくしなんかへも丁寧な言葉を掛けて下さいますんですから、さうして戴くやうになりましたら、御氣の毒で何所迄も御嬢様へ義理立てをしなけれうならぬと思ひます、わたくし、どう致しましたもんですか、それを

考へると幸う御座いますから、我儘を申すやうですけど、算を今迄の考へ通り、棄鉢で遣り通しした方が」と、奥へ聞こえない程の聲で、壁へ手を突き、俊郎を見上げて云ふのである。「それア餘計な遠慮と云ふもんだ、實地の事は僕がするんだ、僕一人がするんだと思やア、何でもないぢやアないか」俊郎はとうとう氣を焦ち出して、聲は低いけれども息込が激しくなつた「さうするんだよ、さう極つたよ」と、俄に嗚鳴るやうな大声を出す「ぢやア、済みませんですけど、萬事宜しく御願ひ申します」と、響きのいい聲を十分に徹らした「極つたら、喜代子に逢はせずに返すのも變だから、此所へ呼ぶことにしやう」「え」と、お磯は迷惑さうにもぎ／＼する「普通に禮を云つて置きやア済むんだ、何も億切がることはないよ」と、小さい聲で親切に云ひ、急に氣を變へて「おい／＼、喜代さんが居るか、ちよつと此所へ来て呉れないか」と高く呼ぶ

「御嬢様、若旦那様が御呼びで御座います」と、お京が傳へる様子である

時を移さず、しと／＼と廊下を通つて、微笑の中に威厳を繕ひつゝ、喜代子が座に入つた、お磯は益々小くなつて、もう下るべき餘地もないのに、なほ座を下らうと身をよぢらせる、それをば幣と尻目に掛けてすうつと上手へ通り、俊郎とお磯との間にきちんと座つた

「喜代さん、お磯が愈々棄鉢の料簡を棄てて奮發する氣になつたんだから、これからは、僕と一緒に力になつて遣つて呉れ給へ」「及ばすながら」と、喜代子は優しいものである「済みませんで御座い

ますけど、どうぞ宜しく御願ひ申します」と、お磯は恭しく頭を下げる、「妹と思つて、世話をしてやつて呉れ給へ」と俊郎が云ふと、喜代子は厭な顔になり掛けたが、お磯の氣が附かない中に蚤くも笑を寄せ返して、「どう致しまして、行届きませんですから」と、謙遜する風に見せて、暗に之を拒む喜代子が平生の主張から推すと、卑しい漁師の娘なんかと姉妹のやうに親しくしては、自分の位が下ると云ふのであらう

俊郎はそれを目に止めたけれども、氣に止める程の事ではないと思つて見違した、どうせ、心から喜んでお磯の爲を謀る氣遣ひはないから、形式的に承知さして、自分がお磯の爲に盡すことを妨げさせなければいいとしたのである「ぢやア、磯ぢやんの御父さんと御母さんへは、折を見て僕からよく云はう」と、俊郎が話の切上げをする

「あの、父が皆さんを御連れ申して、鯉釣りに参りたいと申して居ります」お磯は、手持無沙汰に、ふと父に云はれた事を思ひ浮べたのらしい

其五十一

四五日は、俊郎下痢の加減で別荘に閉籠つた、さして弱つたと云ふ程でもないが、時節柄であるから、要心して服薬に力めたのである、醫者は葉山から迎へた

喜代子はもう單調の海濱生活に倦み果てて、東京へ歸らうか何所へ行かうかと、同氣相求めるお磯をお京を相手にして口癖のやうに云ひ續けて居る、けれども、お磯の事がどうにか一段落が著く迄は、氣になつて容易に此地が離れられないと云ふ様子である、それに俊郎が此始末であるから、獨更身動きがならない

お磯も、久平も、久平の娘も、代るく見舞に來た、何と思つたか、源八と吉助との二人も、人傳に聞いたと云ふて、鶏卵の折などを持つて見舞に來たのである

お磯の事を久平夫婦に云ふべき機会もまだ得ない、身體が癒つたら是非行つて話したい事があると見舞に來て呉れた時に云つては置いたが、元來壯健な身體であるから、癒ると直ぐ、今迄の反動で非常に元氣が加はつて來た、海へ出るか、山へ登るか思ひ切つて動いて見たくなつた、そこを、先日お磯が一寸口を切つた鯨釣の遊びに、改めて久平から誘はれたので、一も二も無く先づそれへ出て見る氣になり、お磯の身の上を久平夫婦へ相談することは又もや後廻しになつた

丁度八月の十三日である、別荘からは、喜代子も最初行きさうな様子であつたが、愈々となると、半日波の上に晒されて日に焼けるのが畏くなつたらしく、それよりは家に居て魚を捕つて來るのを待つ方が樂だと逃げた、お磯は元より進まないのであるから、これ幸ひに、御嬢様の御伽をして後に残らうとするく出る、こんな家に居たがたり後に残りたがたりする者ばかりで、爺や婆やを誘ひ

出したつて始まらないし、俊郎一個で出やうと思つたら、お京が案外に行きたさうな氣色を見せる、聞いて見ると、一度品川沖へ鯨釣に出たことがあるので、其樂みが忘れられないと云ふのである、それに、お京はお轉婆の氣質の上、舞踊で慣らした跳ツ返りたがる身體に、少女に特有の好奇心を溢るゝばかり満ちして居ることは、外からも覗ひ知られるのである、それを、喜代子が面白い事にして、切りに行けと勧め、連れて行つて呉れと頼むは、俊郎の行動を監視させやうとするのにならぬ、斯くて、お京を供に連れて、久平に定められた午後一時と云ふ時刻に荒物店へ行くと、其方では久平とお磯とが釣竿と綸釣との数々を揃へて居る、餌の用意も調つて居る様子である

久平に俊郎、お磯にお京、四人連れ立つて、坂路を谷へ降りた、お磯が手に提げた籠には、酒肴に酢味噌などが入れられてあり、脇には座蒲團を捲込んだ薄縁を抱へて居る、此四人連れが漁に出る姿をば、村の者共が、珍しい見物で、もあるやうに、態態立出で、見送るのである

例の小川の吐出口へ行くと、漁船が幾艘も大きな魚の上がつたやうに砂の上に並んで居る、其中から、入山形に久の字の標識あるのを見附け出して久平一人の手で水へ下した苦も無さ加減、まるで板一枚を取扱ふやうである

船板の上に薄縁が走つて、座蒲團二つ現はれ、釣道具や食品が適宜の所に置かれると、久平が動かないやうに船を押へ着けて先づ俊郎とお京とを乗せ、續いてお磯が飛乗り、久平は、一間ばかり船を

押出してから、濡足の儘で緩りと上つた

日が照りながら、空に薄布を張つたやうな曇りで、陸は蒸暑いのであるが、波の上は流石に涼しい、お磯と久平とが左右に別れて漕ぐ櫓の拍子に連れて、船の位置は忽ち高くなり忽ち低くなる、俊郎は別に驚かないが、品川沖に比べて揺れ具合が激しいので、お京はやゝ案外顔である、けれども、興味を失ふ迄には至らない

漕ぎ行く先は、かの、一里の沖の水底に横たはつて居る巖島の附近である、此「カメギ」と呼ばれる巖島に就いては、秋谷に來た日から俊郎が注意を拂つて居るのである、長者ヶ崎を越す時、始めて久平の姉に逢つて、大時化の日に軍艦が「カメギ」へ乗上げて壊れた話を聞き、又、お磯に始めて百合の花を持つて別荘迄送られた夕に、朦朧たる風色の沖の空を破つて、お磯が手の中の白い花と同じ物の百千萬億を、山のやうに積み重ねては又崩すやうな、美しく凄い光景を怪み、お磯の説明に依つて、之を「カメギ」に激する荒浪と知つて以來、「カメギ」と云ふ周回一里に近い大暗礁をば、一種の恐怖を伴ふ好奇心を以つて、日頃俊郎が注意して居たのである、然るに、今日測らすも、其附近迄罾を釣りに連れて行かれるのである

「カメギ」と云ふ名は優しく、寧ろ平凡であるが、其實を想像すると、大きく強く冷い物で頭から壓着けられるやうな感じがするのである、其附近へ漁に行くに云へば、鯨か、鰐か、正覺坊か、いづれ

そんな大きい物か、強い物か、凄い物かを自當てにするやうに思はれるのである、生命知らずの荒男共が、網を揚げ鉈を抱へて向はなければならぬやうに思はれるのである、是等の空想をば、女雜りで罾を釣りに行く事實と比べて、俊郎は其懸隔の甚しきを滑稽と思はざるを得ない

應て目的の所となつたので、適宜の位置に罾が下された、何れも三本づゝの細竿を取つて、手許を船の横にある孔に差し、端から垂れた綸を波に弄ばせると、波の碎片が魚に化して附いて來るかとはかり、三本の竿を代る／＼上げるに忙しい程である、餌はごかいで、俊郎の釣へば久平、お京のへはお磯が附けて呉れる、底は海藻の生えた巖で、深いけれども水が飲まれさうな程に澄切り、罾の群の閃めくのが願で數へられるのである

其五十二

船底に釣り溜めた罾は、もう百を以て數へるやうになつた、餘りに無造作に上つて來るので、釣りの興味も早く盡き易い、日も餘程傾いたから、竿を收めて食べ方に取掛らうと、久平が先づ綸を捲いた

ひらく／＼する小魚を、一掬ひ船底から手網で掬ひ上げて、一つ／＼を落し頭を除き、骨と腸とを抜き、湖水で揉んで洗ふと、脂まじりの赤い汁が波を曇らして、魚の肉は瑤瑤のやうな半透明に見

え、縮んで背が小さくなつた、それを用意の酢味噌に浸して食ふのである。

酒は、升徳利に盗るゝ程ある、俊郎の多く飲まぬを知つて居る久平は、自分が盛に煽る氣でなければ是程用心して來る筈が無い、旦那御一つ、其方の姐さんも御遣んなさい、お磯お前も一つ御相伴しろ、三人の手に湯呑然たる茶碗を持たして、二升徳利を手際好く取扱ひ、溢れず少なからず巧みに注いで遣る。

「肴は一つの鉢をみんなで突ツつき合ふことにしませう、沖へ出ちやア、物の揃はない、禮儀の無いのが馳走ですよ、姐さん、お前さんも汚がらすに箸を突込んで下さい、亂暴な料理だが、旨いことは受合ひだ、陸ぢやア、金を出したつて食はれやアしません」と、久平自慢たらしくに打興じて、俊郎がまだ半分も減らさぬに、手酌でぐいぐい、早や三碗を干した。

「や、これア實に旨い」、俊郎は鱈のぬたを一口やつて叫んだ「眞誠に、おいしう御座いますねえ」とお京が合槌を打つ「旨いでせう」「實に旨い、唯だの鱈とは思はれない」「陸ぢやア、どんな名高い料理屋へ行つたつて、こんな旨い物に食はせないでせう」「とても、とても」と俊郎又一箸「あ、いゝ心持だ、お磯、何か食ふ物を持つて來たんなら、早く出すがいゝぢやアないか」久平大得意である「干瓢と焼豆腐の煮たのに、海苔で包んだ搏飯、それから御香々」「は、飯屋の女中ぢやアあるまいし、そんなに讀上げなくつてもいゝや、お袋が、相も變らず氣の利かない物ばかり持たして寄越

したな、いゝからみんな出せ」と、羞圖しながらもぐいぐい引掛け續けである。

馳走の数が人を押退けて並んだ、お京とお磯とは早や搏飯に取掛るのである「何だ、もうやるのか意地が汚いな」と親仁に笑はれて「だつて、船を漕いだり魚を釣つたりしたら、御腹が空いたんですもの」と、お磯は下手に見得張らない「ねえ、御魚があんまり釣れるんで、三本の竿を取つたり置いたり、手に隙が無かつたんですもの、身體も草臥れるし、お腹も空く筈ですはねえ」と、お京は不思議にお磯と親しくなる「今日は潮の加減がいゝから、鱈がよく釣れます」と、久平又一碗「成程、漁船が彼方此方に散らばつて見える、波が穏でいゝ景色だ、これに富士が見えると云分無したが、曇つてるから仕様がな」と云ひながら、俊郎もそろゝ搏飯の方へ手を出し掛ける「旦那迄も其方の組になつちやア困るぢやアありませんか、もう一つおやんなさらないと不可ませんよ」久平は無理に茶碗を俊郎に持たせて、波波と注いでやる。

「久平どん、御樂みけえ、いゝねえ」と、突然海が物云ふやうに聲が掛つた「お、權右衛門かえ、いゝ風だねえ、船を寄せて一盃やらないか」「あ、折角だけど、まア行くべえや」六十ばかりの老父と、息子らしい三十近い男とが、緩く櫓を漕いで、此方の船の傍を通るのである、漁を了へての歸途と見える、久平に言葉を掛けたのは老爺の方である。

漁を了へて歸る船、これから漁をしようと出て來る船、最中漁をして居る船、動く船と動かぬ船と

周囲は船だらけである「やアこれア、酒が廻つて来た、お磯、俺等アもう櫓柄が取れないんだから、歸りは貴様が一個で漕ぐんだぞ」と、げつぶを一つやつた時には、久平が胡坐の膝頭に引附けられてある二升徳利はもう、空しくなり掛けて居るのである「わたし一個で？いゝわ、漕げないこともないでせう」と、お磯は左迄苦にも思はぬ様子

「あなた、一個で此船が漕げるの、そんな細い腕で？傑いのねえ」お京は感服敬服したやうに、美しい漁師の娘を見上げるのである

其五十三

仁王のやうに逞ましい身體を蝦色に染めて、強みと優みとを半々に含んだ顔が、暮近い日ざしに照り榮え、虹の如き酒氣を吐いて、十間二十間乃至半町ばかりの近くに漁をして居る者を、驚いて振向かせる程の高笑ひをする久平「自慢ぢやアないが、此久平の子と生れた以上は、女郎だつて阿魔だつて、こんな船を漕ぐことぐらゐ、出来ないとは云はせません、これでも、何か世の中を引くりかへすやうな面白い仕事の種が落ちて居やアしまいかと、世界の果から果迄ほつき歩いた人間ですが、何にも打ッ突からずに、とうとうこんなさま迄落果てましたんです、賣めて此子が男なら、二代目の久平にして、世界を飛び廻らして見たいと思ひますが、女郎ぢやア仕様がありません」と、酒に煽ら

れて、そろく、其隠れたる人物たる面目、未成品として終るべき豪傑たる特色を、發揮して来た、言葉さへ、此邊の漁師とはちがつて、何所へ出して口を利かしても耻かしくない立派なものである、青春の時代から今日迄、世界の果から果を飛び廻つて、種々の事件を経、種々の人物に接して、談判もし議論もした名残が、十分に認められるのである

「親方、そんなに氣を落し給ふな、女だつて、磯ぢやんぐらゐ確りしてたら、屹度立派な事が出来るよ、僕は磯ぢやんに感服してゐるんだ」と、俊郎が熱心に云へば「いやア、どう致しまして」と、久平除程嬉しうである「十七か十八で、而も濱邊の女にしちやア纖細な方の身體で、一里餘りの沖から此船を一個で漕ぎ戻すことを受合ふなんて、何だか斯う、草双紙にでも見る勇婦の面影があるやうだね、斯う云ふ確りした女が、八犬士のやうに四方から集まつて、前世から姉妹の因みがあるとか何とか云つて、義を結んで力を合せ、果は、親方の所謂世の中を引くりかへすやうな面白い仕事を始めるかも知れないよ、お京なんか其一人かも知れない、馬鹿に磯ぢやんと氣が合ふやうだから」と、俊郎は微醉機嫌に打興するのである

久平は、太い腹に波を打たして、世にも心地好げに打晒ふ

二人の娘は、顔を見合はして嬉しうに笑を含む、今日は薄化粧も施さずに、淺黒い地肌ながらも艶やかに柔かいお磯の頬、其趣ある姿、愛嬌と品格とを兼備へた其目鼻口をば、お京は惚々と見上

ける、眞白な上に日焼けの紅みを刷いて、如何にも生々したお京の顔も、お磯に虫が好いたらしく眺められたのである。「二人は、これから仲を好くしませう、ねッ」と、お京はお磯に摺寄つた、これでも、始めて別荘でお磯を見た時には、江戸ッ子が田舎者に對する常例として、無意義な輕蔑の色を見せたものである。「え、どうぞ、わたし見たいな田舎者でも宜しけれア」と、お磯は優しく首肯く「別荘に居る者の中で、お京が一番きびきびして、一番判つてる、磯ちゃんも氣が合ふ筈だよ、喜代子がお京であつて呉れると、物事都合が好く運ぶんだけれどもねえ」と、俊郎が言葉を挟んで嘆息するに、お磯は、至極同感らしく頭を低れて考へ込む、此間の深い意味は、お磯と俊郎と二個の外に判る筈が無い、久平は唯だ樂さうに打晒ひ、お京はお磯様以上の者に譽め上げられたと思つて、嬉しいやら濟まないやら、耳迄眞赤に染めるのである。

暫く話が途切れると、久平が又繼ぎ足す、何かと思へばお磯の自慢である、自慢でないやうに自慢をするのである「御轉婆で仕様がありませんよ、まるで男が間違つて女に生れたと云ふやうな代物です、けれども、小子は娘と考へがちがつて、それが此娘の取得だと思ひます、ですから姿容は女で氣性は男に、奇麗さつぱりと育て上げるのが、小子が此娘に對する責務だと思ひますが、旦那の御考へはどうでせう」「む、」此所で俊郎は其特有の唸り聲を聞かして、大きく緩く深く、願が胸に食込むやうに首肯いた

久平には、感心して同意を表したやうに見えたのであらう、けれども、俊郎は手に汗を握る思ひなのである、今晚にも明日にも、自分は久平に向つて、お磯が何者の胤とも確と定まらぬ子を宿したことを告げ、而も、それは已むを得ない結果であるから決して憤るなど、宥めなければならぬ身であるそれを聞いたら、久平がどんなに、今日の今、こんな事を云つて娘の自慢をしたのを耻るであらう、あゝ思へば實に氣の毒である、此場合、唸るより外に挨拶の仕様は無いのである

お磯はどうかと見ると、泳ぎ兼たと覺しく、くるりと後向になつて、海を眺める振をして居るのである

其五十四

お磯が後向になつたのを、にやり／＼久平が眺めやつて「は、御轉婆と云つたのが氣に障つたと見えるな、いゝぢやアないか、何も御ツ母見たいに、御轉婆が悪いの、何時迄も赤ん坊でいけないのと云ふんぢやアあるまいし、其御轉婆かいノツて云ふんだよ、何所迄も御轉婆でやり通せつて云ふんだよ、おい、此方へ向きな」と、子供をだますやうに甘つたるく云ふ、けれども、お磯は凝として、聲も出さず身動きもしないのである、無苦しからうと思ひ遣るのは俊郎ばかりである「む、判つた、旦那や此姐さんの前で御轉婆と云はれたから、極りが悪いんだな、は、此奴旦那や何かの前ぢやア

餘ッ程猫を冠つてると見える、幾等猫を冠つたつて駄目だよ、此船を一個で漕いで戻ると云ふ女の子を、誰が御轉婆でないとと思ふもんか、御轉婆にもよりきりで、悪い御轉婆はいけないけれども、腹の中を確り御轉婆で固めて、矢も鐵砲も徹らないやうにし、上邊は何所迄も、優しく柔かく女らしくするんなら、これ程結構な御轉婆はないんだ、さうなつたら、女でも親父の後継が出来、お磯なんかまだ上邊に御轉婆が浮いて見えるから駄目だ、これからうんと修行して、御轉婆を腹に固めろ、おい、此方へ向けと云ふに「酒愈々湧いて舌益々滑かである」「わたし、海を眺めてるんだよ」お磯は苦しさうに小さい聲を出す

何の氣無し久平が言葉とは承知して居ても、腹の中を固めろの、腹に物が徹らないやうにしろのと云はれると、お磯が腹の秘密を聞き知つて居る俊郎には、冷り〜と應へるのである、當人のお磯がどんなに苦しからうと思ひ遣れば、座にも堪らない程である、さりとして、狭ッ苦しい船の中ではどうすることも出来ない

久平は、もう、酒が我が我が酒かと云ふ程に酔が廻つて居るのであるから、誰がどんな素振をしやうが、それを認める目はない、委細構はず舌舐づりをして「はッはッはッはッは、面白いな、愉快だな、こんな愉快な事はないよ、お磯、まだ此方へ向かないのか、親父の云ふ事が判らないと見えるな、男見たいになれと云ふのは、氣性を確りしろと云ふ事で、男嫌ひになれと云ふ事ぢやアないんだせ、氣

性は男で、確り腹を固めて、親父の後を継いで、思ひ切つて世の中を引くりかへすやうな仕事をしろと云ふんで、これさへ出来たら、後は女の働きで、亭主を持たうが、男を拵へやうが、一切其方の勝手だ、けれども、源八見たいな屁鉾野郎の云ふ事を聞いちやア、厭だせ、男を持つなら、確りした、何所迄も男らしい、持ちつ持たれつして、一緒に世の中を引くりかへすやうな仕事の出来る、齒答へのある、手前の齒ぢやア食ひ切れない程の男を選び抜かなければならぬんだよ、はッはッはッはッは」と、もう酒に堪へないらしく、目を瞑つて打晒ふのである、さうかと思ふと、濁と目を睜つて眞面目顔になり「さうかと云つて、旦那に惚れちやアいけないせ、旦那にやア許縁の御嬢様があるんだから、惚れつつて駄目だ、けれども、旦那を見本にして、何でも、旦那見たいな確りした男を選れ」と、中音で笑ひもせず云ひ切つた「は、磯ちゃんさへ厭でなければ、僕はあんな御嬢様なんか蹴ッ飛して「ふ」と、久平の言葉を受けて心無く遣りッ放したが、自分乍ら俊郎は、其冗談か冗談でないかを判別することが出来ない「それアいけない、それアいけない」と、久平は無暗矢鱈に大きな聲を出して晒ふ少し経つてから、俊郎は詰らない事を云つたと氣が附いた、こんな事實に近い、而もさうする事出来な、さうしないと覺悟もし約束もした事を、軽々しく座輿の犠牲にして、冗談に口から出すんぢやアなかつたと後悔した、そこで、照れ隠しにお京の方へ向いて「お京、お前は目附役に今日附けて密越されたんだから、僕が斯う云つた事を、歸つたら喜代子へ告口するんだよ」と、笑顔で睨み著

ける「あら、お京さんはそんな事を被仰る方ちやア御座いませんわ」と、お磯は始めて此方へ向き直つた「ねえお磯さん、わたし饒舌者だつて、そんな告口なんか仕ませんわねえ」「兩女はもうそんなに仲が好くなつたのか」と、俊郎は驚顔になる

何時しか久平は横ッ倒しになつて了つた、二升徳利を枕に、ぐうぐうと舂を掻き始めた、波がやゝ高くなつて、どぶりぐと船の腹に鳴る、船が揺れ出す、久平は益々いゝ心持に舂と波音との掛合をやる不意に近づく一艘の小舟がある、白飛白の單衣を着て、編笠に深く顔を隠した男が、身を低く胡坐を掻いて、せつせと櫂を操つて居る、それが、避暑に來て居る學生が端艇に慣らした腕で舟を漕ぐものと思はれるやうに見えるのである

其五十五

小舟は突と進み來つて此方の舟と横に並ぶや、直と櫂を止めた、間が纔に三尺ばかり離れて居るだけである、はて妙な事をすると思つて、俊郎を始めお磯もお京も皆目を側てる

編笠に顔を隠して、横向になつて居た小舟の男が、突然櫂を引抜いて立ち上がるよと見えだが、はづみに其方の舟がぐらぐらとなつて三尺の距離を縮め、どんと此方の船の横ッ腹へ横ッ腹を打突けると、びゅーッと風を切る勢ひ凄じく、俊郎の腦天を望んで櫂が下つた「あれえッ」と、お京はお磯へ

咬り著いて突伏す、あはや、俊郎の頭の骨は微塵に碎けて飛んだかと思ひの外、鞞劔も柔術も可なりによつて來た俊郎の身體である、理髮店で源八に申渡した言葉の中にも、若しお磯に復讐の助太刀を頼まれたら、進んで、お櫂を疵物にした奴の手足なり頸ッ骨なり、へし折つてやらうと威張つた俊郎の口である、其練習に對しても、其廣言に對しても、坐つた儘に身を拵つて、紙一枚の危い際に引ッ外し、したゝか舷をたゝかして、隙かさす其櫂を握んだのが當然なのである「うぬ、源八だな」と俊郎は絶叫した

此騒動に目を覺まして「どうした」と久平が身を起し掛ける「おう、源八だ」と、小舟の男は破れかぶれに名乗つて、編笠をかながら棄てた「単住者め」片手を編笠の緒に掛ける源八の隙を覗つて、力任に、櫂を引たくる「そんな物はもう要らねえや」と、眞蒼に變り果てた顔に血走つた眼の凄じい形相で唇を震はしつゝ、かすれ聲で云ふや、身を躍らして此方の船へ飛移つた「畜生、まだ怒りないか」久平は俊郎を押退けて腕を延ばし、源八を引捉へやうと拵く

左なきたに、底の藥研形になつて居る海の船は、波の上でぐらつき易いものなのに、四人が調子を揃へずに激しく身を動かすのであるから、重箱も鉢も徳利も茶碗も、轉手古舞をして打突かり合ひ、一絡になつて海へ飛込む、船迄もそれに伴つて引くりかへりさうになる、そこへ、大きな男が飛込んだから堪らない、俊郎も一時目の瞬むを覺えた

源八は傍目も觸れずお磯に飛掛り、お磯の身體に縋れ著くお京を腕倒して、軽々とお磯を抱へ上げるや、舷に足を掛けて、一搖り激しく揺り、身を倒様に波の中へ飛込んだ、それと同時に、船が反対の舷を高く擧げて真横に立つと、お京は勿論、俊郎も久平迄も、狗兒を放り出したやうに海の中へ轉げ込んだ

動く物を残らず吐出して、あゝさつぱりしたと云ふやうに元の位置に復つた時には、船は、人の代りに水を七分目ばかり呑み貯へて居るのである

俊郎は、一旦波に潜つたけれども、多少の水練を心得て居るから、潮水を呑む迄には至らない、身を挺で、波の表に浮上つて見ると、お磯も源八も影を見せず、唯だ、久平が何時の間にか著物を脱棄して、了ひ、まだ十分に酒氣を含んで居る赤黒い身體を碧の波の間に躍らして、今や倒様に潜り入らうとする一刹那なのである、俊郎も、此儘では著物が邪魔をしてどうにもならないからと、泳ぎながら片々づゝ肌を脱いで、上半身だけ裸になつた

それで兎に角、身体が少し利くやうになつたので、船へ泳ぎ著いて、舷に手を掛け、吻と息をすると共に、片手で兵子帯を解き、著物を踏脱ぎ棄てた、今迄は一心にお磯と源八とがどうなつたかばかり氣遣つたのが、かうなつて自由が利いて、愈々自分も水に潜つて見やうとするに臨むと、不意に磁甕で頭を食はせられたやうに、強く激しく他の一つの問題に打たれた、それは、お京がどうなつた

かである、お磯は水底迄抱込まれたにしても、魚にも劣らぬ水練の達者であるから、或は逃れられるかも知れないと云ふ頼みがある、それに、久平が後を追掛けて潜つた、源八が山で久平に折檻された時、海の上ぢやア誰にも負けないつもりだと云つたけれども、此方は鯨鋒と綿統された久平で、酔うつては居るが娘の生命に掛る危急の場合であるから、一生懸命でお磯を救ひに掛るにちがひないが、お京は舞踊こそ達者であつても、舞踊の手で波は切れまい、それに誰も救ひ手が無いと來ては、此場合見殺されになるより外ないのである、あゝ、お磯を棄て、お京を救はなければならぬのも、運命だから是非が無いと、一刹那に心を極めて、屹と周囲を見廻すと、どうした勢ひでさうなつたか、お京は、七八間も船を離れた所に浮きつ沈みつして苦しんで居るのである

水に溺れる者を救ふ心得など、平生は聞いて知つて居ないのでないが、こんな場合には、そんな事を考へる餘裕はないのである、俊郎は、唯だ無茶苦茶にお京へ泳ぎ著いた、すると、溺れる者は水に浮く藁屑をも攫むと云ふ比喩の通り、お京は苦し紛れ、俊郎の身體を攀登るやうに腕いて、背と食込むやうに縋り著くのである、俊郎は、これが爲に自由に働くことが出来ない

俊郎を權で打殺した上、お磯を抱へ海に飛込んで、無理情死をせやうとの、源八の目論見は、半分外れたけれども、兎に角お磯を水の底迄抱込んだ、これで、一方は思つた事が首尾好く行き掛けて居るが、他の一方では、俊郎とお京とが、心にもあらぬ抱合情死の形になり掛けて居るのである、世の

中には案外の事もあるものである。

あッ、お磯が浮出した、續いて、久平と源八とか捻合つた儘に浮出して又沈んだ
双方共、すてへ一二分の間の事である

其五十六

お京が苦し紛れに袴と抱著く一生懸命の力は、俊郎をして身體の自由を失はしめ、兎角する中に一口二口の水を呑んだ、ぐすくして居ると、お京と心にもあらぬ情死を遂げるに至るかも知れない、其所へ、突と波を切つて来て、二個の身體を押し分けやうとする物がある、是れ幸ひと、片手にお京を抱えた儘、片手を延ばして取著き、身を浮かして目を定むれば、人も物も無い空の小舟である

あ、源八が乗つて来たのだなと気が附くと、思はず縁に掛けた手を這らせやうとしたが、半死半生のお京を再び水に湛らせるに忍びず、其儘で先づ一息繼いだ

一分一厘の餘裕が出来ると、お磯はどうなつた、久平がどうしたと思つて、心が目にはかり集まるのである、少し離れた所に、久平と源八とが浮きつ沈みつ、波を蹴立て、必死に振合つて居る、流石は鯨鯨と緯號される久平、あの泥酔の身體を以つて、よくも水底に源八を追掛けて、引提へ得たものである、けれども、お磯の見えないのが一大事である、俊郎は漫に又お京を抱えた手を離さうとして、

其微かに呻くに氣を引戻された、お京は俊郎の左の脇に身を寄せて、一方の手を胸から、他の一方の手を背中から、袈裟に掛けて捲著き、双方の指を確と肩の所に交叉はした形で、なほ此上に潮水を呑むまいと、仰向いた横顔を直と俊郎の頭筋に押著けて居るのである

お磯はどうした、形の見えない所を以つて見ると、水底深く源八に抱込まれて、巖の間へでも身を挟まれ、それツきり浮くことが出来ずに終つたのではあるまいか、ああ、自分は何故、久平や源八のやうに水練が達者でないだらうか、何故、お京を軽々と此小舟の中へ抛り込んで置いて、自分は水底へお磯を捜しに行くことが出来ないだらうかと、空しく足を踏くばかりである、すると、舟の後に人の首が現はれた、眞黒な毛が頭から流れて波に漂つて居る、驚いて好く見ると、兩手を舟の後に掛けて居るのである、お磯だ、確にお磯だ「お、磯ちゃん」と叫びも敢へず、我を忘れてお京を振離し舷を傳うて傍へ寄ると「貴方は舟へ上つて、お京さんを引上げて下さいまし」と、急込んで云つて波の上を飛ばやうに、瞬く間にお京へ泳ぎ著き、一呼吸の下に、其乳のあたり迄水の表に抱き上げた俊郎には此技が出来ない

見れば、お京を高く抱き上げた爲に、お磯の身體はぶくぶくと沈んで行つて、次第に、口が隠れ、鼻が隠れ、目が隠れ、眉が隠れ、微に生え際を露すだけになつた、それで、手は脇迄現はれて居るのである、俊郎は、慌てふためいて、半分夢中に舟へ上り、手の掛かる所お京の身體を摺んで、進二無

二引すり上げた、鹽水は人と共に溲布をなして注ぎ下るのである

「よう御座いますか、わたしも上がりまますよ」と云ふかと思へば、お磯の身は斜めに空に翻つて、軽く舷を掠め、迂り込むやうに舟へ落ちた「磯ちゃん、お前はとうしたんだ」と、殆んど人間界に有り得べからざる現象にでも接したやうに、目も口も張り開いて、其儘彫像に化しさうな、俊郎が驚きやうである「お京さんも貴方も危なく見えましたから、何を考へる暇も無く、丁度此舟が浮いてるを幸ひ、泳いで推して参りましたの、お京さんが苦しうですから、倒に抱いて、水を吐かして上げて下さいまし」と、此時のお磯は、唯だ人を認めて自分を認めないやうである

俊郎は器械的にお磯の言葉に随つて、死人のやうに突伏して居るお京が胴中の細い所へ手を弱み、倒と云よりは、斜に近い形状を以て、頭を下に抱き上げると、待構へたやうに、どつと夥しく鹽水を吐出して細く長く振絞るやうに呻く

それには氣も止めずに「舟を推して來たと云ことは判つたけれども、どうしてお前の身體が舟を推して來られるやうに自由になつたのか、僕は、もう死んだかと思つてたんだよ」と、俊郎は偏にお磯に就ての不可思議を解かうとばかり力める「もう、下へ置いて御上げなさいまし、わたしは水へ潜ることが自慢ですから、一時は悔りしましたけれども、底へ行つてからはそんなに驚きませんでした、どうせ源八は、わたしより先に苦しくなつて力が緩むだらうから、其時になつたら、振りほどいて浮

かうと思つてる中に、御父さんが潜つて來て、源八を取捉まへて呉れましたから兎に角一度浮いて見ましたんです、すると、貴方等御二人が危いんでせう」と、お磯は寧ろ得意になつて説明するのである、けれども、下へ置きかけたお京が、「あ、苦しい」と、やう／＼物を言ひ出すや「苦しいつて事が言へるやうになれア、もう大丈夫ですよ、まア、著物がすつかり肌へ吸着いて、氣持が悪さうなこと、こんな目に逢つたのは、始めてせう」と、氣の毒げに慰めると同時に、其身がぐしよ濡れの腰巻に袖無の肌襦袢を羽織つただけの姿で居るのに氣が附いたらしく「それでも、わたしの風よりはいい、わ」と委けて云つた、無論、身を軽くする爲に、著物も帯も水の中で取つて棄たのであらう

其五十七

俊郎は、お磯が案外に平氣なのに驚いた、驚くと共に耻る心が起つた、自分とお京とは、お磯に救はれてやつと助かつたやうなものである、否、確に救はれたにちがひがないのである、男一匹、女の子に生命を救はれて、それで安全を得たからとて、指を啣へて一方の活劇を見て居るべきではない、水の中では満足な働きが出来ない迄も、一番死力を盡して久平の加勢をしやうと、猿股一つの裸體で居るを幸ひ、身を起して海へ飛込み掛けた

「あれ、危い、どうなさいます」と、お磯は隙かさず腕を取つて引止める「加勢するんだから離して

呉れ」「それなら御止しなすつて下さい、決して貴方を見くびるんぢやア御座いませんですけど、海の中ぢやア、わたしの方が好く働けますから」と、お磯は確と引止めて離さない

何もお磯の力に叶はないと云ふやうな、そんな譯ぢやアないが、此場合、引止めたお磯の手に一種の神秘力があるやうで、唯だ腕の痺れて萎へるを覚えるばかりである「それアさうだけれども、僕として、黙つて見てる譯にやア行かない」と、俊郎は力の無い聲で云ふ「ですから、わたしが加勢に参ります、加勢をすると云つても、こんな場合にやア、誰だつて端から手を出しますと、酷く憤るのが父の癖ですから、わたし、あの半分水に漬つた船を推して参りませう、手か足の掛りどころが出来たら、息を繼ぐことが出来ませうから」と、お磯は何所迄も甲斐甲斐しくてきはきした娘である「そんなら、僕が行つちやア、却つて悪いやうだね」「え、貴方は此所に被在つて、お京さんを介抱して上げて下さいまし、其中どうにか片が附きませうから」と、云ひさま、潮然と飛込んで波を冠る

此非常の場合、俊郎はお磯が妊娠中の身なるを忘れたのである、お磯自身も忘れて居るにちがいない
 暫時の後、お磯が鴨の子のやうに浮出た所は、したゝか水を呑み貯へた久平が漁船の傍である、兩手を舉げると、後からすすん推し進めて、久平と源八とが、浮きつ沈みつ必死に捻合つてる所へ舳を向けた「御父さん、手傳はうかえ」、お磯は美しい水魔の如き凄じ氣込で、徐に船の腹を傳つて進ん

だ「む、こ、こん畜生、し、死者狂に暴れやアがるもんだから、ち、ち、ちと、ほ、骨が折れる、な、なアに、酒さへ飲んで居なけれア、こ、こんな者、な、何でもないんだ」と、久平案外に苦しさうである

果して、酷く酔うつて居たのが悪いのである、二升の酒を大概一個で干し、而も僅の時間に續つ玉をやつたのであるから、酔うつて身體が利かないのも尤もなのである「い、かえ、大丈夫かえ」お磯は船と共に近く寄つた

俊郎も氣が氣でなく、舟の中の敷板を一枚外して、一生懸命に水を掻いた、お磯の後を追うて漕ぎ寄るのである

久平は息切れがして堪らないと云ふ様子で、太く強い右の二の腕と、鎧を着たやうに固い肋との間に、源八の頭を挟んで緊しく締著けた儘、左の手をば、お磯が推し進めた船の縁に掛けて、吻々と火のやうな氣を吐く「御父さん、苦しいかえ」「む、二升の酒を飲んで、直ぐ海へ潜つたんだ、堪る筈がないや」「船へ上るの」「此奴、どうしても死ぬ氣で、冥途の道理に、己を水底へ引込さうとするんだ、大それた奴だから、踏縛つて人殺しの訴へをしやう、うぬ、斯して了やア腕いたつて駄目だ、頭の骨が折れるぞ、息の根が止まるぞ、これでもか」例の大力で、ぎゅうぐう締著けながら、源八が働く力の抜け果てたのに乗じて、船へ上らうとするのである

お磯は素早く船へ上つて、「御父さん、引張つて上げやう」と、久平が舷に掛けた手に自分の兩手を添へた「大丈夫だ、こんな者が鎌に吊下つたつて、一個で上れないことがあるもんか」とは云ふけれども、どうも息使ひが悪い「だつて、御父さん酔つてるから」「だ、大丈夫」と云ふ聲が少し變だと思ふ間も無く、「あつ、畜生ッ、き、罌玉を握りやがつた」と、苦しげに叫ぶや、舷に掛けた手がするくくとこつて、お磯が「あつ」と驚いた時には、源八を脇挟んだ儘、久平の身體はすふりと波に吞まれた

其五十八

波に吞まれて又浮上ると、久平は眞蒼になつて齒を切はり「うぬ、も、も、もうこれッきりだぞ」と鋸で氷を切るやうに、聲の無い咽喉で叫んだ
脇挟んだ源八の頭を促り上げて、一方の手で之を握むや、今迄挾んで居る脇を開いて、代りに手先を使ひ、團扇程ある大な手で、左右からぐツと源八の頸筋を握み、力を一呼吸に込めて「むゝん」と、物凄く唸りながら締著け握り詰めた「ぐう——ツ」と蛙を踏潰すやう苦悶の息を漏らしたが源八の最後で、次には、横さまに駄か何ぞのやうに軽く浮く其身體を見るのみである
けれども、此恐ろしい怪力は、久平に於ても又最後の働きであつた、締著けた源八の頸から手が離

れるや、其力士のやうな見事な身體は矢張々子細工よりも軽く、横さまに水の面に浮上つたのである
「御父さん」と悲鳴を擧げて、お磯は波間へ飛込んだ

丁度此場合に、俊郎が板子を楫にして根限りに漕ぐ小舟は、二つの浮いた身體と、お磯が今飛び降りたばかりの、漁船との間に搖ぎ入つた、半死の體で潮水漬の身體を横へて居るお京を舟に残して、俊郎もお磯に後れじと飛込んだ「お磯は早や久平の身體に抱著いて、「御父さん、御父さん、意氣地が無いぢやアないか」と、泣聲振立て、搖り動かして居る「親方、久平どん」と聲を震はして、俊郎も親の死骸を見るやうに絶り著いた「御父さん、もう死んだのかえ」お磯が悲痛の聲は、波を突貫いて龍宮迄も徹やうである「かうしてたつて仕様がな、御父さんを舟へ上げやう、僕は上から引張るか、磯ちやん押上げてお呉れ」と、俊郎は又小舟の上の人となつた

二個が一生懸命の力に、凄然となつた大きな身體が、辛うじて水から舟へ移された「御父さん」「久平どん」二個は聲を限りに呼び活ける「どうなすつたの」と、今迄半死の體に見えたお京も、此

な刺戟が興奮劑になつたらしく、俄に凛として身を起す
俊郎は、柔術で活を入れたり、人工呼吸を施したり、種々手を盡したが、どうも利目が見えなけれども、あの偉男兒の久平の運命が、こんなに詰まなく脆からうとは思はれない、鯨鯨と綿綿た久平が、縦命令所を握られたにもせよ、源八如きと相撃になつて、海の上で往生しやうとは思

ない、萬一にも、萬々一にも、久平がこれツきりになつて了ふべきものとするれば、それは酒の爲である酒の爲とする外に仕様がなないのである。「酒が悪かつた」と、俊郎は熱い涙を久平の冷たい胸に落した、「御父さん、もう一度生返つて頂戴よう」と、お磯は耳に口を附けて呼ぶ。

さうして居る中に、久平は「む、ん」と底で唸つて、微かに目を開いた、それと一緒に、今迄苦しさうに無念さうに齒を切つて、凄く恐しくなつて居た久平の顔は、霜の融けるやうに緩み和いで、平生の強い中に優みのある人相になつた。「御父さん」「久平どん」二個は之に力を得て、一際呼び聲を高くした。

「吉田さん」久平は嚙言よりも脆な舌で、俊郎の苗字を呼んだ、けれども、半眼に開いた目は何を見るときもない。「御父さん、氣が附いたか」、俊郎は思はず久平を父と呼んだのである。「酒に殺られた、源八も可哀相だ」と、微な聲で云つて、口元に笑むやうな氣がほのめいた。

嗚呼、人は動もすれば、死に臨んで其眞價を現はすものである、酒に殺られたとは何たる抱負であらう、源八如き者と闘つて相撃になつたのではなく、大酒をして水底深く潜つたから斯なつたのである、又、酒に殺られたと云ふ言葉の中には、斯なつた上は源八を恨まない、酒が自分を斯したので、源八が仇敵なのではないと云ふ、恨みを忘れる大度量をも含んで居るのである。「源八も可哀相だ」に至つては、何たる深い意味、高い意味であらう、最後の一呼吸の力で、確に源八を締め殺したことを

自覚するのである、自分も殺られながら、自分に殺られた相手も可哀相だとは、何たる大人の言であらう、自分の殺られたのは酒の爲で源八の爲でない、随つて、若し大酒を飲んだ上でなかつたなら、源八如きは小兒の如くにあしらつて、自分も殺られなかつたし、源八をも殺らなくつても済んだのらう之を思へば源八が可哀相になるのである、源八と云ふ毒のある厭な動物を潰したのは、可哀相でも何でもないが、源八と云ふ人間を殺したのが可哀相だと云のである。

俊郎は、覺えず久平の高潔と偉大とに打たれて頭を下げた、御父さんと呼ぶも勿體ないと思つた實に、變つた場合の變つた感想である。

其五十九

久平は、其和ぎに復つた顔の儘、次第に氣失せ色萎むばかりである、果ては、半眼に開いた目さへ次第に暈のたるむのが見え、一たびは全く暈つたと思つたら、又微かに開いて「吉田さん、お磯を確と頼みましたよ」と、やうく聞こえる程の聲で云つたきり、唇も暈も再び動かなくなつた。

俊郎は、お磯が云つた「意氣地が無いぢやアないか」との語を受けて、もつと強く振廻し、それで久平を激まさうかとも思つたのであるが、其臨終の偉大と高潔とに打たれてから、さう思つたのさへ耻かしくなつた、そこで唯だ「御父さん、これで御別れとは、あんまり呆氣ないぢやアありませんか

源八は磯ちゃんを殺して死ぬ気であつたんです、詰り御父さんは、我々二人に代つて源八と死んで下すつたんです、あゝ、もつと生きて被在つて、我々を責めて御父さんの半分だけでも、大きく深い人間に仕込んで下さいませんか、磯ちゃん、御父さんは君と僕に代つて死んで下すつたんだよ」と、泣くばかりである「えゝ、真誠にさうで御座いますねえ」と、お磯は身も世もあられぬやうにしゃくり上げる「けれども、磯ちゃんの例の事を、まだ知らずに死になすつたんだから、後に心を残る厭な思ひをさせないだけ、結局お前の罪が軽くなつて好かつたね」

今日海に出てから、俊郎は今始めてお磯の妊娠問題を念頭に浮めたのである、こんな滅茶々々の場合になつては、誰しも傍に人が居ることなどを、顧みる暇がなくなるものであるから、俊郎が此所自分から秘密の口を切つたのも、別段不思議とするには當るまい、けれども、露骨に云はずに「例の事」と曖昧にしたのが、流石に幾分かお京の前を考へた所以なのである「えゝ、それもさうで御座いますねえ、ですけど、わたしは何だか、自分の罪を隠して御父さんを騙したやうで、濟まないやうな氣も致しますよ、あゝ、御腹が變になつて来た」と顔を曇めるお磯は、もう俊郎程にもお京の前を考へない、破れかぶれ自分で自分の秘密をさらけ出さうとするのである

かう極端に出られると、俊郎は却つて未來の事を考へなければならなくなる、お磯の事は確と頼むと云つて久平は目を瞑つた自分は即ち久平に孤を托されたのである、人生意氣に感ずとも云ひ、士は

己を知る者の爲に死すとも云ふ、今からの自分は、犠牲となる迄に全心全力を盡くして、お磯を保護し且つ指導しなければならぬ、久平の死に依つて、お磯に對する自分の責任は一倍重くなつた、喜代子に打明けてお磯の事を相談した時よりは問題が更に痛切になつた、それ等の事を考へると、お磯に今其腹の中の秘密を発表させるのは、これから先、お磯、其者の爲に非常に不利で、お磯の爲にする自分の働にも妨害を招く本であることを、覺らなければならぬのである

そこで、自分は迂濶に秘密の口を切つたことを後悔すると共に、お京に怪まれぬやうにお磯の口を塞がなければならぬ必要を感じただから「磯ちゃん、お互にもう、御父さんの名を汚すやうな事は云ふまい、これからは、お前の御父さんに代つて、御父さんの子として耻かしくないだけの働きをしなければならぬぢやアないか、確りし給へ」と申合めると、お磯は、慧くもそれと悟つたらしく、首肯いて口を嚙むには嚙んだが、兩手を腹に押當て、眉を皺め、苦しうに身を揉み出す「あゝ、御腹が痛むのか、水へ入つて冷したかが悪かつたんだね、早く濡れた物を脱ぐといゝ、だけれども、此所ぢやア仕様がななし、困つたね」と潜める聲が震へを帯びる程である「お磯さん、お腹が痛くつて？」と、青ざめた顔をしながら、親切に濡れた身體を摺寄せるお京

兎に角陸へ上らない中は何とすることも出来ないから、漕いで戻らうと思ふけれども、櫓も楫も波に漂はされて、手の届く所には無く、お磯は件の状態で再び水に入らせることが出来ぬに、俊郎も早

や綿のやうに疲れ果て、身動きさへ叶はなくなつて居るのである、なほ、久平が末期の言葉を立てるには、源八の死體も引上げて、一緒に持つて戻らなければならぬけれども、どうして、新子の助けがなくなつては出来るものぢやない「磯ちゃん、どうして歸らう」と、俊郎は弱り果てた音を吹く

お磯は、兩手を腹に當て、膝の上に持たせて居た上半身を大儀さうに起し、左右に首を廻して、周囲を眺めやつた「お、船が澤山寄つて來ました、右の方から來る二番目のは、母方の伯父の船です、すから、自家の船も此船も、引いて歸つて呉れるやうに、貴方から頼んで下さいませんか、わたしもう、苦しくつて堪りませんの」と、額に玉なす汗を浮め、齒を切つてやう／＼云ひ切つたかと思へば、「むゝん」と咽喉よりは奥で唸つて、俯向にはつたり打仆れた

背に手を掛けて介抱しながら、屹と周囲を見廻せば「どうした、どうした」と聲々に叫び乍ら、四方から漁船が漕寄せる

其六十

お磯が母方の伯父の船には、元氣のいゝ伯父の外に、屈強の若い者たる三人の従兄も乗つて居る、四人の手で、二挺の櫓に一本の櫓、源八の死體迄も、残らず海から浚へ上げ、水浸しの久平が漁船へは、櫓に棧に源八の死體を抛り込み、源八の小船は、俊郎、お磯お京に、久平の死體を乗せた儘で、

欠

MISSING

と人を惱ますやうな趣致とを加へた顔を、やゝ斜に上げる「いや、かうなることを知つてたら、お前の御腹の事は誰にも云ふんぢやアなかつたが、病院へ入れて、世間に知れ渡らせずに生ませやうと思つたもんだから、先達話した通り、喜代子への事を打明けて相談しちまつたんだ、だから、あの事を知つてる者は、磯ちやんと僕の外にもう一人喜代子と云ふ奴があるんだ、仕様が無いねえ」と思ま思ましげに云つて、ちよつと舌打する

お磯は凝と考へ込んだが、暫らくあつて顔を襟から離し「ですけど、御嬢様はあんなやさしい方ですから、事を別けて好く御話しなすつたら、他人へ被仰りやアしないでせう、第一あんな立派な上品な御嬢様が、人の疵になつて御自分の御爲にもならない事を、無暗に被仰る筈が無いぢやア御座いませんか」と、色を正して云つた「それアさうだらう」と俊郎が首肯く、お磯はなほも言葉を續けて、「縦令又、御嬢様がわたしの疵になることを公然に被仰つたつて、どうも仕方が無いと諦める事に致しませう、身から出た錆ですから、何方を御恨み申すことも御座いませんです、わたしは、これから先の行ひで今迄の耻を雪ぐより外に、法がなからうと思ひます」と立派な云ひ分、其沈著いた覺悟の體は、氣品を加へた顔容と相俟つて、確にお磯の人物を今迄より立優らして見せるのである

偶然にも、不幸の中から幸福を拾つて、棄鉢の生活を離れる機會を得た爲に、斯くお磯の人物が改まつたのであらうが、俊郎には、死んだ久平の偉大高潔な魂が乗移つたのではあるまいかと思はれて

紫い物に對するやうに、つくづくとお磯を見直した「磯ちゃんがそんな大きい心で居て呉れると、僕もこれから爲る事に力瘤が入つて、剛みがある、そこで、御父さんの臨終にお磯の事は確と頼むとの御言葉もあつたし、僕は、今迄より一段踏込んで、磯ちゃんを立派な人間にする爲には、自分の事を二の次にして、ありつたけの力を盡し、公然に遣つて退けやうと思ふが、お前は無論初めの通りで、何か藝事を習ふつもりだらうね」妖婦毒婦となるも、立派な賢婦人となるも、或點以上は其要素一であるこゝに姿容から氣性、其才の働き迄、尋常以上に挺んでた女があるとする、若し社會が彼女を虐げて汚しつ傷けつすると、彼女は自棄の棄鉢になつて、妖婦となり毒婦となるべく練習するが、若し又社會が彼女を護つて勵ましつ引立てつするなら、彼女は何所迄も眞面目に考へて、賢婦人たるべく修養するのである、俊郎は今お磯が此類に屬する尋常以上の婦人たるを認めたのである、處がお磯の答へは案外である「いゝえ、もう藝事なんか習はうと思ふ氣はありません」

其六十一

「それ又、どうした理由だ」俊郎はお磯の氣を測り兼て、空しく眉を擡めるばかりであつたが「だつて、わたしが何か藝事を習はうとしたのは、棄鉢に世を渡る程にしやうと思ふからで御座いませう棄鉢ぢやアいけない、何かの程にしやうと思つて藝事を習ふのはいけない、藝事を習ふなら、それに身

を入れて外の事を思つちやアいけない、それで遣り抜けと貴方が被仰つて下さいましたから、其氣になつても見ましたけど、かうして、父も亡くなり、わたしの身も思ひ掛けなく軽くなりましたのは、眞面目になれと云ふ教へだらうと思ひますから、これから一つ、魂を入れ換へ、身體を鍛え直して、母を大事にしながら、其中店を人に譲つて東京へ出、藝事なんかでなく、何か自分出来る眞面目な事を修業致しませう」と、以前より一層清々しくなつた聲を沈めて、思ひ込んだやうにしみぐふを聞くに至り「成程」と首肯かない譯に行かなくなつた

何も俊郎は、お磯が斯道に於けるの天才を確に認めた爲に、進んで藝術に貢献せんことを勧めたのではない、お磯が自分の身の疵物になつた爲の棄鉢から、藝事を稽古して、墮落の生活に之を利用しやうとの意を告げたに就き、それなら、棄鉢でなく、墮落でなく、本氣で腕を磨き、藝術を生命にして、其奥を極めた立派な人間になるが、と勧めただけなのである、だから、お磯から、棄鉢でなく墮落でなく、眞面目に世を渡らうと考へ直した故、不眞面目であつた時に思ひ立つた道に向くことは止めて、他の眞面目な考へに適當した賢婦の事業を選ばうと云ふのに、俊郎として不同意を唱ふべき理由はないのである、成程と首肯したのは當然なのである「む、其方が却つて亡くなられた御父さんの御心にも叶ふだらう、それぢやア、其積りで僕も相談相手にならう」「晩には、伯父と、もう一軒の近い親類に来て貰つて、其事を相談致しますから、貴方もどうぞ御出でなすつて下さいませんです

か、家は買らずに貸して、店の譲り料と父が何かする積りで貯へて置きました金とで、東京へ出て矢張りあんな店を開きたいと思つて居りますから、皆の前で、どうぞ其事に御同意なすつて下さいまし」

「好し、承知した」「それぢやア、晩にどうぞ」淑かに御辭宜をして、お磯は徐に立去つた入違へて、郵便配達人が遣つて来た、置いて行つたのは、東京の新聞に封書を二通である、一封の差出人を見ると、鎌倉阪之下星月樓にて岡部平吉、川瀬清作と連名、今一封は、矢張鎌倉で、扇ヶ谷水野別邸にて玉井喜代子と記してある、「む、岡部に川瀬が鎌倉へ來てるんだな、秋谷を襲ふかも知れないつて云つてたが、手紙なんか寄越さなかつたつて、出し抜けに驚かしに來るとい、二人共遠慮なんかする柄でもない癖に」と獨笑して、先連名の方から封を切つた

僕等は鎌倉へ來て居る、海水浴だけは愉快だが、夏の鎌倉は俗丁されて詰らない、東京に居ると滅多に東京の美人に御目に掛らないが、鎌倉に來て見ると、前後左右東京の美人だらけだ、東京に居ても、東京の美人少きに驚いた僕等は、鎌倉に來て反對に東京の美人多きに驚かざるを得ないのだ、けれども、僕等は空しく他家の花を眺める身に過ぎないのだ、之を、喜代子嬢の白薔薇を床に活け、お京君の紅芍薬にお種君の殘る櫻を下も手に置いて、花の中に起臥する吉田君の艶福に比べては、御話にも何にもなつたもんではない、最初は君を秋谷に襲撃する積りであつたが、見せ附けられるのは厭だから止した、癪に障るから手紙も出すまいと思つたけれども、勢ひ出さざるを得ざるに至つた

のは、君に就いての一大怪報に接したからだ、鎌倉では、専ら君が人殺をしたと云ふ評判だ、或は君が人に殺されたのだとも云ふ、殺したのか殺されたのか、どちらとも判然しない、君のやうな男は時に依ると人殺もしかねないし、又時に依ると人に憎まれて殺されもしかねないから、僕等は何方とも信ずることが出来る、だから、殺したのが眞誠か、殺されたのが眞誠か、明かに知らして寄越し給へ、其結果僕等は特に秋谷を訪ふかも知れない、返事は直ぐに出して呉れ

と讀了つて、俊郎は舌打した「人を馬鹿にしてやアがる、殺された者がどうして返事を出すことが出来るか、けれどもこんな事を云つて寄越す程だから、あの事實がまだ鎌倉あたり迄精しく知れ渡らな

いと見える、秋谷も思つたより偏卑な土地だ」次には喜代子の手紙を披く

其後は御機嫌が好くつて被在いますか、こちらには、水野の叔父様叔母様、それから春雄様綾子様も御出で、御座います、父も何か叔父様へ御相談があるさうで、昨夕不意に参りまして、秋谷に居ました時とはちがひ、大勢で賑かにして居りますの、父が急に貴方に御目に掛つて御話することがあると申しますから、どうぞ、此手紙御覽次第、直ぐに御出でなすつて下さいまし、御差支も御座いますせうけれども、是非大急ぎに……、停車場で、扇ヶ谷の水野別邸と被仰れば、車夫が存じて居ります素氣が無いやうな、厭味を含んだやうな何か工らみのあるやうな、妙な文句の手紙である、お負けに大事さうに書留にしてあるのである、首を拵つて考へた末「どうしても、行かなければなるまい、お

磯の家の相談は明日の晩にして貰はう」とむづかしい顔になつて獨話した

其六十三

秋谷へ来た日と同じ洋服打扮で、俊郎が鎌倉停車場を出たのは、其日の夕方近い頃である。車夫に任かして行くと、御用邸の前の通りを山手に迫つてから、左に折れて谷を穿ち、三方山に圍まれて、後に源氏山の旗立松を仰ぎ、高燥で且つ閑静な所に、立派な別荘造りの構へが三つ四つある。就中一番立派なのが水野別邸である。

俣の音に、蚤くも小間使らしい女が二個を關に現れた。「秋谷から俊郎が参つたつて、玉井の叔父へ傳へて下さい」と云ふと「はア、玉井様の旦那様へ御取次致すんで御座いますか、暫く御控へ下さいまし」と、厭に儀式張つて、二個共演劇の女中のやうに器械的に動き、つんと澄まして奥へ打込んだ。「は、こんな家が喜代子の氣に入るんだな」と冷笑つて、詰らなく思ひながら玄關に突立つて居ると、痾癢が起る程長く待たしてから、一個で済みさうなのを、又も前の通りに二個が出て来て「どうぞ此方へ」と四つの膝を並べる。

靴を脱いで、すつと通れば、一個は小腰を屈めて先に立ち、一個は同じ腰附で後に附く、いやどうも暑苦しい。

人の居ない座敷を二つ並べた前の楹側、それを行き盡すと、突當りに階子があつて、二階から、若い男が英語さちりに喋り捲る能辯の話聲と、若い女の他愛も無く笑ひ興する聲とが聞こえる、女の聲は二個で一個は喜代子、他の一個は水野家の令嬢で喜代子と大の仲好の綾子、それから男は綾子の兄春雄。俊郎より一期前に法科を出て、見學と稱し、半年ばかり歐米を経廻つて來た當世男と、一々聞覚えのある聲である、お種とお京とは何所にどうして居るか、矢張二階に居るけれども、座敷を隔て、長まつて、高い聲で晒ふことも出来ないのかも知れないと思つた。

二階へ案内されるのかと思つたら、さうでない、楹側に附いて折れ曲ると、突當つて上に向いた廊下がある、階子のやうに段があるは、高い所に通つて居るからである。

四段上つて、平面な所を一間ばかり行き、又三段上ると、見晴しの利く乾房で、其所に、喜代子の父照明が、五十近い額の抜上つた赭ら顔で、子供のやうな目と口とに笑を含み、上布の帷子を態とぞんざいに著こなし、縮縮緬の兵子帯を太い腹にぐるぐる捲著け、指程の周圍ある黄色の領をたらりと下げて、紅革の圓座蒲團に大胡坐を掻き、電氣團扇を控へ、呼録の紐を膝元近く腕らせ、葉巻を脚へて香氣に構へて居るのである、其状態、自分の家に居ると少しもちがはない。

玉井と水野との關係に就いては、俊郎は唯だ臆に其輪廓を知つて居るだけである、水野の主人が官途で重要な位置を占めて居る時、玉井は之と結托して、一舉に數十萬金を握り得たが、それから間も

無く水野は役を罷めた、其實罷められたのだと云ふ、所が、役を罷められてからの水野は、どうした理由か、銚細工のやうに身上が膨れ出して、四五年の中に、玉井に肩を並べる程の金持になつた、同時に、玉井との關係は一家の如く、玉井の家は水野の家、水野の物は玉井の物と云ふやうになつた、俊郎は唯これだけを知つて居る、直接自分の身に痛痒が及ぶ事ではないから、これ以上に深く探究めやうとは思はないのである

だから、水野の別邸の乾房を自分の物のやうに占領して居る玉井の態度は怪まれないが、かうして、人を遠ざけて唯一個居る所へ俊郎を呼んだのは、今が始めてであるから、どうせ尋常の事ではあるまいと、暗に事柄を推測つて臍を固めた

「あ、御苦勞だつた、洋服では窮屈だらう、それへ胡坐を掻くがよい、どうだ、秋谷は邊單で詰らなからう」何時も變らぬ、優しく情深く、人を引著けるやうな物の云ひやうである「え、案外に面白い土地です」俊郎は又例のぶツきら棒な挨拶「ふむ、面白いかね、聞けやア、非常な波瀾があつたさうだね」「え」と、俊郎は何所迄も簡單である

照明は少し濫い顔になつて、傍に置いてある新聞紙を取上げ、「此朱線を引いてある所を見て呉れ、記事はこれだけだが、所は秋谷とあるので、不思議に氣に掛つて、此所迄来て見たのだから、折好く喜代が来て居た爲に、委細を聞くことが出来た」と、俊郎の前に投出した、取つて見ると、三面雜報で

◎漁師の喧嘩(双方共に死す) 去る十二日相州三浦郡秋谷村沖合に於て、同村漁師小村久平佐

々木源八の二人喧嘩を始め、水中にて格闘の結果、双方共に無慘の死を遂げたりと云ふ

とあるのである

なアに、これだけの雜報が氣になつて態態隙潰しに来るやうな、そんな空想家ではない、喜代子がお愁か、何か云つてやつたのにちがひがないと、俊郎は暗に冷笑つた

其六十四

俊郎は眞面目腐つて「久平は實に惜いことをしました、漁師をしては居ましたが、非常の人物でした、十年餘り世界を廻つて、あらゆる冒険をやつて来た男です、學問は無いけれども大體に通じて、志を得たら、確に天下を動かすべき偉人でした、隠れたる人傑でした」と一生懸命に譽め立てると「大變譽めるぢやアないか」と照明は冷笑つたが、忽ち又優しい顔になつて「偉人だの、人豪だのと云ふ評語は、漫に下すべきではないが、兎に角、其漁師は尋常以上のものであつたらう、逢つて試した上で、相當の使ひ途もあつたらうに、犬死さして惜い事をした」と、例の情深さうな人を引著ける調子で云つたが、氣を變へて四角に顔を引締め「それはさうと、今日態々来て貰つたのは外の事ぢやアない、此久平と源八、漁師でも何でも、兎に角一個ならず人命を失つたのは、容易ならぬ大事故と